

九 『ロイヤル・オペラ』の見物

午後の茶は獨りで部屋で喫する方が、休まつてよからうと同情ある御言葉に、私は此日以来いつも自分の部屋で、時には和服に着かへて取ることにした。また時には私を案内してくれたパルムグレン氏なども請じて、主人氣取りと一緒に取ることもあつた。私はアンダーソン氏の博物館から歸つて靜かに茶をすまし、自分ながら不思議な運命の初日を顧み、なほこれから先の一週間が如何に成り行くかと思ひ廻してゐると、殿下は私の部屋へ來られ『何も不足のものはなきや、この王宮は昔の建築故、薄暗くして不便の點多きは辛抱してくれ』と仰せられ『さて今夜は丁度一同「オペラ」へ行くことになつてゐるから一緒に行かう、しかし君は燕尾服を持つて來たか』と訊かれたが、私は幸ひロンドンの菅野君から借用に及んで用意して來たので、それを着て「オペラ」見物の御件をすることになつた。

兩殿下の外に女官武官各一人、私とともに一臺の自動車に五人つめ込んで、ノルブロの橋のあたなる『ロイヤル・オペラ劇場』へ着いたのは夕食をすまして九時に近く、既に一幕の濟んだころであつた。外題は『ネロ』、ローマの史實を材料としたものであるが、舞臺の歌はもちろんスエーデン語であるから、筋道もよくわからなかつた。主役の俳優はスエーデン隨一の某氏が出るはずであ



アンダーソン博士夫妻と甘肅發見彩色土器(上) 同土器副葬古墓(下)

つたが今日は生憎病氣で代役が出で、女優の主役も咽喉を痛めてゐるから、御容赦を乞ふとの斷りであつた。その劇と音樂に就いては、私の如きこの方面に何の知識のないもの、評する限りでないが『ネロ』劇はその全體の構成聊か感心しないところがあるにせよ、とにかくその美しい舞臺と唱歌とに恍惚たらざるを得なかつた。私の隣に坐してゐた侍従長(?)の老人は、私に私語して『舞臺もキレイであるが、觀客席の花のやうなのを見給へ』と、『オペラグラス』を觀客席の方に向けてゐる。今日はこの「オペラ」の初日で、特別の觀覽者はかりであるから、ストックホルムの上流社會を殆ど網羅したといつてもよいのである。皇帝陛下は私達よりも早く既に御出でになつて、『ローヤル・ボックス』にをられる。殿下等もその内に這入れられ、私どもは固より凡て隣の宮内官の席に坐つてゐるのであるが、幕間に陛下が休憩室に行かれた時、殿下自ら私を陛下に紹介せられ、私は陛下の握手と懇切なる御言葉を賜はつた。十一時ごろ「オペラ」がすんで、陛下の御歸りを送つてのち、私達は殿下と共に王宮へ歸つた。

一〇 宮中の御生活

私はこの際皇太子殿下の宮中における御生活の一端を書きしるしたい。元來かゝる私的方面の御事を廣く世間に披露することは、如何かと思はぬではないが、殿下が如何に質素簡易なる御生活を送

られてゐるか、如何に家庭的空氣の裡に御暮しになつてゐるといふことを、世に傳へたいと思ふ眞意に他ならないのである。すでに記した如く、殿下が博物館などへ行かれる時は、自動車を持たせないうで、歸途は運動かたぐい、徒歩せられるのが常であり、時には飄然骨董屋の店へ立寄られることもある。また自動車も妃殿下と御一緒の時でさへ、女官と武官と私と凡て五人一臺の車に乗り込み、決して別の車を出されることはない。

宮中の晩餐においては「スモーキング」に服裝を改めることはもちろんであるが、平素は殿下自ら肉をカーヴし給ひ、「コーヒー」は妃殿下が親しく作られて、同席の幼い王子がこれを一同に煙草と共に頒たれるのである。食事の皿数は「スープ」とともに三つを越ゆることなく、飲料は「レモナーデ」の外赤葡萄酒一種を出さるゝのみである。しかも殿下は全くの禁酒禁煙黨であるから、御自分はこのれに對して全く無關係である。ストックホルムにある日、私は一夜舊知シレン博士の邸に晩餐に招かれた。席にはアンダーソン博士、ブルセウイツ氏などもこれに列し、數種の酒も出て中々の御馳走であつたが、シ博士は私に向つて『王宮の賓客に對して今夜の御馳走甚だ粗末なるを恥づる』旨謙遜せられた。私はその酒の種類において、食事の皿数において、其の他の點において、遙に王宮のそれを凌駕せる盛餐を感謝し、宮中における簡素なる御生活を話したところ、これを聞いて一同はむしろ驚きの目を見はり、事の意外なるに感じあつたことである。その國內においても宮中の事知

られざる、概ねかくの如しである。今日最も豪華の生活を送るものは王者にあらずして、恐らく富豪成金の徒であらう。

また私の感じたことは、食堂へ這入る際においても、王子方は決して私より先に入られないことである。父君の賓客としての禮を盡くされること、當然とはいへ恐れ入る外はなく、私は妃殿下の右に席を賜ひ、王子方は末座に坐られるのである。其の外には何時も女官ド・ラ・ガルダー嬢と武官シリエン大尉とが陪食することになつてゐる（これらの人は各一ヶ月の交替と聞く）。食事の間兩殿下は支那、日本における旅行の思出などを語り興ぜられ、笑聲も聞こえて中々賑やかであるが、食後は殿下の御部屋に入り、心安く談話しながら、或は殿下御聚藏の古物を見せられ、或は殿下自ら御作製の精しい藏品の「カード」目録に、私の意見を徴して之を記入せられる。末の王子は十歳位の腕白盛りであるから、その間長椅子の上から飛び跳ねなどせられてゐるが、やがて時間になると兩親の殿下に接吻して寢室に退かれ、私共は十時頃まで談話を續けて御暇をするのである。また宴會などがあつて、私獨り外出して遅く歸る時には、宮中の召使ひは十一時に寢に就かしむるからとて、表入口の鍵をもらつて行くこと、西洋における普通一般の家庭と少しも變らない。

かくの如く簡易質素なる日常生活を送られてゐる殿下は、同時に最も幸福なる皇族であらねばならぬ。人間としての自由、個人としての幸福をも凡て享受してゐられるに違ひない。私が窮屈や氣苦

勞を豫想したのはむしろ杞憂にすぎず、一日々々と「アト・ホーム」を感じて、後には他の晩餐會などに招待せられて行く方が、却つて氣苦勞を覺ゆる様になつたのである。之を見ても如何に殿下の宮中における御生活の家庭的であるかを知るべきと同時に、また私の如きものをも斯く感ぜしむる様に努められる、御心盡しの程を感激する外はない。實に殿下は皇太子として、また一個の紳士としてスエーデン全國民の愛敬を一身に鍾められてをらるゝことは、その「シムバセチック」なる御人格の然らしむる所であつて、これが宮中の御生活の凡てにも反映してゐるのである。

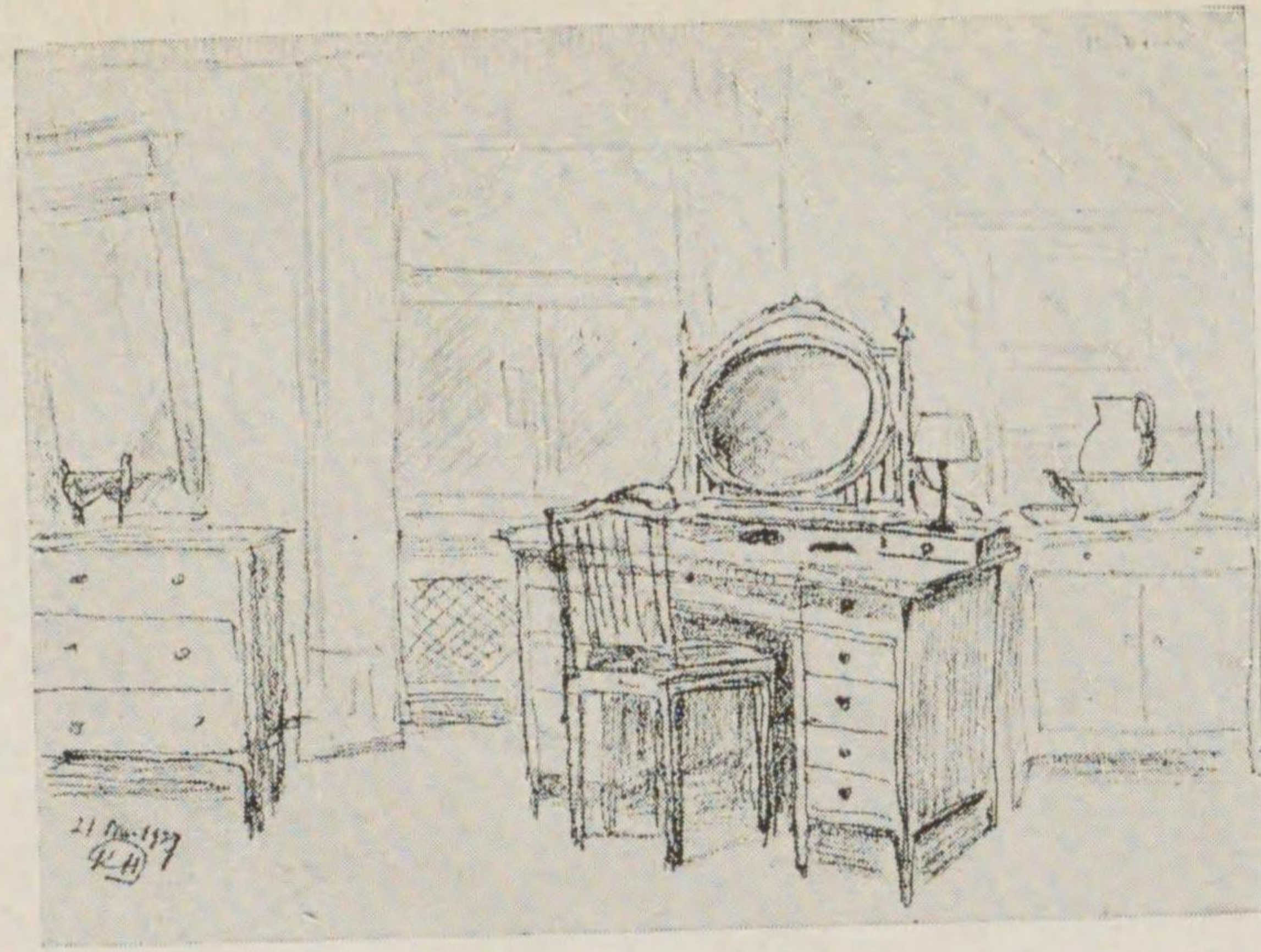
一一 李王殿下の御來著

私がストックホルムに滞在中、恰も歐洲各國御巡遊中の李王同妃兩殿下の、ノールウエーからスウェーデンに御來着になつたことは、在留日本人の少ない此の國に於いて、特に「日本デー」を現出したかの感があり、私としても最も嬉しいことの一つであつた。そこでスエーデン皇帝陛下は李王兩殿下を目下御居住のドロトニングホルム(Drottningholm)離宮へ御招待になり、午餐會を催さるゝこととなつた。それで私も幸にしてその末席に陪するの光榮を得た。この日私は朝十時から皇太子殿下とともに、ハルウイール伯爵夫人(Countess Harvill)の邸に行き、その所藏の支那古鏡や古銅器の類(いはゆる秦鏡數面あり、梅原君整理を助け、順序よく並べてある。弩機に細美な象嵌あるものも



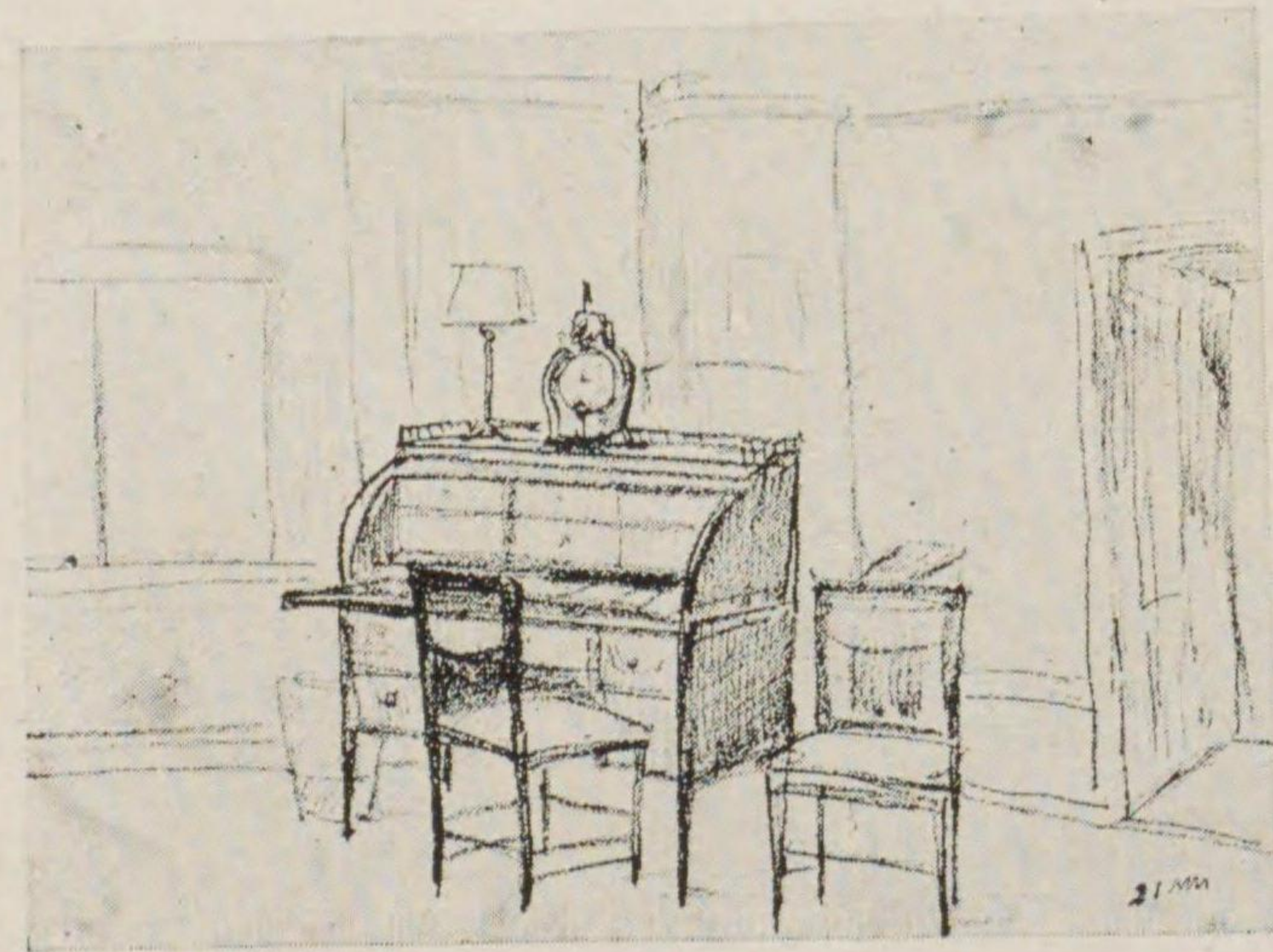
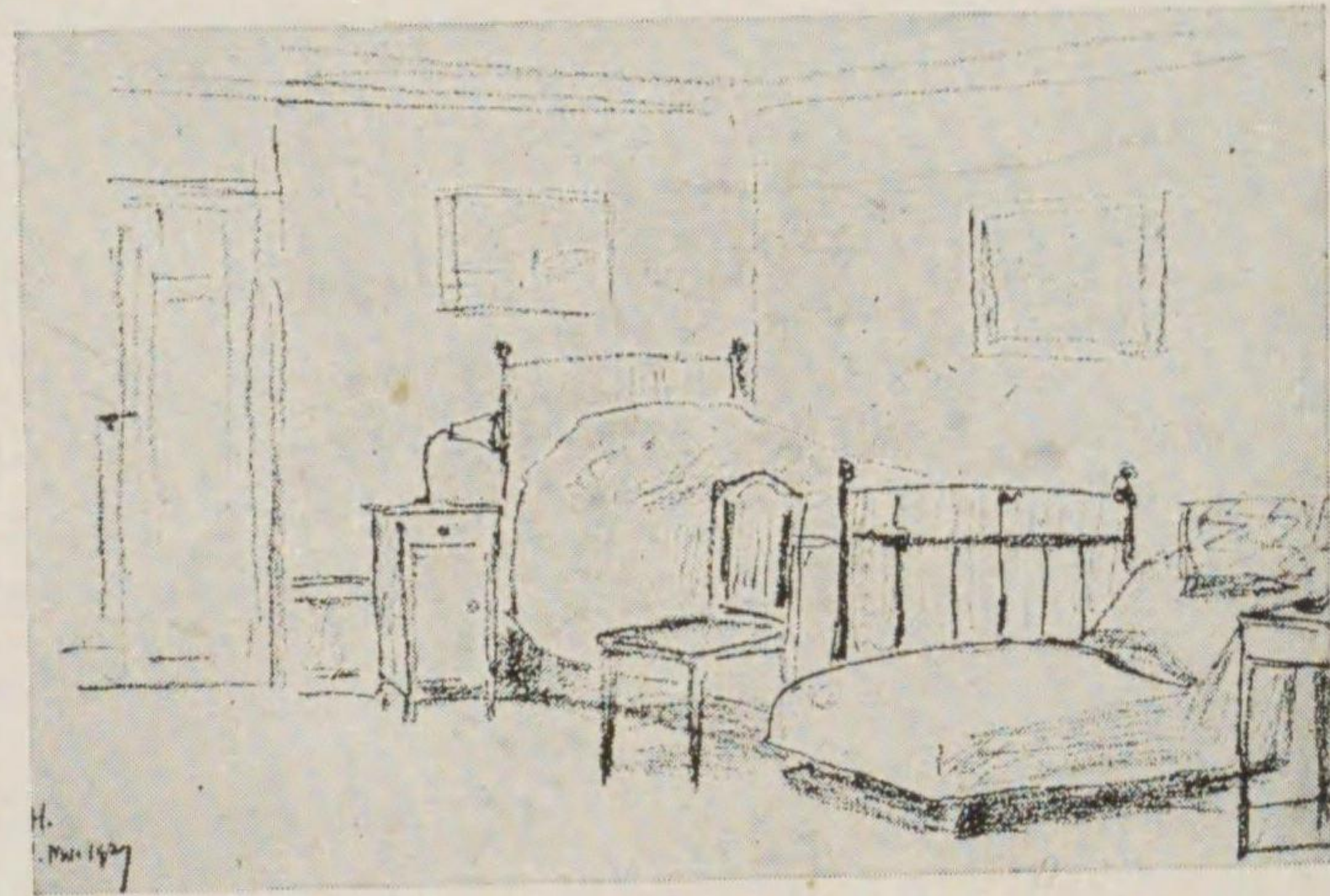
ストックホルム府ノルプロの橋

(青 陵 畫)



著者滞泊の部屋
 ストックホルム王宮内

上 寢室化粧室
 中 寢室
 下 居室書机



(青陵畫)

ある)の聚集を見たが、アンダーソン博士や皇太子妃殿下も後より來着せられた。こゝで餘りに暇取つたので十二時過ぎ王宮へ歸り、女の方々も十五分の間一同大急ぎに衣換へをすまし、私も兩殿下の自動車に陪乘して雪道を數哩、ドロトニングホルムの離宮へと急いだ。皇帝陛下は御年七十に達せられても、なほ壯者を凌ぐ御元氣で、今朝も老侍從長とともに雪中の狐狩に赴かれ、今しがた歸られたばかりとのこと。やがて李王兩殿下は篠田博士以下の隨員及び永井公使、柳澤書記官などと共に來着せられ、陛下から殿下へ勳章を御贈與になつたのち、見晴らしのよい食堂で鄭重なる午餐會が催された。そして食後離宮の各室を皇太子、同妃兩殿下が親しく案内せられた。

午餐會から王宮へ歸ると、アンダーソン博士の研究室に居るパルムグレン君(Dr. Palmgren)が私を待ち受けて、直に市中見物に拉し去つた。實に私はこの時始めてストックホルム到着以來、皇太子殿下と離れて別の行動を取り、博物館以外の新しい事物に接し、多少の買物をもする機會を得たのである。パ氏はまづ私を市民自慢の市廳舎へ案内してくれたが、これはごく最近に出來た建築で、メーレン湖畔に立ち恰もベニスのドーヂの宮殿に似た趣がある。しかもその建築は全く新しい様式に出で、或は『ネオ・ビザンツ』式とでも名づくべきものである。外觀も面白いが、内部の大廣間は金碧燦爛たる「モザイク」をもつて壁面を飾り、正面にはストックホルムの女神を大きく現はし、これが皆新しい畫風であるから凄じい。次に音樂堂で建築を見に行く。これも極めて新しい

様式であつて、内部の裝飾は特に善く出来て居ると思はれた。スエーデンの名産たる硝子細工オレフオイレスを賣る店などを見て、『パゴダ』と稱する高塔の新建築に登り、ストックホルムの美しい夕景色を一瞥してから王宮へ歸つた。殿下は私に市廳舎の如き新しい建築を好むやと尋ねられたので、私は餘り好まないが、面白いと思ふと答へた。然らば殿下は如何と御尋ねしたところ、自分は大に好きであると仰せられた。

この夕べは李王兩殿下御歡迎の爲め、日瑞協會の大晚餐會が『グランド・ホテル』の大食堂で開かれた。スエーデン皇太子、同妃兩殿下もこれに臨まれ、私もこれに列する喜びを得た。會する者日瑞人男女凡そ數十名。彼我兩殿下を始め一同悉く夕装に日瑞の勳章をつけ、日瑞の國旗や花卉を以て美しく裝飾した食堂で、盛燕が始まつた。やがて彼我皇帝陛下のために杯があげられ、兩國國歌の吹奏があつたが、私はこの時程『君が代』の曲に懐しさと嬉しさと、また嚴肅さを感じたことは多くなかつた。また嬉しかつたのは、スエーデン人中にブルセウイツツ氏を始め、グルート夫人の如く、日本語をかなり流暢に話す人を私の傍に見出したことであつた。かくて李王殿下の御挨拶の辭を以て、近來稀なる日瑞合歡の大宴會は閉ぢられたが、皇太子殿下は李王殿下の退去せられたのちも、なほ暫く歡談に時を移して、十一時ごろ王宮に歸られた。

次の日はスエーデン皇太子殿下が王宮の午餐に李王兩殿下を御招待せられた。この時は主客二十

人ばかり昨日の皇帝陛下の午餐會の儀式的であつたのに引かへ、これは頗る打とけた家庭的のものであり、食後は皇太子殿下の御藏品などを示され、篠田氏には特に高麗燒きに關して色々御話があつた。

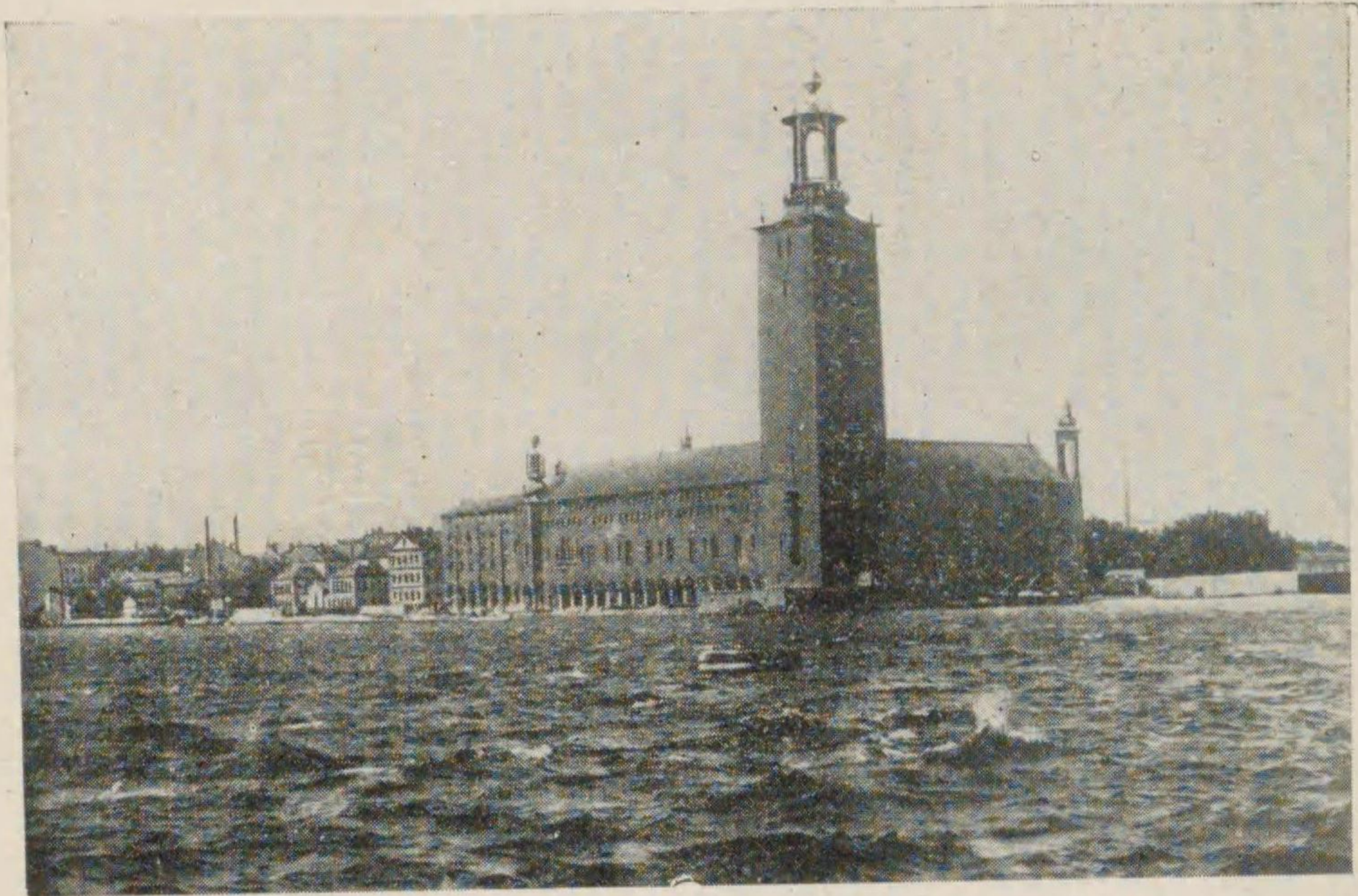
一二 博物館通ひ

スエーデン皇太子殿下が、アンダーソン博士の聚集品の御研究に熱心なるは、眞に驚くべきものがあつて、私のストックホルム滞在中、こゝへ御供をして行つたこと實に數回に達した。もし何か御差支があつて早く歸られても、その用事が済むと遅々ながらも再びやつて來られるのである。私も今度のスエーデン旅行の主なる目的の一はこの聚集品を見ることにあつたので、もとより多くの時間をこれに割くことは豫期してゐたところであるが、かくの如く毎日殿下と共に、日の暮れて燈火の點ぜられるころまで博物館に居残り、ア博士が一々女の助手に命じて持ち來らす甘肅彩色土器を、第一期から第六期に至るまで、順々に詳細なる説明せられるのを一緒に聽聞するとは思はなかつた。この土器に關するア博士の意見は、先年發表せられた以後に或は修正を加へ、或は「レザーク」を要するものがあるとのことであるが、これはやがて出版せらるべき報告書に俟つこととし、今はただそのうち第六期のものが「スキタイ」文化と關係あるものであるといふ、面白い事實をこゝに注

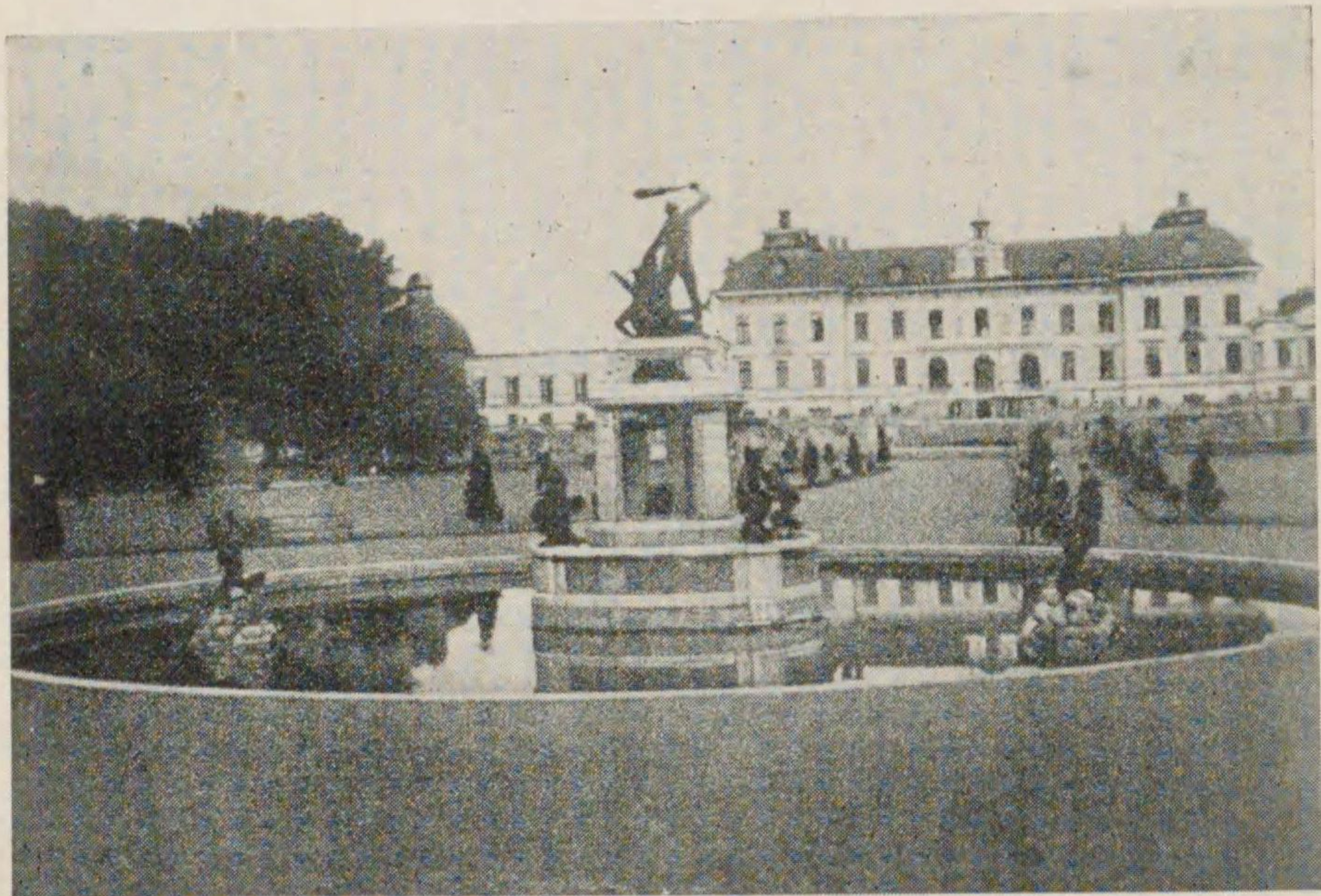
意して置くに止める。

皇太子殿下は或日私に「アンダーソン博士は體力強健、勢力絶倫の人で、昨年北京で朝から晩まで自分を骨董屋に引き廻し大に閉口した。君の如きは餘程注意をしないと身體を壊はすかも知れぬ」と戯れられた。然るに同じ日博物館で中食の時アンダーソン博士は私に「皇太子殿下の精力絶倫なるは驚くべきものがある。昨年北京では自分もスツカリ弱つたほどである」と、これまた同じ事實をもつて余に注意せられた。それで私はその日王宮の晚餐の席上でこの話をして、その何れが眞なるや判じかねることを附言すると、妃殿下は「それは雙方とも眞實なるべし、とにかく君は恐るべき二人の間にあるから、よく身を守らざれば、健康を害すべし。恐ろしきは博物館と古物なり」と哄笑せられた。實にアンダーソン博士と皇太子殿下とは、余に向つてストックホルムの冬の日の短くして、殊にア博士の博物館に未だ照明の設備不完全なるを嘆ぜられたが、私自身はこれをもつて唯一の救済を感じたのである。もしそれ北歐の夏の日の九時ごろまで日暮れず、精力絶倫なる二學者に朝より夕に至るまで引き廻されるならば、U君の如き人はいざ知らず、私の如きは數日を待たずして仆れてしまつたに違ひない。

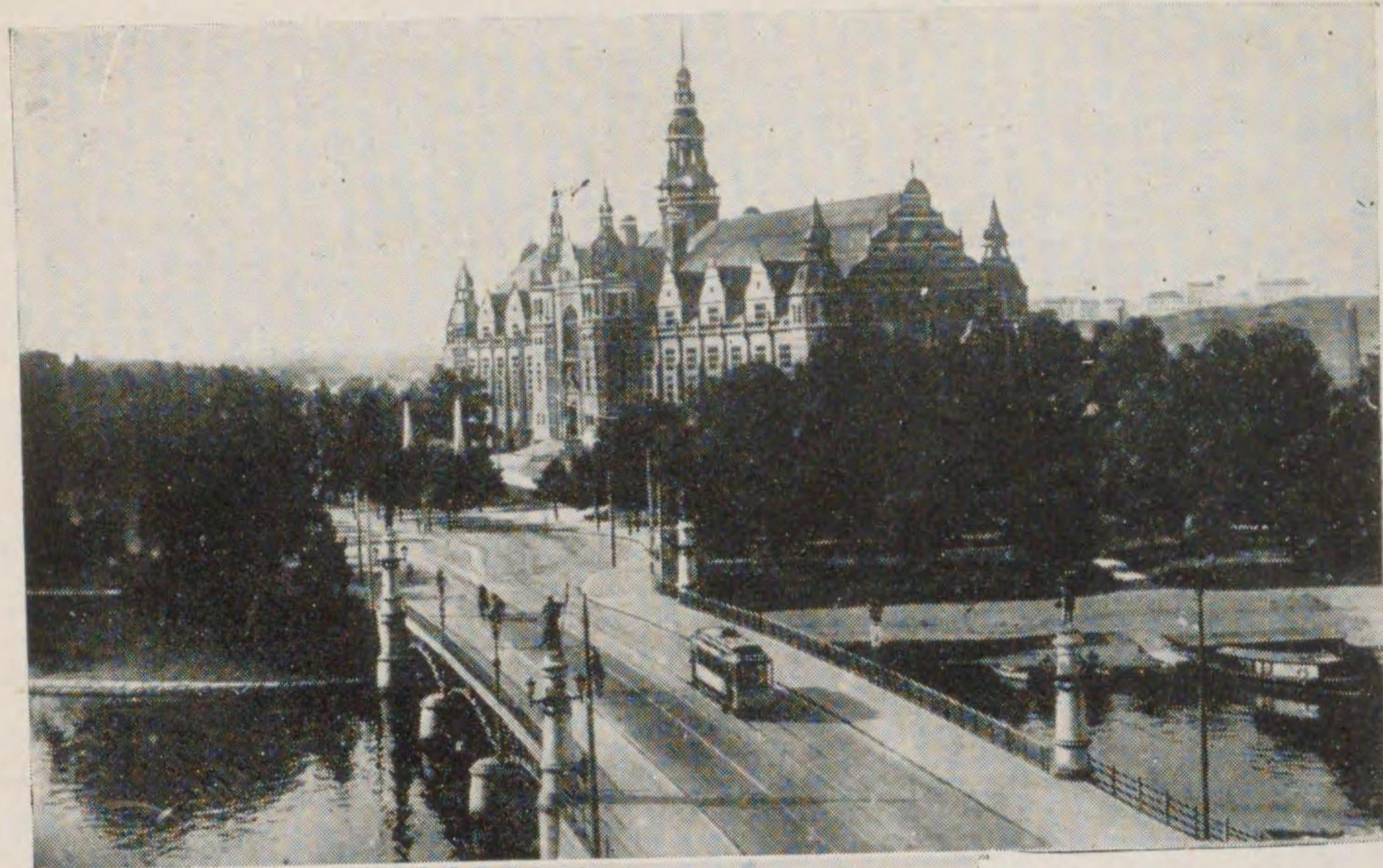
アンダーソン氏の聚集の外に、なほ考古學的の品物を藏してある處には國立博物館がある。その初階は即ち歴史部であつて、こゝには石器時代以降青銅器、鐵器時代の遺物をはじめ、「ゴシック」



ストックホルム府市會議事堂

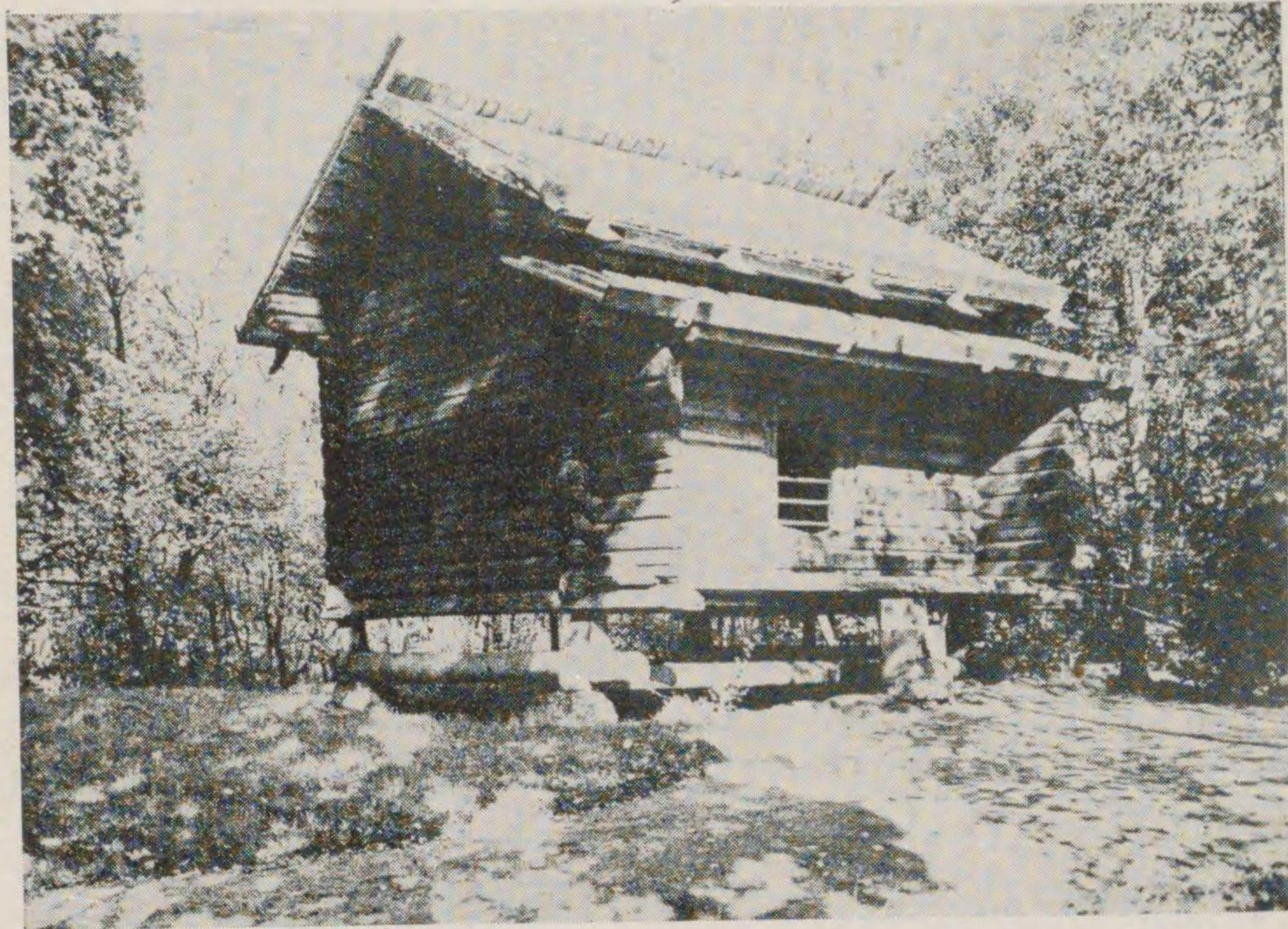


同府附近ドロチングホルム離宮

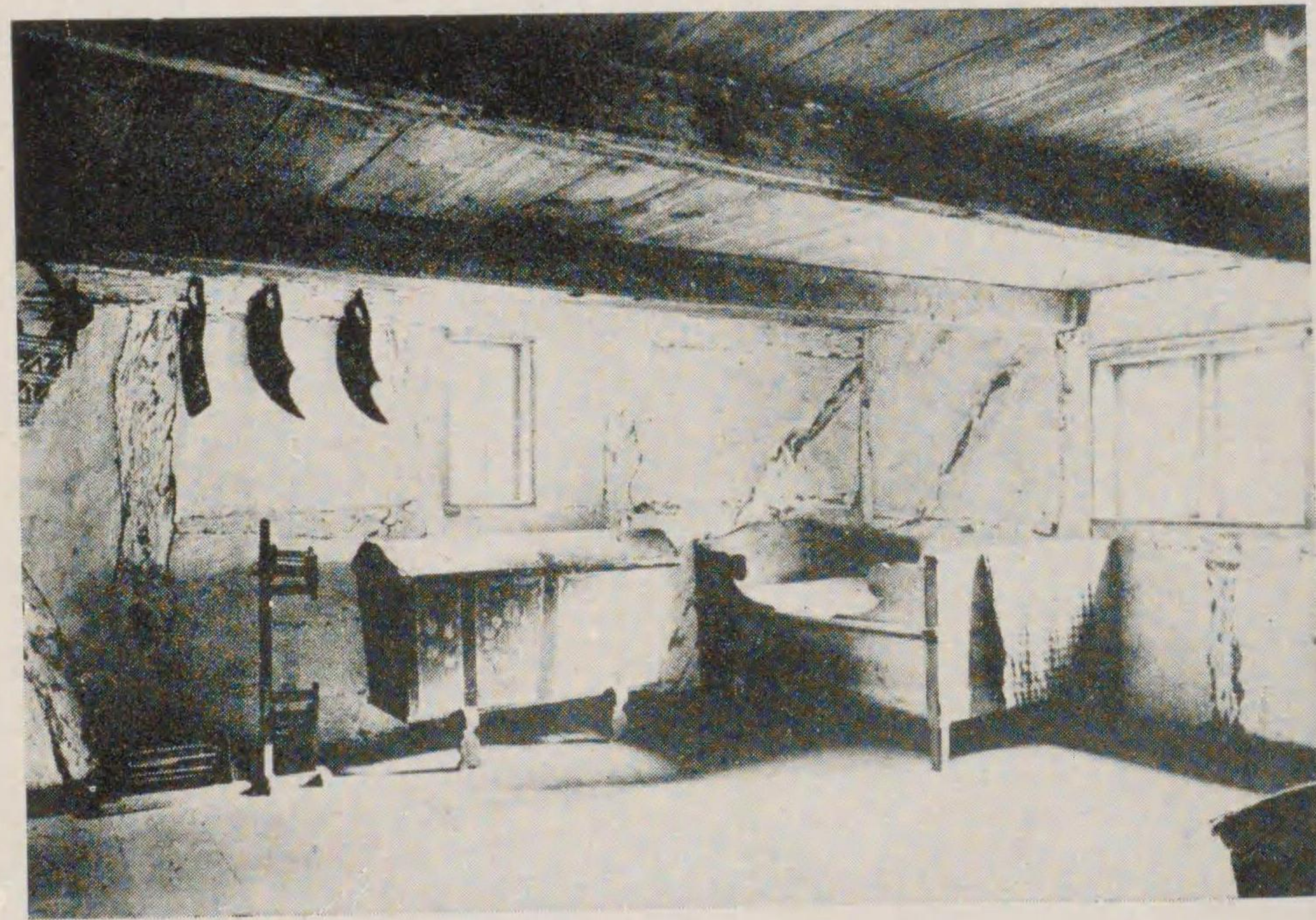


(上) ストックホルム府北方博物館
(下) ストックホルム府博物學博物館

(梅原君寫眞)



モ
ー
ラ
の
小
屋



ラ
ウ
ル
ン
ダ
民
家
の
内
部

ストックホルム府スカンセン野外博物館

ヴァイキング時代などの品物をも並べてある。就中その石器、青銅器は數年前物故したスエーデンの大學者オスカル・モンテリウス (Oscar Montelius) が、型的順序に配列した資料であつて、我々現代の考古學者は、實にこの資料とこの學者の指導に待つことが多いのである。

十八日の朝皇太子殿下と私は王宮の横口から大雪の道を徒歩して、『グランド・ホテル』の向ふの國立博物館へ出かけた。折しも李王殿下の御一行も「ホテル」から自動車を連らねて、同じく此處へ御出でになり、門前に活動寫真班の襲撃を受けられてゐるところであつた。そこで皇太子殿下は「これは閉口」と暫らく岸邊を逍遙し、李王殿下等の館内に入られた時を見すましてソツと内に入り、李王殿下の階上にをられるのを幸ひ、階下の諸室を見物することにした。石器時代物は恰も整理中であつたが、館員某氏の案内を得て詳しく見ることが出来、なほ階上の支那遺物 (玉銅陶器各種、漢畫像石一枚あり) をも一見した。私は入口でこの館の目錄とモンテリウス氏の編纂に成る圖録とを求めようとする、殿下はそれは自分が買ふからと「ポケット」から金を出して私のために購はれた。私は殿下の御厚意に感謝するとともに、この館の番人が殿下だと否とを問はず、正當にその代價を請求する態度に感服した。

この博物館の美術部は次の日シレン博士の東道によつて一巡した。伊佛等の外國の繪畫もあるがその主なるものはもとよりスエーデン畫家の作品である。十九世紀初葉においては「ロマンチック」

にして且つ國民的であつたが、この國の繪畫は後には頗る世界的様式に變化して行つた。しかしまた特にスエーデン特有の様式を出した作家も出で、遂にスエーデン繪畫の黄金時代を形成した。ダヨセフソン、クロンベルグ、ラルソン、ツオルン、ローゼン等をはじめ、皇太子殿下の御叔父に當るオイゲン親王の如きは、即ち當代の代表的畫家である、而してこれらの人々の作品はこの館において悉く代表せられてゐるが、今一々これを詳しく記す違もなく、また充分見る時間もなかつたことを遺憾に思ふ。

一三 ウプサラ大學の一日

土曜の夜から日曜にかけて皇太子殿下は西瑞ヴェネルン湖の北岸カールスタット附近へ、第二王子の入學してゐられる學校へ行かれることになつた。そこで二十日の日曜は殿下の御話によつて、日瑞協會のブルセウイツツ氏が私をウプサラ大學へ同行して下さることゝなつた。ブ氏は王宮に私を誘つて、ストックホルムの驛を十時に發車し、雪のスエーデンの田舎を眺めながら、十一時ごろウプサラ(Uppsala)に着くと、大學圖書館長アクセル・ネルソン氏(Dr. Axel Nelson)は我等を迎へられ、親しく各所を案内せられることになつたのは嬉しかつた。今日は特に日曜の爲めか此の古い大學町の淋しく靜かなることよ。しかも雪空のつめたく寒き事よ。外套の襟を立て首卷に頸をちぢ

め、枯木の丘の上を登つて、圖書館『カロリナ・レデウイヴァ』(Carolina Rederiva)に行く。休館日であるに拘らず、室内の暖房は通つてをり、書庫、閱覽室その他各室の新しい設備を見せてもらつたが、不思議なのは、この圖書館の書物の脊に番號札の貼付けてないことである。ネルソン氏にこれを質すと、それは書物の美觀を害するゆゑ、こゝでは一切これを貼らず、たゞ表紙の内側に番號をつけるのみであると。實に書物を愛すればかくあるべきであつて、如何なる小さい研究室でも、また自分の書齋の書物にまで、番號札を貼るのを喜ぶ日本などは、全く行方が違つてゐるのを非常に嬉しく思つた。かのツンベルグ(Thunberg)の携歸した日本の地圖(江戸、京、長崎等)や、植物書(野山草等)には或は彼自身の書入れもあつて懐しく、スエーデン王室歴代の文書の保存せられたものをも見せられた。また階下の陳列室には古印本貴重書籍などを並べてあるうちにも、特に有名なのは『銀文聖書』(Codex Argenteus)である。なほネルソン氏はブルセウイツツ氏と、もに震災のために亡失した東京帝國大學へ、スエーデンから寄贈の書籍を聚集せられ、その冊數すでに莫大の數に達してゐるのを、目のあたりこの圖書館において見せられたのは喜ばしかつた。

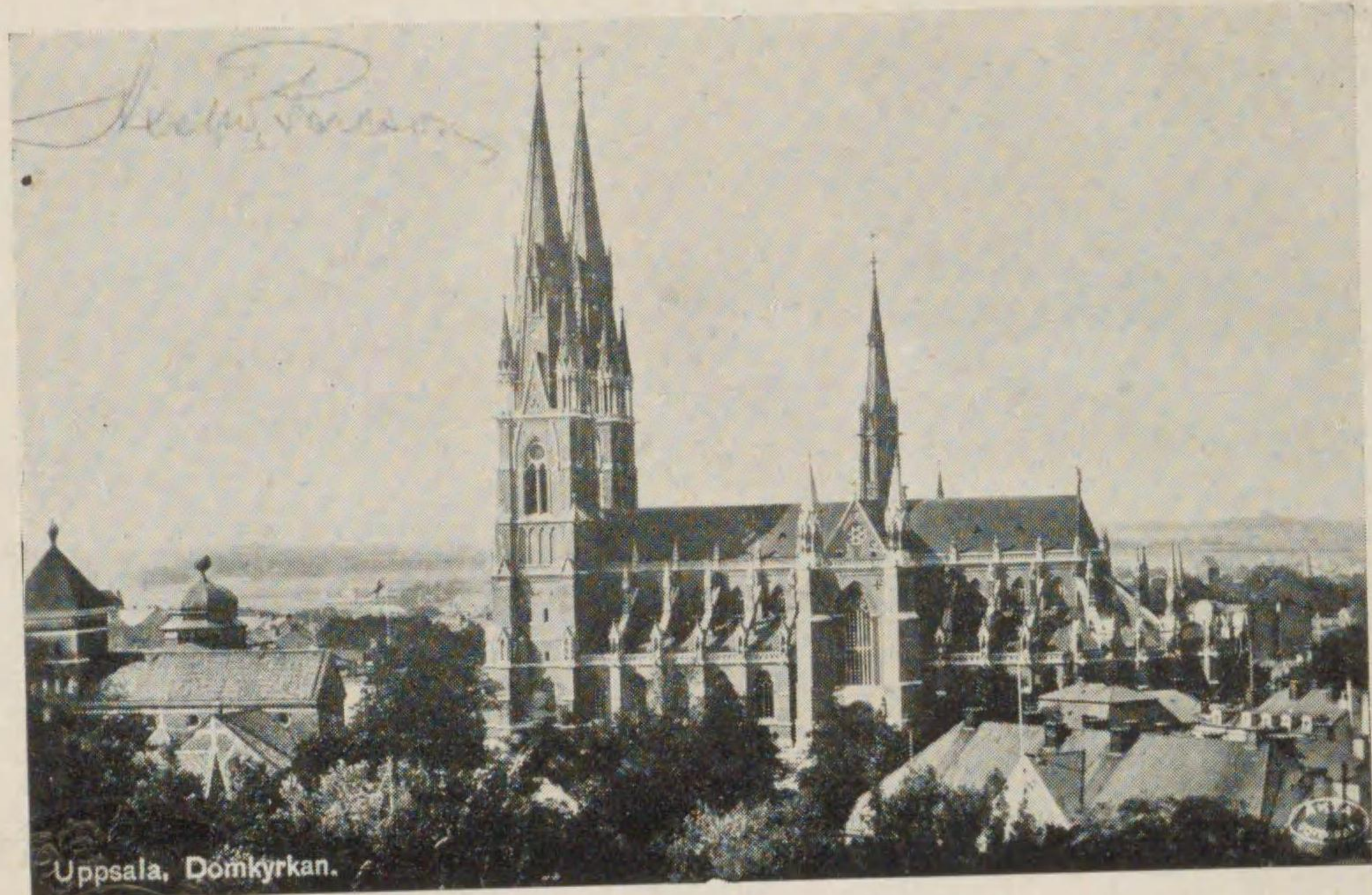
圖書館を出て次に丘上の大きな赤煉瓦の古城に行き。その一室にあるスエーデン皇太子殿下保護の下にパーソン博士の發掘したギリシヤのアジーンネ(Azine)の遺物を、發掘に携はつた年若い某君の案内に由つて見ることを得た。その數百千にも餘る土器と破片とは、徐々として整理せられつゝ、

あるが、容易ならぬ大事業と思はれた。なほ伽藍の前の小博物館中にも、その發掘品の一部を移して、整理修復をやつてをり、こゝには土偶や青銅器などもあつた。

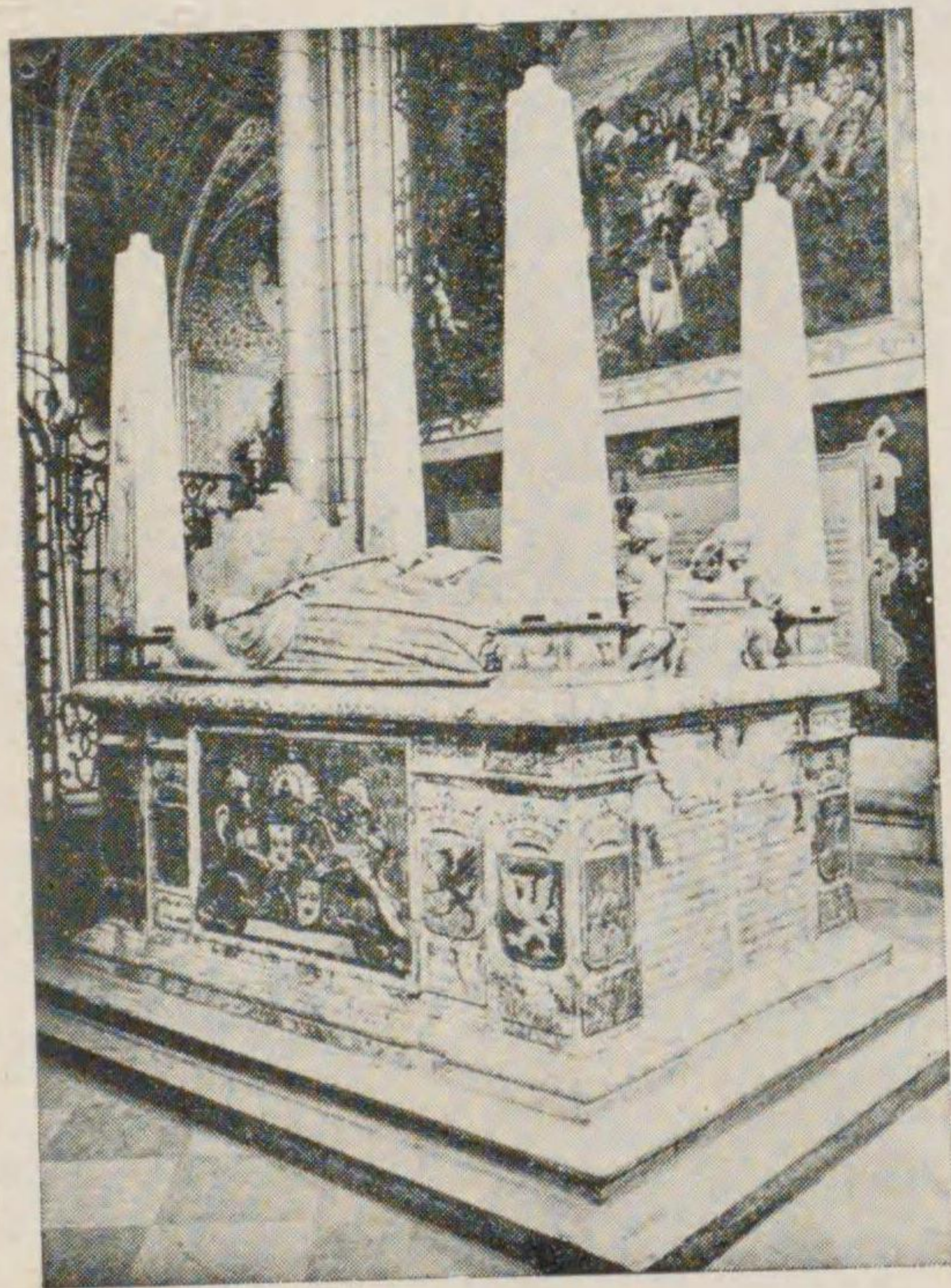
我々は次にウプサラの大伽藍に入つた。これは十三世紀から十五世紀にかけて造營せられた「ゴシック」風の大建築であるが、その後の手入も多く古趣の甚だ乏しいのを憾みとする。しかしこの歴史的古都の大伽藍には、國祖グスタフ・ワサ王(Gustavus Vasa)の廟もあり、今なほ即位の大典などもこゝで行はれるといふ。植物學者リンネの墓の如きもまたこの寺にある。寶器室にある大僧正の法服の中には、支那製の刺繍があるから特に見るやうにと、皇太子殿下の御話であつたが、陳列品中には一向それらしいものを見ることが出来なかつた。

ウプサラの北二マイルばかりにガムラ・ウプサラ(Gamla Uppsala)といふ村がある。これは今のウプサラの市街が出来る以前の發祥の地である。私どもは自動車を驅つてこの寒村を訪ひ、教會堂の床下から發掘せられた基督教以前の異教の古寺の遺壁を窺ひ、また附近にある雪に被はれた王塚と呼ばれる古墳へも登つた。これはかつて發掘せられて鐵器時代の遺物を出したと云ふ。

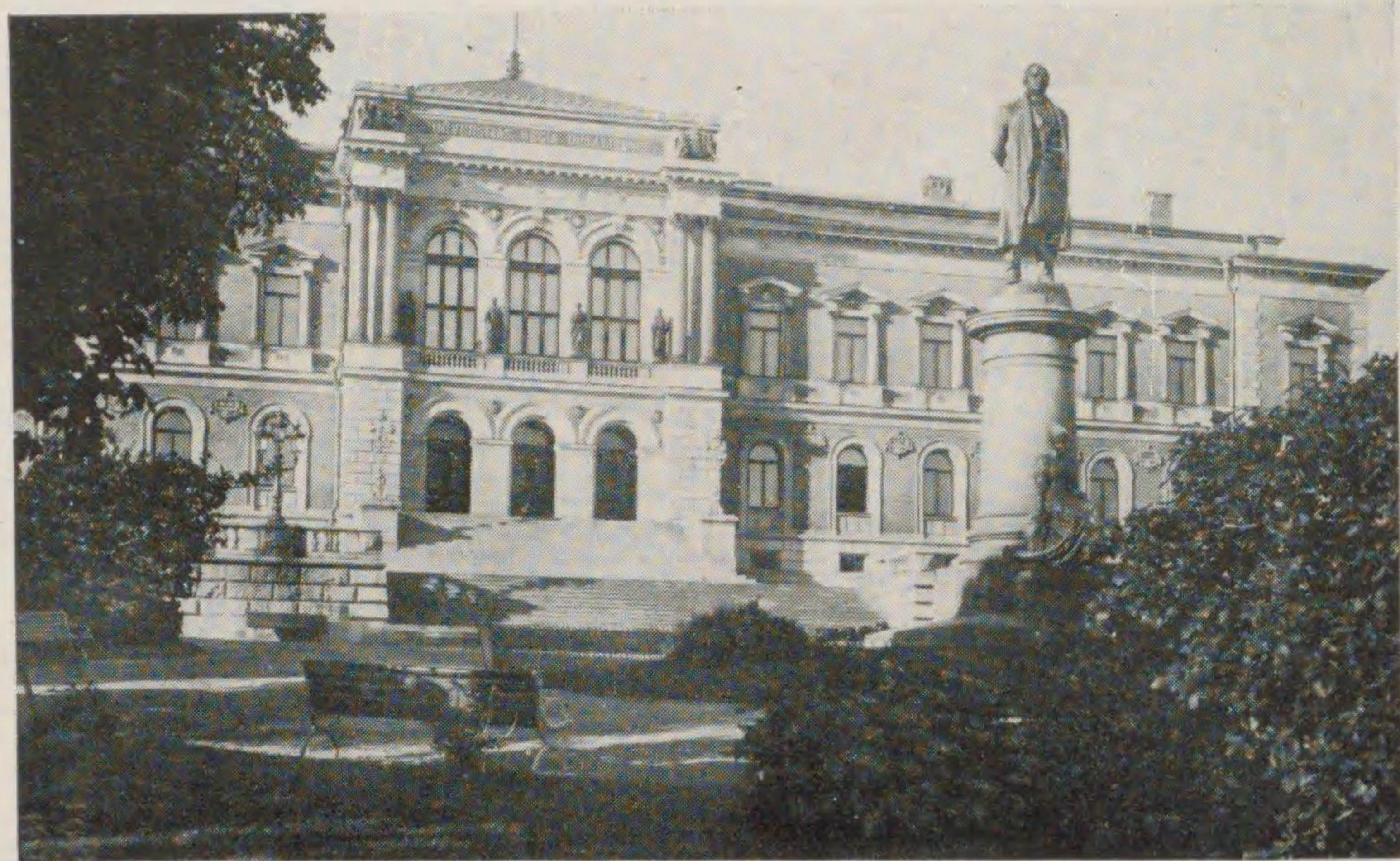
午後三時に近くウプサラの町へ歸つて來た我々は、「ホテル」でスエーデン特有の前菜澤山の中食に腹をこさへて後、伽藍附近にあるウイマン教授(Wieman)の古生物學教室を訪問して、アンダーソン氏が支那山東で化石獸類と共に發見した、いはゆる人類の白齒なるものを一見したが、學究的



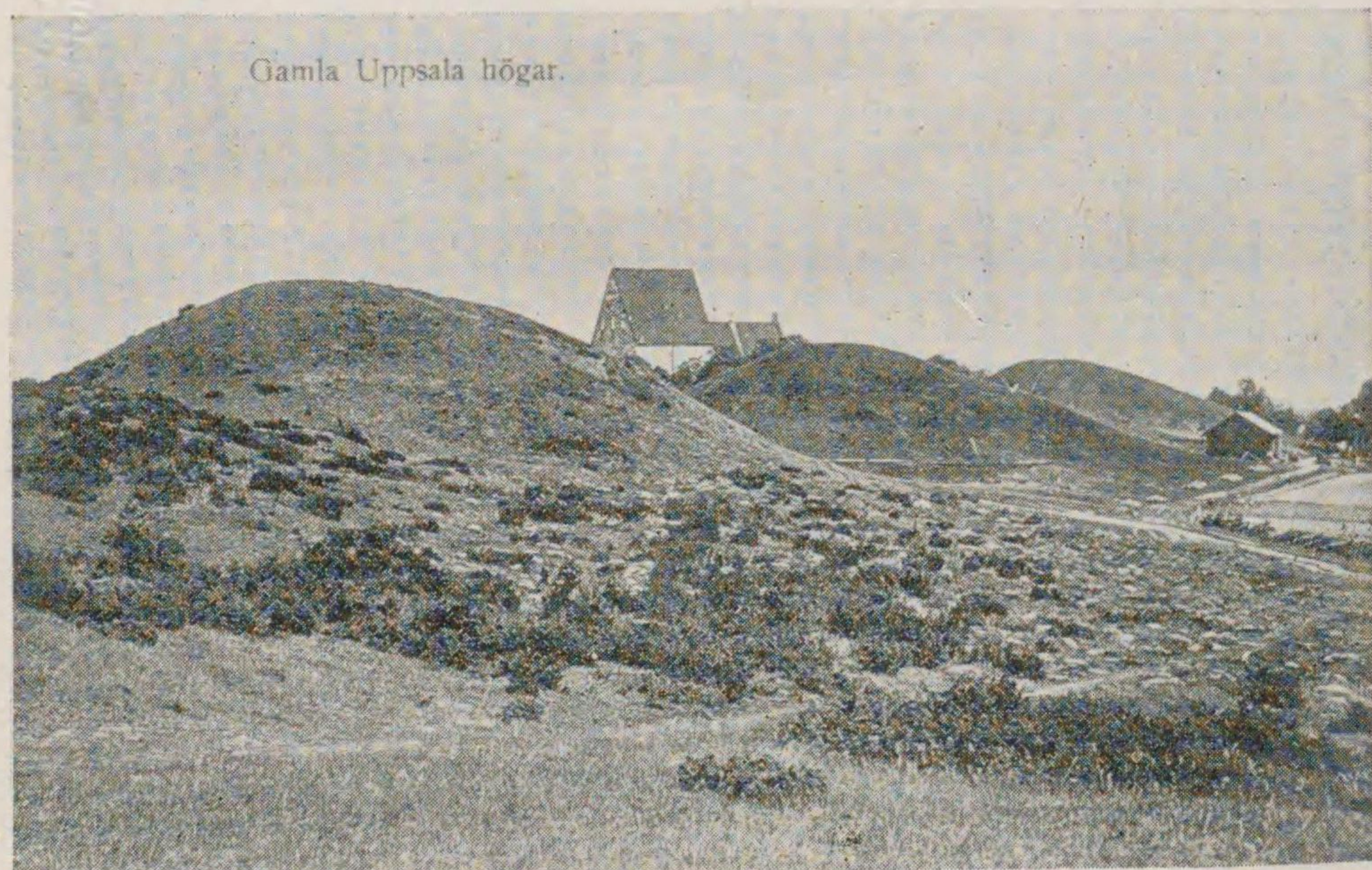
Uppsala, Domkyrkan.



(上)ウプサラ伽藍全景
(下)同内部ワサ王陵墓



アップサラ大學本館



Gamla Uppsala högar.

ガムラ・アップサラの古墳

にして全く山氣のないウ教授は、之を人類のものなりと断定することを躊躇すると述べられた。それから薄暗くなつた中を大學の本館へ這入つて、教室その他を見せてもらった。羨ましく思つたのは、各分科の教授會議室のドッシリとして立派なこと、珍らしく思つたのは事務室にも繪畫の額が澤山掛けてあり、しかも女の裸體畫さへあつたことである。なほ道の序に某町のある大學生の俱樂部を覗いたが、これは各地方別に設けられてゐるので、なか／＼設備が善く出來てゐる。たゞ近來女學生もこれに加入したため「スポイル」されたと聞いた。

ウブサラの一日はネルソン氏の案内のもとに、最も能率をあげて五時頃その見物を終つた。そこで六時の汽車までの間をネルソン氏の家で休憩することとなり、立派な書齋のうちで心盡しの茶の饗應に預かり、なほ同氏自著の『ウブサラの歴史』や、同大學教授ヒヤールネ(Hjorne)氏の『日本歴史』などを贈られ、同君に送られて名残り惜きウブサラを出發して、ストックホルムへ歸つたのは七時過ぎであつた。今夜は宮中には皇太子殿下は御留守であるから、自分の家の晚餐にとブルセウイツ氏に待受けの自動車に私を乗せて、北郊ジユルスホルム(Djursholm)の邸へ連れ行かれ、優しい夫人や可愛らしい子供と静かな夕食を取り、スエーデンにも稀な日本人ビイキの人の家庭に、愉快なる夜を更かした。

一四 北方博物館とスカンセン

皇太子殿下の御伴をして、たゞ考古學の研究に忙殺され、アンダーソン博士の研究室通ひに追はれてをつた私は、ストックホルムへ来てこのかた數日にもなるが、未だジュールガルテンの島へ渡つてスカンセン(Skanssen)と北方博物館(Nordiska Museet)を訪ふ暇を有しなかつた。この二つのものは、或る意味においてストックホルム特有の名物で、スエーデン全國をこゝに縮寫した小世界であるともいへる。私は十九日の夕暮バルムグレン君に連れられて雪のスカンセンに登り、ブレダゴリツクの見晴らしから夜の眺望を恣まゝにし、木造のスエーデン小屋の茶亭ブラゲハルレンに入り、美しい田舎の風俗をした給仕女に侍せられて、スエーデン固有の菓子を食べ、暖い部屋に考古學から離れて、心ゆたかに文學と繪畫の談に耽けるを得たが、各地方を代表する小屋は既に閉ざされて内部に入ることが出来なかつた。そこで二十一日の朝から再びスカンセンを訪ひ、またその傍なる北方博物館を、アンダーソン博士自身の東道によつて觀覽することになつた。

ジュールガルテンの橋を渡ると、目の前に見える赤い石灰岩の大建築が、すなはちこの北方博物館である。十六世紀頃のスエーデン城塞を模したいはゆるワサ式なる様式に屬する。而して左手の丘はすなはちスカンセンの野外博物館であつて、この二つのものは互に相俟つて一つの完全なるス

エーデンいな北歐の土俗博物館を構成するのである。この世にも稀なる珍らしい博物館は、併し決して一時に國家や政府の力で出現したのではなく、ハゼリウス博士(Artur Hazelius)なる一人の學者の獻身的熱誠によつて、遂にかくの如きものとなつたことを聞く時は、ますます其の床しさを感ずるのである。

北方博物館へ着いたのは開館前の十時ごろ。先づ事務所へ行つて、親切な美しい女館員から種々の出版物を貰つて本館へ入る。この館の番人は皆なスエーデン固有の風俗をしてゐるのも嬉しく、曾て南佛プロヴァンスにアールの博物館を見た時と同じ心持がした。中央大廊の正面にはワサ王の大像を飾り、皇室關係の馬車、甲冑、武器などを並べてあるが、この廊の前後兩側は二十八區に分つて、スエーデン各地方の農民家屋の室内を其儘に移し、家屋萬端を示してゐる。又二階は各地方別或は品目別に、各種の器具を陳列してある。私は之を見て今更ながら木器木皮器類が、原始的生活に如何に重要な意義を有し、金屬器その他の形式なども、此等に求むべきものが多いかを感じた。三階には各時代の上流社會の室内風俗などを現はしたものがあつた。しかしこれは多く佛國流を模したものであつて、たゞ時代を溯るに従つて、なほ土俗を存してゐるものが多いことが注意せられる。私は時間が押しつまつて、たゞこの館の大體を一巡したに止まり、この最興味ある博物館を、再訪することさへ出来なかつたのを限りなく残念に思ふ。

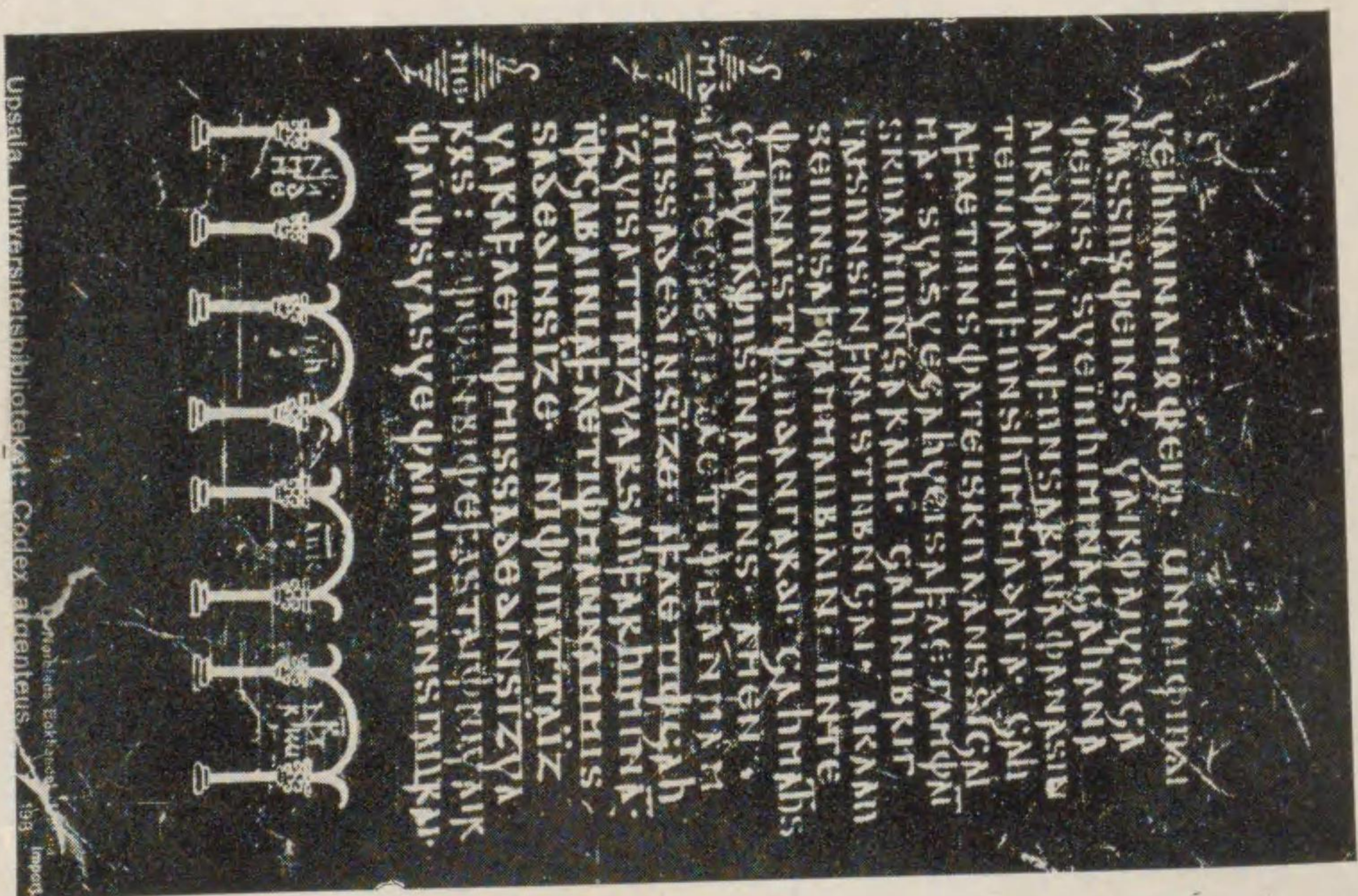
雪のスカンセンの丘に登つて行き、今日はラップ人の小屋、校倉造りの倉庫などを見て、各地の農民小屋三四の内部へも這入ることを得た。暖かい爐邊に坐して煙草をくゆらす老翁、刺繍にいそしむ娘、凡て古い土地の服装をして、北方博物館内に靜的に保存せられてゐた生活が、こゝでは動的に表現せられてゐるのである。融大臣の鹽釜ではないが、たゞ生きた人間が幾分見世物の如く取扱はれて、この淋しい丘上に朝から晩まで、自由を束縛せられてゐる感のあることは問題であらう。それは兎に角、かくの如く日に月に亡びゆく固有の風俗生活を、保存せんとする運動は、スエーデンをはじめ歐洲各國においてなかく盛んであるが、我國においてまだ一人のヘゼリウス博士は出でないか。しかも年々美しい固有の風俗は失はれ、歳々古い國民的生活の記念物は減びつゝあるのである。これらは國寶や歴史的記念物或は天然記念物とともに、我々の永久に保存すべきものたることは言ふをまたない。今にしてこれを博物館に聚集し、これを文獻圖畫に収録するにあらざれば、悔いを千載に貽す日の來るべきこと、火を見るよりも明かである。

一五 博物館

私の生涯を通じて最も記念すべきストックホルム王宮の一週間はいつしか過ぎ去つた。私はかねてより殿下に、最後の一日は「ホテル」へ退いて、全く自分の自由に使ひたいことを御願ひしておいた



シハミツガ像(一七〇〇年版日本旅行記扉畫)



ウプサラ大學藏銀文聖書 (コナクスマアルヂエンチカス)

が今や其時となつた。十一月二十一日の午前は、北方博物館とスカンセンに費し、晝は永井公使の許に招かれて、福田君と共に久々で日本食の御馳走に預かつてから、殿下と御一緒にアンダーソン博士の研究室に午後五時まで、甘肅土器の説明を聞いて王宮に歸ると、遂に名残惜い最後の晚餐となつた。食後は例の如く別室の長椅子に倚つて、兩殿下と御話しをしてゐると、今宵はいつになく早く過ぎゆくかと呷たる。九時半になり、さてはいよいよ御別れと、兩殿下を始めド・ラ・ガルデ―女史シイレン大尉に、日ごろの厚情を謝し、握手を交して王宮を出る。

『ブランド・ホテル』の二階正面の部屋に落付いて、窓外を眺めると、ちやうど目の前にあるノルブ口の橋の彼方に巨人の如く巍然として聳ゆる王宮。あの邊が大廣間と食堂、あの窓のあたりが私の居つた部屋であらう。深夜フト眼を覺ませば、室内は春の如く暖いのに引きかへて、ガラス窓の外に取付けてある寒暖計は零下二三度を示し、『獅子階段』の上には銃を荷つた兵士が影の如く行きつ戻りつ寒さと戦ひながら、王宮を護つてゐるのを見たことも思ひ出される。また殿下と、もに幾度かあの階段の雪道を上下して、博物館通ひをしたことであらう。それらも今や過去の夢と化し去つたのである。

「ホテル」の朝は久し振に宮中よりも一時間の朝寝をして、十時に起き出でると、無用の長物と思つた卓上の電話は強く鳴り響いて、アンダーソン博士や、ブルセウイツツ氏から話があつて狼狽をし

た。實は今日ス府における最後の日も悠々と心のまゝに遊ぶことが出来ず、見残しの博物學へ行かねばならないのである。十一時自動車を驅つて北郊數哩博物館の前に到れば、かねて約束のアンダーソン博士は門前の雪の中に立つて居られ、直に私を案内して先づ本館の地質鑛物の室に到り、それより博士と別れて別館の古植物、本館の古動物等の諸部を見た。此等について一々詳しく記す暇もないが、この博物館の建築の壯麗なることは、かの北方博物館と比肩し、その研究室陳列室の完備して、教授諸氏の熱心研鑽に従事せられてある有様、實にスエーデンの誇りは此處にあるかと思はれた。而してかくの如き科學的研究の基礎と態度とをもつて、考古學の研究を築き上げつゝあるスエーデン斯學界の前途を祝福し、且羨望する外はなかつた。私は最後の一日をこの専門以外の博物館に費して、却つて如何ばかり大なる利益を得たか、豫想外のものゝあることを感じた。特にステンシヨウ教授(Tensio)の古動物の研究室において、その器械器具の設備の詳細を示され、紙箱の製作まで自ら行ふにもかゝらず、頗る少數の研究員をもつてこれに當り、銳意熱心業績を擧げられてゐる實状を見て、感嘆を禁じ得なかつた。總じてこのスエーデンでは、大學なるものは教育を主とし、博物館こそ研究をやるどころであり、その研究員の多くは教授の稱號を有してゐる。而して私は實にこれが本當のやり方であらうと思ふのである。

私のストックホルム見物はこの博物學の訪問をもつて終了した。二時頃宿へ歸つて中食を済ます

と、王宮から電話があつて、殿下の御用があるといふので出かけて行く。實は私自身も安全剃刀などを寢室に忘れて來たので、どうしても行かねばならぬと思つてゐたところである。殿下のために朝鮮慶州の古瓦の出所などを書き記してのち、兩殿下に御目にかゝつて、折柄の茶をいたゞき、また記念にとて兩殿下の御寫眞を賜はり、再び御暇乞ひを申して退出した。

一六 ストックホルムの別れ

美しいストックホルムは最後の夕暮の幕に包まれて行く。實にこの『メーレン湖の女王』ストックホルムは『北歐のベニス』と稱せられ、或人は又これをコンスタンチノーブルに、或人はまたそのバルチック海からの入口の景色を、聖ローレンス河、シドニー港、或はまた日本の海灣に比べる人もあるといふ。しかし、マクス・ノルダウ(Max Nordau)がストックホルムの特徴を分析して

『スコットランド湖水地方の少部、ナポリ海岸の少部、南佛エール諸島の若干、ウラル山から岩石の突起、カナダの松林の一部、これにパリの街區の幾分。これらのものがバルチック海の一つの灣の内部と周圍に集まり擴がつてゐるのである』

といつてゐるのは、このスエーデンの首都の特徴を最も面白くいひ現はしたものであると、國人自身信じてゐる。私はスエーデンの最も美しい夏に、この都を訪ひ得なかつたことを残念に思ふが、

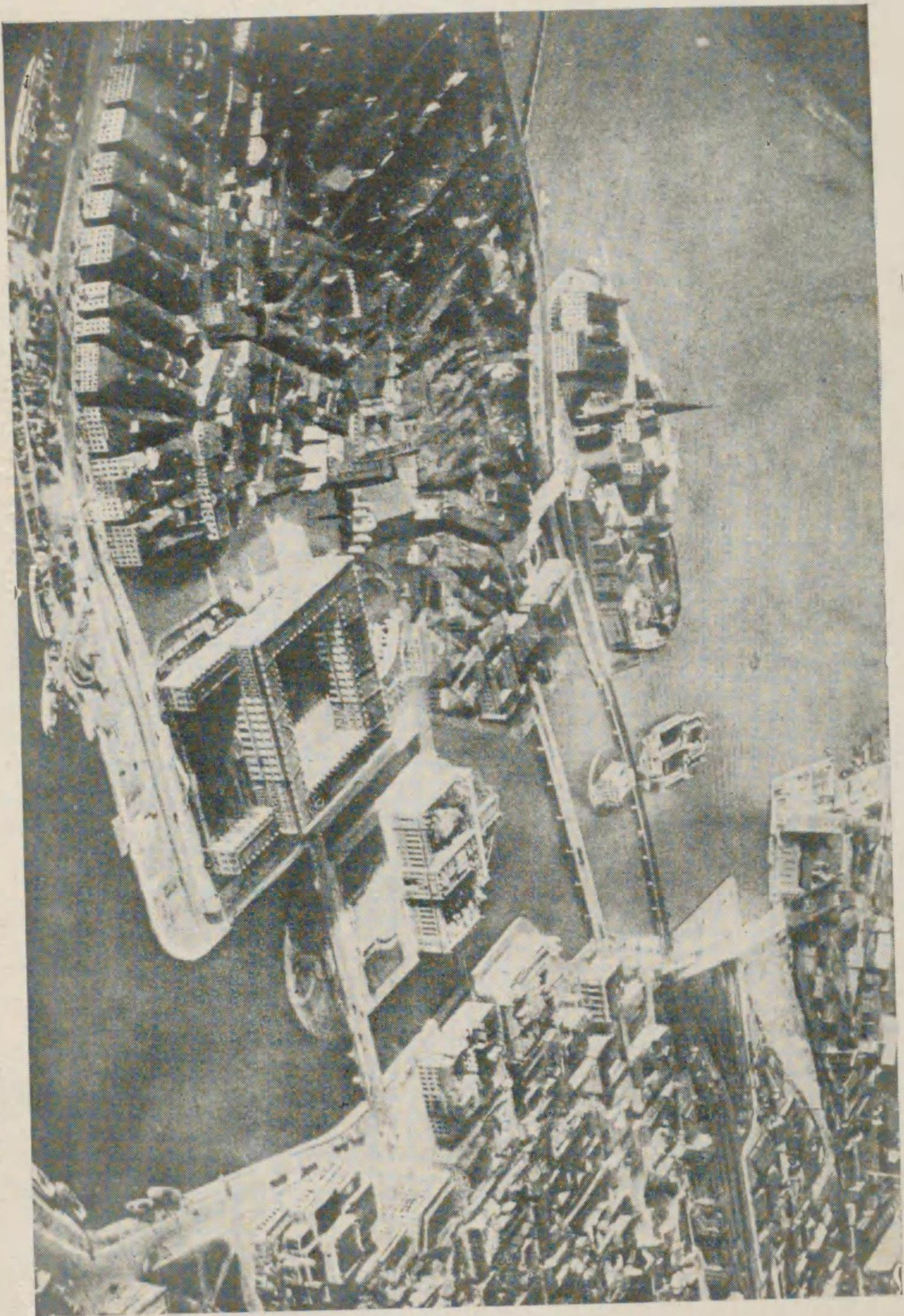
夏の季節には此國の上流社會の人は、皆却つて田舎へ出かけて、ストックホルムは空虚になつてしまふ。これに反して一月二月冬の眞最中は「スキー」その他雪の「スポーツ」と交際の季節で、ストックホルムの最も賑やかな愉快なる「シーズン」であるといはれる。

ストックホルムの特長は、固よりこのバルチック海の小さい島々が切れ／＼に寄り集まつた水邊の、しかも花崗岩が處々に兀然と露出してゐる若干原始的な自然の上に、パリ或はウイーンにも比すべき美しい市街が作られてゐる處にあるのであるが、瑞典人の質實にして且つ優美なこと、全國を擧げて貧困なるもの、甚だ少ないことは、この國に遊ぶものをして、南歐諸國によするとは全く別種の感想を起さしむるゆゑんであらう。

『グラント・ホテル』の食堂で柳澤君と晚餐をともにして、九時半ごろノールウェー行の汽車に乗る爲に驛に車を驅る。寢臺車の廊下に獨り立ちながら發車を待つてゐると、一人の若い女が息せき走つて私の方に向つて來た。一寸見覚えのある顔ではあるが、私はストックホルムの驛頭で老若に關らず女の人に送られる覚えはない。併し彼女はやはり私を尋ねて來たのであつた。彼女はアンダーソン博士の研究室の助手の一人で『今夕は博士自から驛に來るべきところ、差支があるから妾その代理を命ぜられたるなり』とて、錢別の贈り物さへ持つてこの寒い冬の夜に來てくれたのは、實に意外のことであり、私のストックホルム出發に最も異彩を添へた一齣であつたに違ひない。さらば

(リツタルホルメン島)

(市會堂)



ストックホルム府大觀

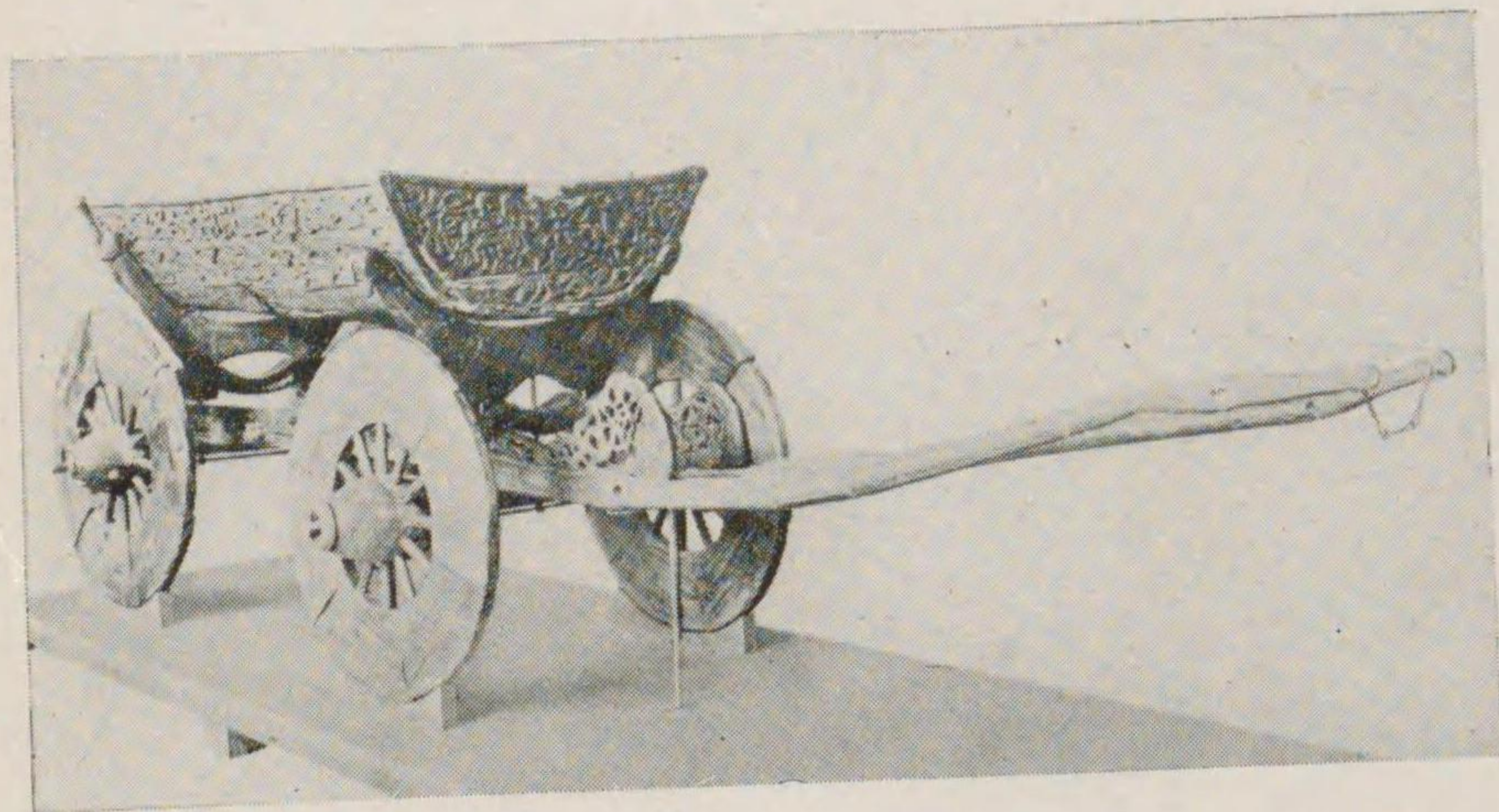
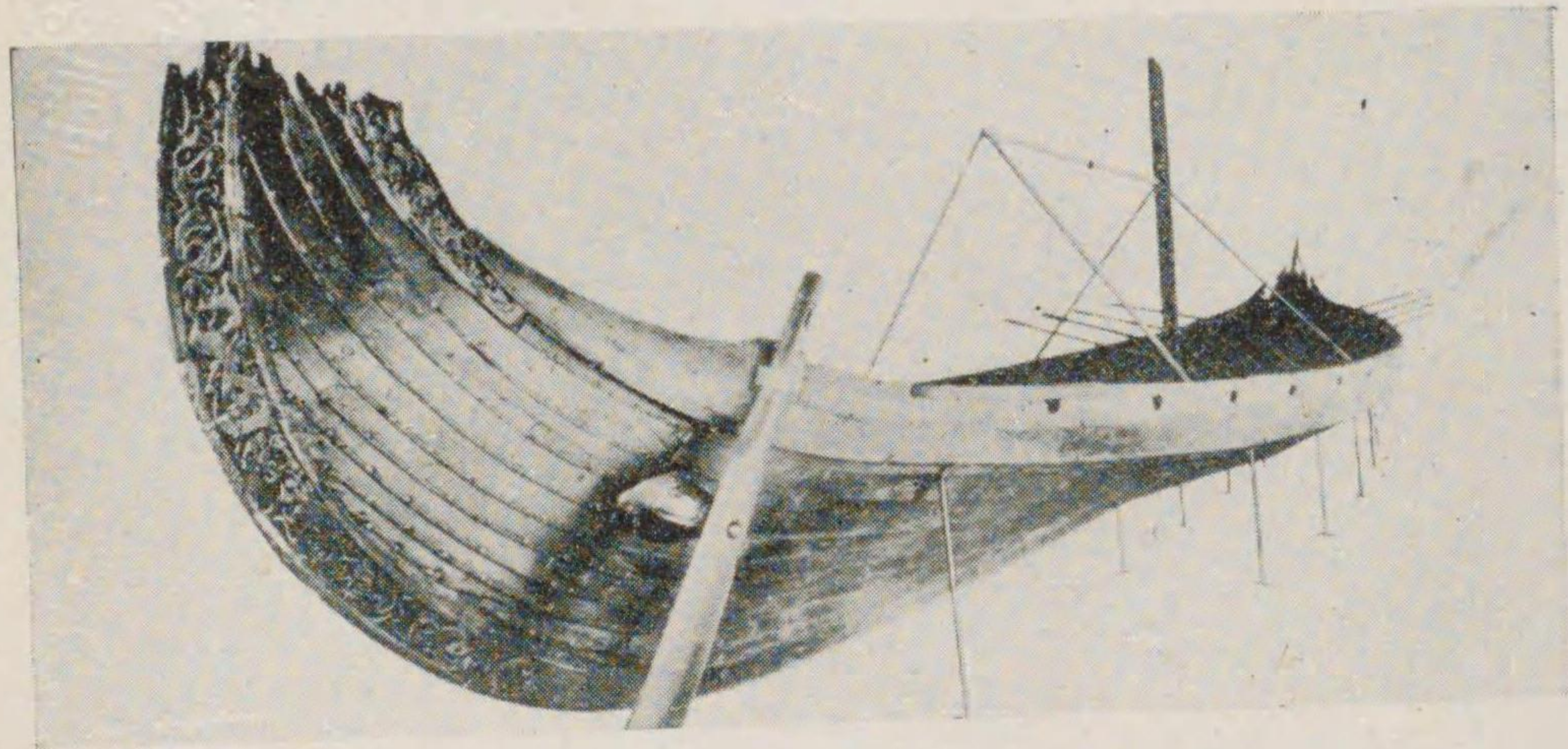
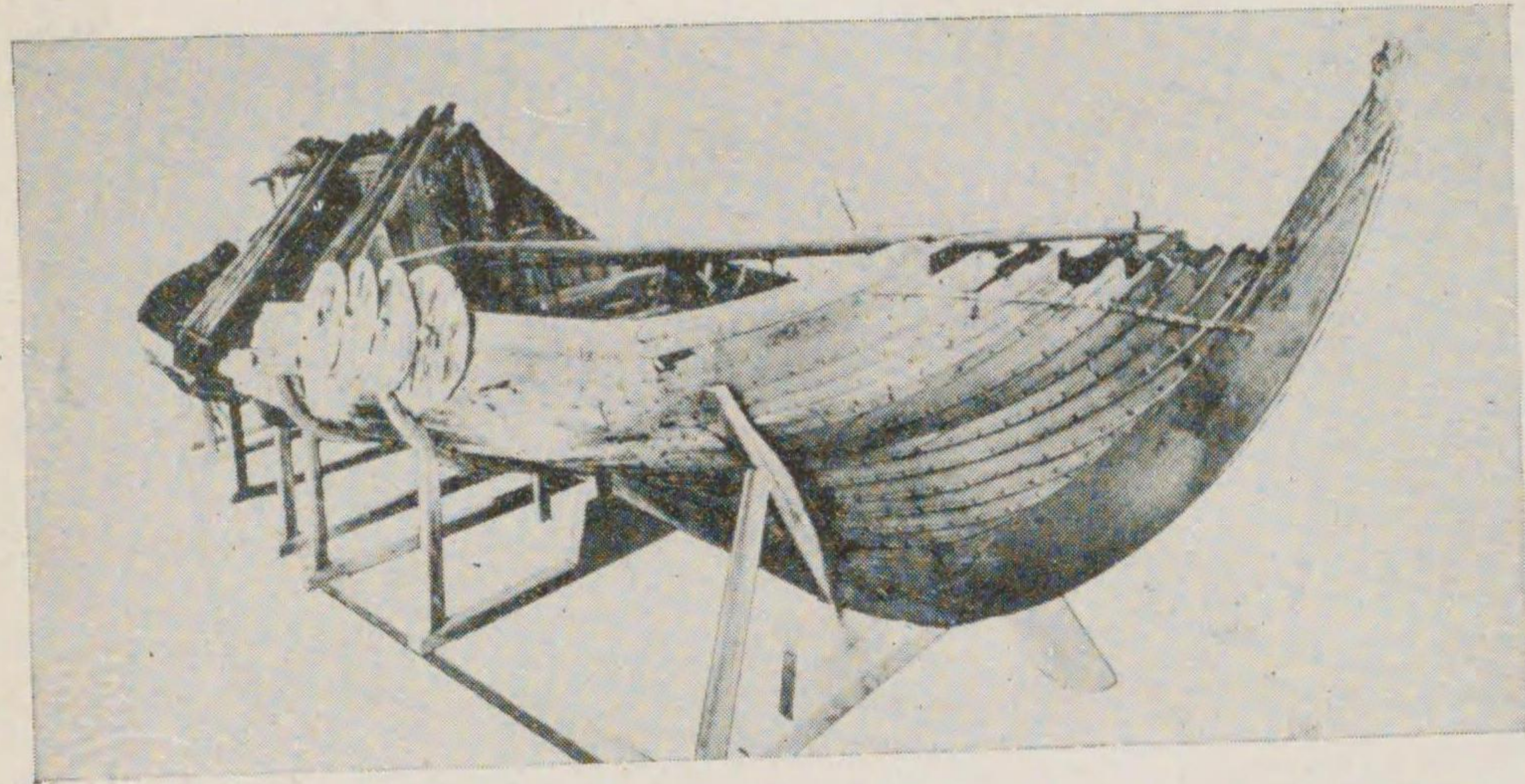
(オスロ)

(ヌターデン島)

(王宮)

(國會)

(ノルボロ橋)



ヴァイキングの古船及車
(上)ゴクスタット発見
(中) (下)オーゼベルグ発見

「アヂオ、ストックホルム」メーレンの女王」よ。

一七 オスロの一日、ヴァイキングの古船

朝七時汽車スエーデンの國境を過ぐ。役人來りて旅券を検査し『有り難う』と日本語でいふには驚いた。朝食の辨當を女が持つて來たのを開いて見ると、「コーヒー」は魔法隠に入れ、肉など頗る分量多きは如何にも北歐式で、ドイツあたりとは全く趣が違ふ。窓外は大雪で眞白、その間にベンガラ塗りの家、圓材造りの家が立つてゐる具合は、全くスエーデンと同様、盛んに馬ソリが去來してゐるのを見るのも珍らしい。十時半頃遂にオスロの驛に着く。自動車もキタなく、町もキタなく、スエーデンとは大分段が違ふやうに思はれた。『グランド・ホテル』に入り、暫らく休憩して晝ごろから雪を踏んで、大學の附近にある美術館を見る。北歐の畫を主として、フランスの畫も少しある。これを見ると此の國の美術も如何に現代佛國の影響を受けてゐるか分かる。次に歴史博物館へ這入ると、先史時代からローマ時代の中世の遺物などが階下に並べられ、階上には貨幣室があつて、ここには珍らしく支那古銭が頗るよく集められてゐるのに驚いた。またオーゼベルグ (Osberg) 發見のヴァイキング (Viking) 時代の古船とともに發掘された木製の車輛、雪車その他の遺物を保存してあるが、木製品には精巧な模様を刻したものが多く、實にこの博物館の最も誇るべき品物はこの一

類のものであらう。三階には各國の土俗品があつて、日本、支那のものも(支那明器、日本石器も少し)あつた。番人の老翁は特に私に「ここを見よ」と注意して呉れた。

私がオスロへ来たのは、もとよりこの冬の時節に「フョールド」の峡谷を見るためでもなく、極北の自然に接しようといふのでもない。たゞいま歴史博物館で見たオーゼベルグ発見品の副葬せられてをつたヴァイキングの古船を一見したいと思つたからである。なほこの船と殆ど同様の船が別に一隻發掘せられてゐる、すなはちゴクスタット(Gokstad)の古船がそれで、大學構内の小屋に保存せられてゐる。

そこで先づゴクスタットの船を見に行く。これは一八八〇年オスロの西方三十五里餘ゴクスタットの王塚(Kongsengen)と呼ばれる古墳から發見せられたものである。長さ約百尺の木船で、この船の内部に棺を容れて葬り、その上に塚を築いたものである。種々の理由から恐らく九世紀のオラフ・ガイルスターダルフ(Olav Geirstadalf)王の墓であらうと信ぜられる。今一つのオーゼベルグの船は、近頃郊外の人種博物館へ持つて行つたといふので、中食後自動車を驅つてわざわざ見に行くことにした。これは前者より少しく小型であるが、ほぼ同型で時代も矢張り九世紀、たゞ船端がワラビ手の如くなつてゐるのと、甲板橋などがやゝ遺存してゐる點が違つてゐるのみである。發掘せられたのは千九百四年、グスターフソン(Gustafson)教授によつて精細に研究せられ、副葬の

遺物も可及的に復原整理せられて、かの歴史博物館に保存せられてゐるのである。櫓の後部に死體を葬る室があつて、こゝから二人の女子(二十歳と四十歳くらゐ)の骨格が發見せられた。それでは王妃の塚に納められた船であらうといはれてゐる。とにかくこの中世北歐に雄飛した「ヴァイキング」の古船がそのまゝ、しかもこれが墳墓の内に納められて、一種の至寶となつてゐるのは、海賊王の墓として面白いではないか。我々はこの貴重なる二隻の船によつて「ヴァイキング」が北海を乗り廻した時の光景を、まぎ／＼と眼の前に復現することが出来るのである。このオーゼベルグ船のある附近に、ストックホルムのスカンセンと類似の野外博物館があるけれども、雪の日の暮れかゝつて遂に見る機を得なかつた。

この外オスロで見たものはセント・ハンスハーゲン(St. Hans Hagen)の公園だけであつた。この水源地のある丘の上からの眺望も大したものではなく、たゞ嬉々として雪の上に戯れる子供を見たのは嬉しかつた。ストックホルムにおいては出歩くごとに親切な友人があつて、殆ど獨り外出することもなかつたに引きかへて、ノールウエーのオスロでは全くの獨りボチ、氣樂ではあるものゝ淋しくもあつた。

十一月二十四日朝暗い内に宿を立ち、七時四十分南行の汽車に乗つて一路獨逸ベルリンに向へば、再びスエーデンの國へ這入つたのも懐しく、ゲーテベルグでは舊知のカールグレン(Karligen)

教授を訪ねる暇なく、夜の九時過ぎマルモの驛に着く。食堂車で食べる機会を失つたので、驛の賣店に行き「サンドウィッチ」を手真似で買ふと、若いスエーデンの女の賣子は計算器に出る數字を示して愛嬌よく、啞同士の賣買が出来た。私は自分の覺えてゐる殆ど唯一のスエーデン語「タク・ゾ・ミケル」(多謝)を、このスエーデンにおける最後の親切なるスエーデン娘に残して、ドイツへ向ふ夜汽車に乗つた。(昭和三年四月)

西佛とところぐ

一 ノルマンディーの一角

佛蘭西のゴシック伽藍を此處彼處巡禮しようと思つた年來の願も、「クリスマス」前後の酷寒にめぐらされて、巴里に御輿が坐つた爲め、何時の間にかオジャンになり、巴里で正月元日の雑煮を食へてから、漸く西班牙の旅に出かけることゝなつたが、たゞ其の道すがら一週間程佛蘭西の西部を二三箇處見て行かうと云ふ事になり、同行の一高のK君京都のU君と三人の間に、趣味が一致して決まつた見物場處は、ノルマンディーではバユの伽藍と刺繍、モン・サン・ミシエールの不思議な寺院址、それからブリタニーに這入つては、カルナック附近の巨石記念物、南佛ボルドウ附近エジエ地方の舊石器時代の洞穴と此の四個處であつた。即ち前の二箇處は主として歴史家の爲め、後の二箇處は専ら考古學者の興味から選定せられたものであるとも云へる。

ノルマンディーやブリタニーの海邊は、夏季に出かけるに限る。南佛の旅も此の冬の絶頂では寒さと雨に悩まされる心配はある。併し我々「豫定」なるものに束縛せられてゐる旅行者の身には、今

更贅澤も云つて居られないので、昭和三年正月二日の午後三時五十分、いよいよ巴里サン・ラザール驛を出發してバユー行の途に上ることゝなつた。今迄倫敦や伯林やを立つ際には、一向大した感想もなかつたが、今度は何だか歐洲から去つて行く様な氣がして、一入名残り惜しさに絆される。殊に横濱出發以來久しく歐米旅行を共にした同士のK君の、他の諸君とは引きかへて、是から長い留學の期を控へてゐる淋しさうな顔を、「プラットホーム」に残して行つた時には、十餘年前倫敦の驛頭で、TK兩先生に取り残された私自身のシヨンポリした光景を思ひ浮べて、漫ろに身につまされる思がした。

列車の内は殆ど満員館詰の體で、私共は先客の間に『バルドン、メルシ』とお尻を小さくして割込ましてもらふ外はなく、従つて聲高かに流暢なる日本語をおしやべりすることもならず、冬の日の早く暮れ果てゝは、窓外の眺を樂しむことも出來ず、ケーンの伽藍も暗のうちに、汽車は定刻より三十分以上も遅れて、漸くバユーの驛に着いたのは九時半頃。此の淋しい田舎の驛には赤帽も見つからず、手にく荷物をさげて外に出るゝ、寒い雨がシト／＼と降つてゐる。「オムニバス」に運ばれて、『オテル・ド・リュクサンプール』と云ふ宿に着くと、葡萄酒樽の様に太つた主婦が出て來て、我等を迎へて呉れる。田舎びた宿の心安さを喜んで直に食堂に這入ると、これは亦た給仕の女も脊の高い大女、ケルト人種の血の多いノルマンディーだからとて、こんな大女許りでもあるまいが。又

た三階の寢室の「ベット」は木製で、是も中二階に上る様な高さに驚いた。たゞ部屋は割合に清潔で、熱い湯も出で暖房の設備もあつて、巴里よりも非常に暖かな氣候が嬉しく、是は「トレ、ビヤン」と十一時頃終に自分の部屋に退却して寢につく。

二 バユーの伽藍

バユー (Bayeux) といふ地名は、昔西洋歴史の書物を讀んだ頃、此の地に名高い刺繡があつて、ノルマン人の英國征伐の畫が現されてゐるのを、一寸挿畫で見た時に覚え込んだのである。ほかの大事な固有名詞は、大概筒抜けに忘れてしまつたに關らず、馬鹿ものゝ一つ覚えの類で、是こそ西洋の天壽國曼荼羅のある處よと、今に忘れずに居つたのであつたが、さてそれは佛蘭西のどの邊にあるのか。實は此の旅行に出る數日前までは知らなかつたのである。然るに地圖を開いて見ると、巴里の西北ノルマンディーの海岸に近く、ブリタニーの巨石記念物を見に行く道筋から、餘り大した横道でないことを發見して、急に之を旅程に加へることになつた。

それであるから固より此のバユーの町に、刺繡と伽藍の外になほ復興期以來の面白い人家が、此處彼處に残つてゐることなどは、知つて居やう筈はない。況んや又た町の大通りのトステン書店に辣腕のお婆さんが居つて、バユーの刺繡の「アルバム」を賣りつけるけれども、實は刺繡のある博物

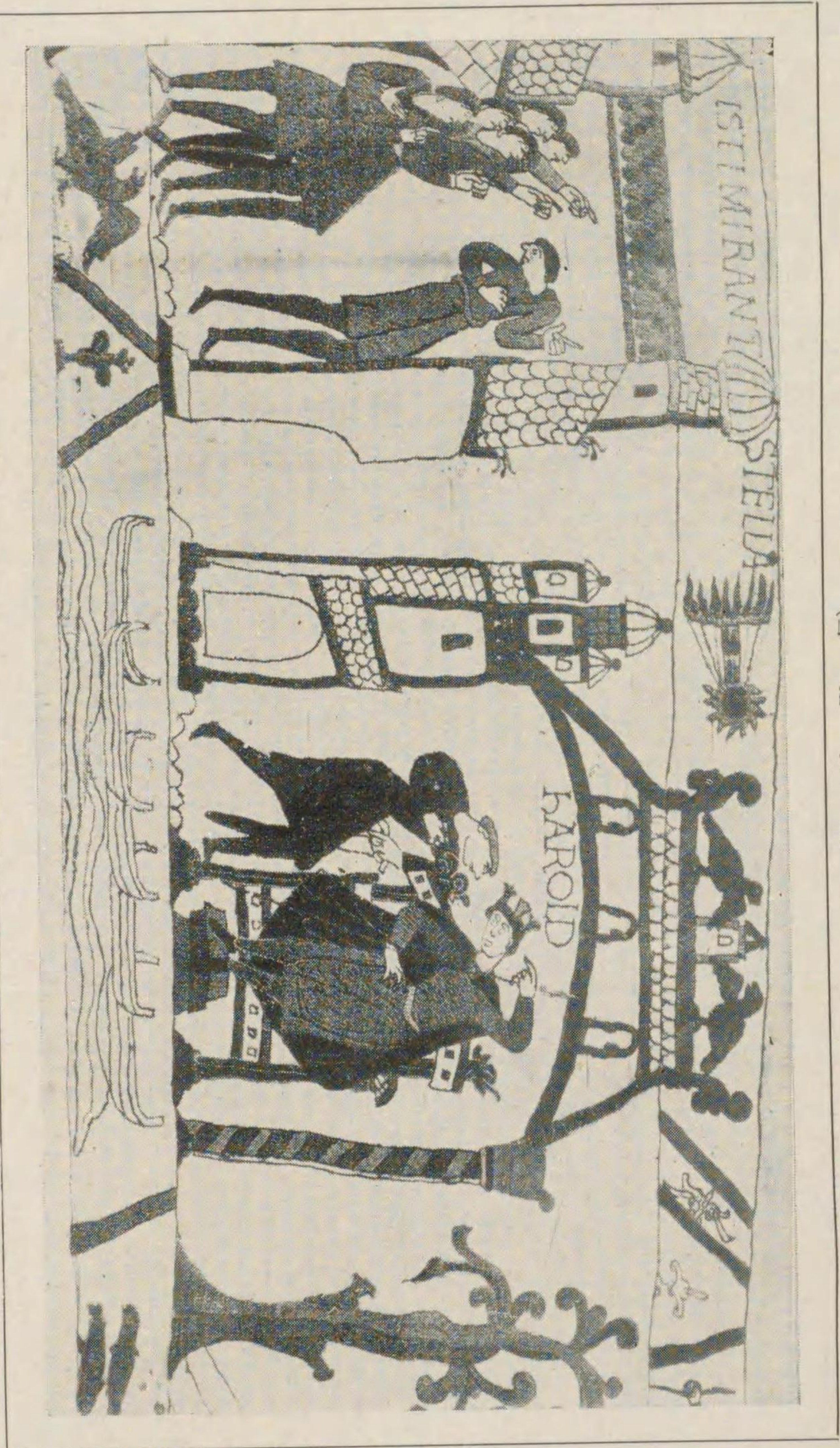
館に、それよりも宜い寫眞集を賣つてゐやうとは思ひ設けぬことであつた。それで此のお婆さんの店で暫く捕虜となつてから、大伽藍へ行くこととなる。此の寺は「ノートルダム」寺と稱せられ、古い處は十二世紀から十五世紀までの間に出來た「ゴシック」建築で、其の後陣の部分の屋根に美しい小塔を頂く姿は、佛國內の「ゴシック」初期の最も美しい例の一と稱せられ、華麗な裝飾のある横門も、亦た頗る結構なものと云はれ、内陣の下部には「ロマネスク」の列柱が並び、地下室の部分は最も古く、十一世紀に溯る可きものであるとのことである。

伽藍を出ると雨が烈しく降つて來た。右手の石段を下ると、小さい博物館といふのがあつたので、例の刺繡は此處にあるかと思ひ、わざわざ番人の女を呼んで來て内へ這入ると、多くは近代の繪畫ばかりで、見る可きものも無いのに失望したが、伽藍の後ろを一周して、其の美しい塔影を仰ぎながら、やがて其の右手にある他の博物館を探してあつた。此處にも番人が留守であつたのを、漸くのこと之を連れ出して來て、二階の刺繡陳列室に這入ることが出來た。

三 バユエーの刺繡

此の室の中には凹字形をした硝子棚があつて、其の内外四周に名高い「バユエーの刺繡」が、繪巻物の如く私等の前に展開せられてゐるのを見た瞬間、私達の心は躍らざるを得なかつた。此の刺繡

(譯 註 田 理)



バユエー刺繡の一部

(人民ハロルド王に於て)

は久しい間其の題目のうちに出て来るウイリヤム・コンケラーの妃マチルダ(Matilda)が自ら作つたものと傳へられてゐた。然るに其後ブルケー(Piquet)などの學者の研究に據ると、寧ろウイリヤムの弟でバユー伽藍の僧正であつたオド(Odo)が作らしたものであらうと云ふことである。孰れにせよノルマン人の英國征服に關する同時代の史料として、最も貴重なるものであることは、フリーマン等の高唱する通りで、(アボット・バウドリ(Abbot Baudri)の拉丁文の詩に、ウイリヤムの女アデラ(Adela)の爲めに之と同じ題目のものが作られ、又たブリトノートの寡婦が九九一年マルドンの戦に於ける夫の事業を刺繡にしたものも見えてゐるが、今は兩者共に亡びて存しない)歐洲に於ける第十一世紀の工藝美術の最大遺品の一たることは誰人も疑はない處である。而して古い一四七六年に作られた伽藍の資財帳にも載せられてゐるが、一時ナポレオン大帝の時巴里へ持つて行き、彼の英國征討畫の氣勢を擧げんが爲め、陳列せられたことがあつた。

此の刺繡は全長二百三十一尺幅は約一尺八寸。地の麻布はいま古くなつて、稍々褐色を帯びてゐるが、其の上に八色の緞絲を以て刺繡をなし、一〇六六年ノルマン人の英國征服を題目として、凡て五十八段の圖を作つてゐる。先づハロルド(Harold)がエドワード王の命を受けて、ノルマンディーへ出發する處から圖が始まり、ヘスチングズ(Hastings)戦争、ハロルドの戦死となり、英人の退走する段に至つて終つてゐるが、話の大詰とも云ふ可きウイリヤム王即位の段は缺けてゐるので、是はマ

チルダ妃の死んだ爲、遂に完成せられなかつたものであると傳へられてゐる。上下兩縁には三寸ばかりの帶狀の裝飾畫が全幅に亘つて續いて居り、これにはイソップ物語、フェドルス物語、創世記などの話をはじめ、日常生活や、狩獵の光景又は種々の空想的動物を現はしてゐるが、最後に近い處には、下帯にヘスチングスの戦争の戦死者の横はつてゐる處を示してゐる。此の中アダム、イヴの圖などに頗る「グロテスク」の趣のあるのは、丁度我國の古い繪卷物に、市井の出來事など同様の表出をやつてゐるのと相似て、中世人の心理が想像せられる。

主要題目たるハロルド、ウイリヤムの話は、即ち刺繡の中央部に現されてゐるのであつて、各段の圖には大抵拉丁語の短い説明文を、刺繡で附け加へてある。私共は此の圖を順々に案内の男の説明を聞きながら、それはよく分らぬ佛蘭西語の説明にせよ、最も簡明直截に視覺に訴へて呉れる「ナイヴ」な畫圖其者の御蔭で、話の筋を明瞭に了解することが出來たのは、即ち此の刺繡の圖様が如何に大なる表現力を有し、如何に雄辯な語り手たる役目を盡してゐるかを、證するものに他ならない。例へば人が私語する時の動作、驚愕せる瞬間の光景などの圖は、如何にも面白く、又た特徴ある態度を、多少誇張して表現してゐるのに感心さされるのである。而かも其の幼稚な描法の中に充實する眞摯なる精神は、斯る古代美術に通有する性質を、最も顯著に示してゐるものと云ふ可きであつて、實際の處私は今迄小さい寫眞などで之を見た時とは、全く別殊の深い印象を受け、「是は

實に面白い』ホントに佳く出來てゐる』と感心してしまひ、遙々バユーまで此の刺繡丈けを見に来る値打のあつたことを、しみじみと喜んだのである。

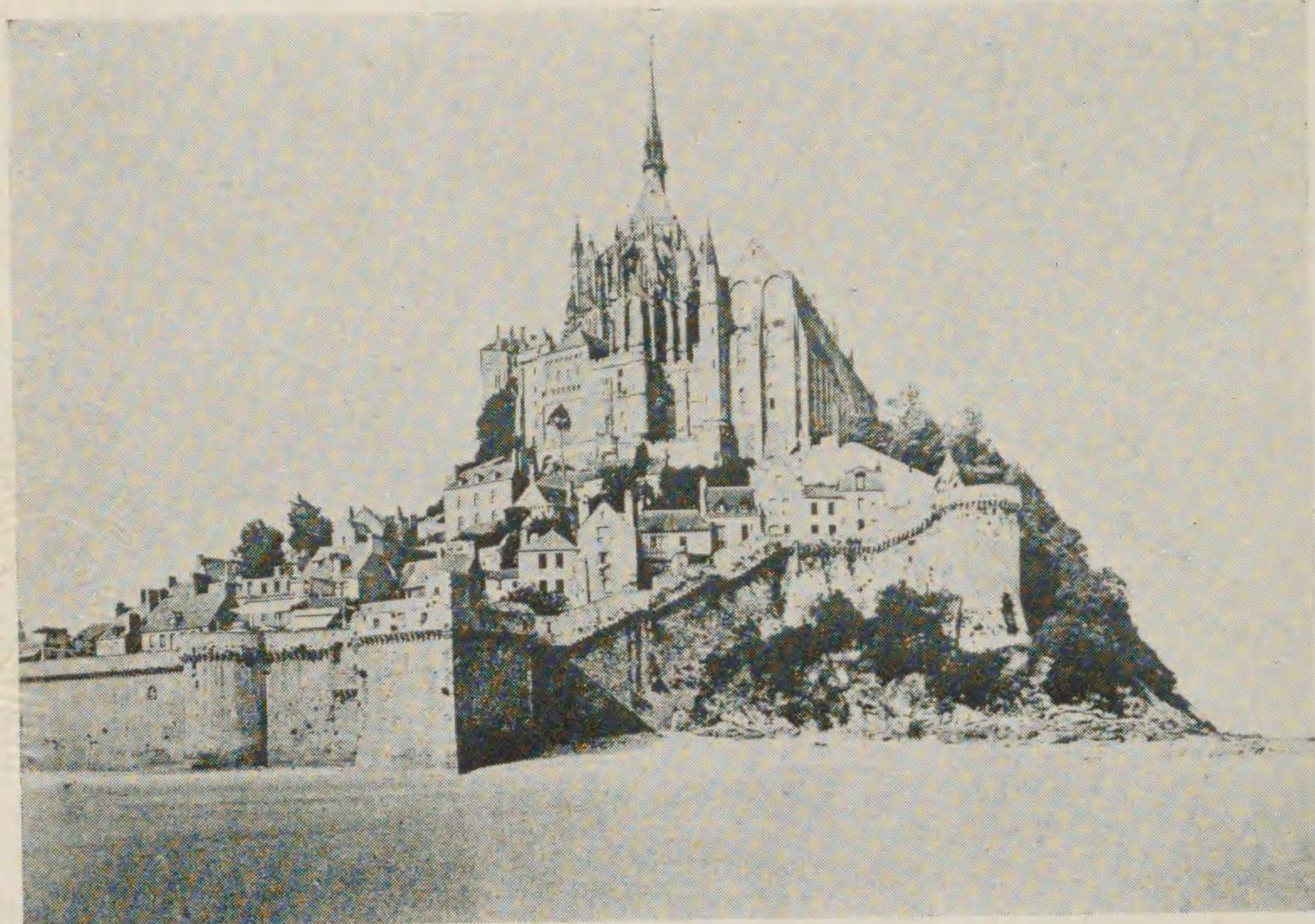
四 モン・サン・ミシエールの孤島

モン・サン・ミシエール(Mt. St. Michael)と云ふ地名も、バユーと同じく日本人には一寸耳遠いものゝ一つであらうが、若し一度「ウエディング・ケーキ」の様に、全島「ゴシック」建築を以て「ピラミッド」形に結晶してゐる此の島の寫眞か畫圖を見た人は、恐らく千里を遠しとせずして見物に来るに違ひない。現に私自身も三ヶ月前英國マンチエスターに、サー・ウイリヤム・ポイト・ドウキンス翁を訪ひ、一夕老夫人と佛國の「ゴシック」建築の話に耽つた際、此の島の奇勝を新に聞かされて、遊意一層深きを加へた次第である。私達は晝の十二時四十分バユーの驛を立つて、リソンの驛で乗換へ、見渡す限り牧場ばかりで、其間に日本の草苴にも似た田舎家の點綴してゐるノルマンチーの景色を眺めて、如何にも英國の一角を大陸のこなたに見る心地がしたのであつたが、雨は全く霽れて日の光のキラ／＼と輝く頃、車はクータンスの驛を過ぎ、近く「ゴシック」の伽藍の青空に高く畫の様に、丘陵の上に聳えてゐるのを仰ぎ、ボンタルソンの驛に着いたのは、夜に入つて六時半頃であつた。此處からモン・サン・ミシエールの島へは、輕便鐵道が連絡してゐるのであるが、最早

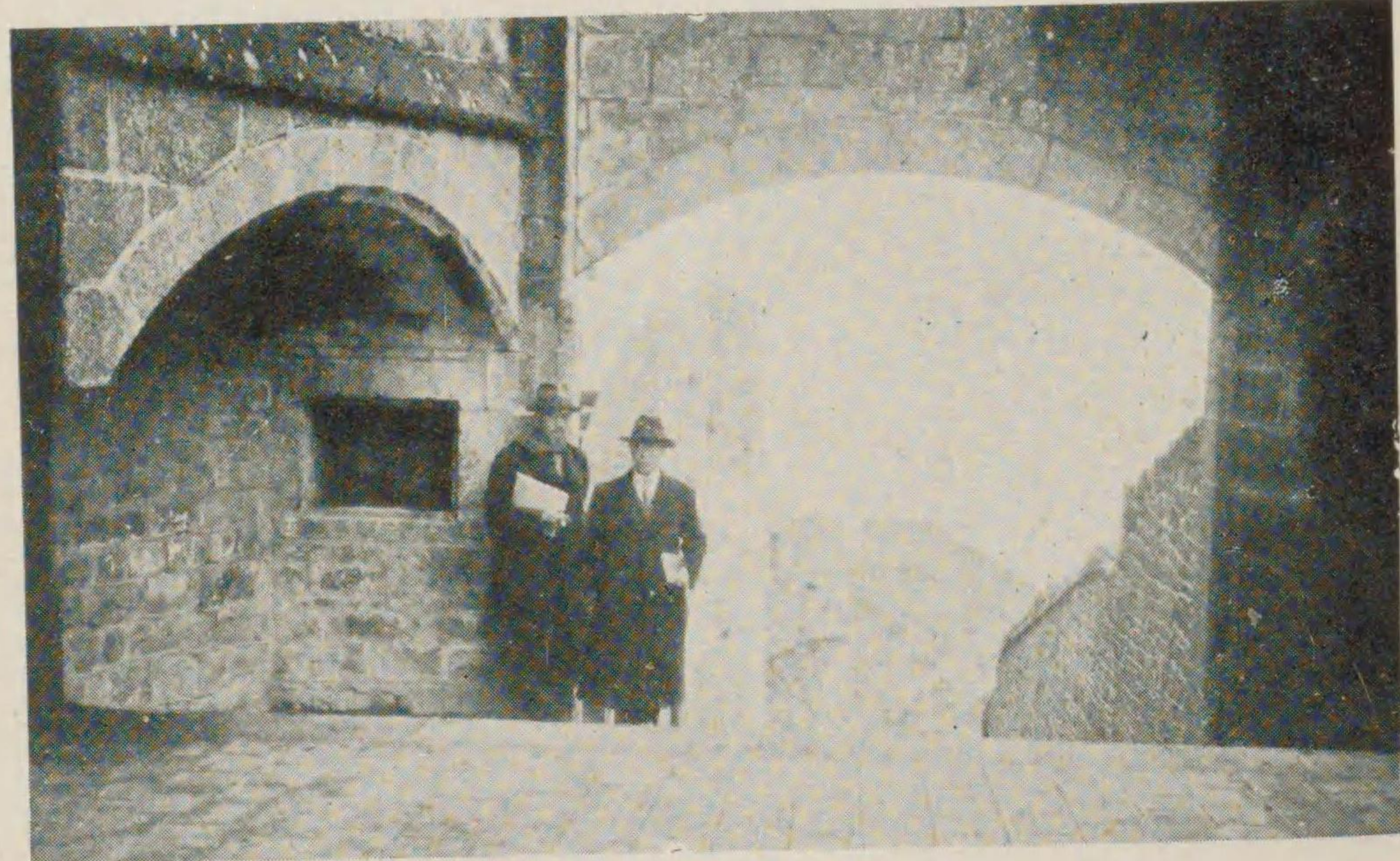
終列車の出た後なので、私共は自動車を雇つて、闇中をひた走りに走り、七哩ばかり前方にサン・ミシエールの島影が見え出し、急に巨人の如く大きくなつた時、車は城壁の門前で止まり、門を入つて直ぐ近くの『ブーラール』といふ宿屋へ這入つた。其家は懸崖に倚つて作られた石造の美しい建築であるが、今は季節外れと見え、私達の他には御客としてたゞ一人の老女が、廣い食堂に淋しく坐をしめてゐるばかり、静なことは此上なく、名物の大きな「オムレツ」も中々甘いので、一同大に氣に入つた。食後月明に乗じて兩君は散歩に出かけ、私は風邪の氣味なので、若主人の請するまゝに、階下家人の部屋にある、脊丈よりも高い大きな爐の前に休息してゐたが、流石は海濱の孤島、ビューに比べては寒氣身に徹する心地がした。三階の室からは今しも差し入る冬の月光さながら氷の様に、潮干潟に捨てられた小舟が一つ二つ、おぼろげに數へられる。

五 僧院と會堂址

朝起き上ると咽喉が非常に痛く氣分が悪い上、昨夜の月明に引きかへて曇天の冬空は雨さへ降りさうである。併し我慢して見物に出かけると、宿屋の前の通りは一本筋に、島の東南部を迂回してゐる。其の兩側に肆比する人家の内には、往々數百年を経た古い家もあるが、大抵は江の島あたりの様に、貝細工や記念品を賣る店でなければ飲食店ばかり。しかも今は旅客の全くない季節なので



モン・サン・ミシエール島全景



同上會堂址入口門

多くは表を鎖してゐる。此の大通りはやがて階段をなして僧院の入口に導き、視線が上ると共に次第々々に景色が佳くなり、終には城壁を越して、海と岸とが見える様になる。

そも／＼此のサンミシエールの島は、——案内記の受賣によると——周圍僅か三千尺の小島であるが、全島凡て花崗石で出来、一番高い百六十尺の頂上に、僧院と會堂が立つてゐる。而して島の周圍には大體十五世紀頃に出来た城壁が繞つてゐる。七〇八年聖オーベル(St. Aubert)が天使ミシエールを感得して、此處に小さい僧堂を建立して以來、次第に崇敬を増して、十三世紀から十五世紀に至つては、遂に今日見るが如き僧院と城塞を兼ねた大建築物が、此の小島の頂上を被うてしまふ様になつたのである。併し大革命後此處に據つて居つた聖マウル(St. Maur)の騎士團も廢せられ、今は國有の歴史記念物として保存せられてゐる。

我々は先づ大きな石門(第十五世紀)を潛り、切符賣場で若い女から切符を求め、暫く爐火で暖を取つて後、やがて番人に案内せられて石階を登りつめ、絶頂の會堂へ這入つた。是は前方が「ロマネスク」、後方は「ゴシック」の建築である。次に「ラ・メルヴィーユ」と稱するフィリップ・アウギユストの建立に係る第十三世紀の建築に入り、美しい四面廻廊を眺め、それから更に食堂、「プロメノアー」、「ラクロンのクリプト」、聖マルタン堂、牢獄などから、昔食料などを山下から引き揚げたといふ大車輪を見て、「大圓柱のクリプト」等を引き廻され、一巡して元の庭へ出ると、中世の

建築史を一通り各時代に互つて見物したことになる。たゞ此の大僧院と會堂とが現在全く宗教的儀禮に用ひられず、内部に何等の莊嚴もないのは、私共の如き信心家でなく、單なる美術史の研究者に取つても、多少物足らぬ心地がせぬではない。

此の日は午前中に見物を済まして、午後直に出發する豫定であつたが、私の風邪が良くないのと、且は此の島の奇勝と靜かな宿とが氣に入つて、たうとう今一泊することにした。中食には例の名物「オムレッツ」に大きな伊勢蝦、「これは爪や足まで食べるのですよ」と女中は「クロツカー」を出して呉れる。巴里あたりの宿では、此の蝦に中々ありつくことが出来ぬと皆々大喜びであつたが、夕食にも亦候同じ「オムレッツ」と蝦とが出て來たので早くも閉口した。私は用心して午後は終日宿に引き籠り、九時過ぎ寢室へ間温めが通るまで、家人の食事中でもかまはぬと招かれるまゝに、例の爐火の前に佇んでゐた。

六 アウレーまで

次の朝は咽喉の具合も大分よく、日の光がきら／＼と輝いて暖いのに勇氣を生じ、獨りで『ブール』旅館の後ろの山の崖にある、小さい博物館なるものを見に行く。丁度庭いぢりをしてゐた處だといふ老翁が出て來て案内して來れる。貝殻の附いた羅馬時代の「アムフオーラ」モン・サン・ミ

シエール僧院の僧侶の手に成つた木の浮彫、古錢石器など、此の附近から發見せられたものもあるが、一番呼びものは此の島の景色を背景にした戦争の「パノラマ」と、各時代の歴史的人物などの生人形である。ベデカーに是は倫敦にあつた『マダム、ツーソウ』の蠟細工人形館の小さい様なものだと書いてあるのも尤もである。又た私は此處ではじめて潜水艦用の「テレスコープ」を見て、非常に面白く思ひ、一つの新知識を増したことであつた。

我々は十一時四十分、此の氣持のよい旅館の老婆や若主人に握手をして別れ、輕便鐵道でポントルソンへ向つて出發した。車窓から晝の様なモン・サン・ミシエールの島影が、だん／＼小さく消えて行くのを惜みながら、春光に輝く此の島の美しくしさは、あの僧院で賣つて居る大きな彩色の寫眞も、決して誇張の圖でないことを知つた。ポントルソンの驛の食堂で食事を認めてから、レンヌ行の汽車に乗る。ブリタニーの田舎を過ぐれば、牧場つゞきの伸び／＼とした景色は、ノルマンディーと少しも變らず、いかにも日本の田舎を行く心地がする。レンヌで乗換ヘルドンへ行き、又た乗換へて日がズンプリと暮れた八時半、漸く目的地のアウレーの驛に著いた。モン・サン・ミシエールからアウレーまで僅か百哩ばかりの間を四度乗換へ、丁度十時間を費した勘定である。

驛の前には新しい乗合自動車と、古い馬車とが待つてゐた。銘々自分の宿へと客を引いてゐたが私達は案内記に載つて居る『オテル・バヴィリオン』の方へ行くことにした處、それは古馬車の方

であつたのは、昔日本から獨りで倫敦へ著いた時、自動車もあるのに、選りに選つて古馬車に乗つた時の事を思ひ出して可笑しかつたが、さて一哩ばかりをトボ／＼走つて、アウレーの町の廣場に入り、宿の前に降ろされた時には、此の古馬車にも似ず存外上等の宿屋であるのに安心したのみならず、宿の規模は申々大きく、殊に其の食堂は二三百人をも容れることの出来る大きな構へなるには喫驚した次第である。思ふに是は此町の附近にあるサント・アーン・ドゥレーの寺が、ブリタニー中で最も繁昌な巡禮地であるので、その祭日たる六月廿六日などにやつて来る人は、莫大な數であるばかりでなく、夏季には可成避暑遊覽客が入り込み合ふ爲めであらう。併し今夜は此の廣い食堂に私共たつた三人、如何にも淋しくひっそりとして、宿屋に對して氣の毒な思をした程であつた。

七 カルナツクの巨石記念物 (五)

ブリタニーからノルマンディーの冬の空は、丁度英國南岸のそれと同様、非常に濕氣が多く、天氣も頗る定まらない。昨夜は一天拭ふが如き月夜であつたのに、今日起き出て見ると、雨がシト／＼と降つてゐる。終日此の雨中に、雨ざらしの巨石記念物を見歩かなければならないかと思ふと、聊か情なくなつてしまふが、未しも氣温の暖なのを仕合せと諦める外はあるまい。十時過ぎ自動車に乗つて市中を出ると、やがて丘陵が起伏し、黄色の「ゴース」の花の咲いてゐる生垣の間を車が走る。

しばらくすると道の右手に、マネ・ケリオネッドの「ドルメン」(Dolmens du Mané Kerioned) と云ふのがある。是は二箇の「ドルメン」であるが、兩方共餘り大きなものでなく、日本の古墳の石室の暴露したものと殆ど擇ぶ所がない。たゞ石に彫刻した簡単な圖形が幽かに残つてゐるのが珍しい位である。それから少し行くと、田圃の中に小さい石が散兵線の如く行列をしてゐるのが、道の左右に見え出した。自動車を停むれば、是れ即ち有名なメネクの「アリニマン」(Alignement de Mané) 列石であつた。石の數凡そ一千以上堵列をなし、中には高さ六尺以上に達するものもあるけれども、かねての想像よりは小さく、又た實は今少し荒涼たる原野にあることと思つてゐたのに、是は田舎家にも近く、大道を挟んでゐるのには聊か失望した。

カルナツク(Carnac)の村に著いて廣場の一隅に車を停め、運轉手が博物館の係員を探してゐる間目の前にある十八世紀の建築で、石刻の裝飾がある村の會堂を覗く。降誕祭の時の造物であらうか耶蘇誕生の處を人形で造り、其の前に一人の可愛らしい小兒の像が立つてゐる。手に錢入れを持つてゐるので、K君が試みに銅貨を其の孔に入れて見ると、子供は首をうなづかして、お辭儀をするのは洵に可愛らしく、私もU君も交々銅貨を投じて、小兒の點頭を買つたのは一興であつた。外に出ると丁度正午に近く、小學校歸りの兒童男女、いづれも十三四歳なのが數人、我々日本人を珍らしげに立ち竝んでゐる。而かも彼等は皆な大きな木履を穿いてゐるのも面白く、此の雨降りの泥道

には之に越した履物はないと思はれた。日本の如き悪道路の國では、宜しく洋服に足駄を奨励す可きであつて、之を耻ぢ入る理由は少しもない。否な耻ぢ入るべきのは悪道路が都會の真中に横つてゐることである。男兒の一人は私共に「アメリカン」か又は「シノア」かと尋ねる。支那人と米國人との感別のたゝい處は、流石は新石器時代の巨石記念物のある田舎だと感心せざるを得なかつた。

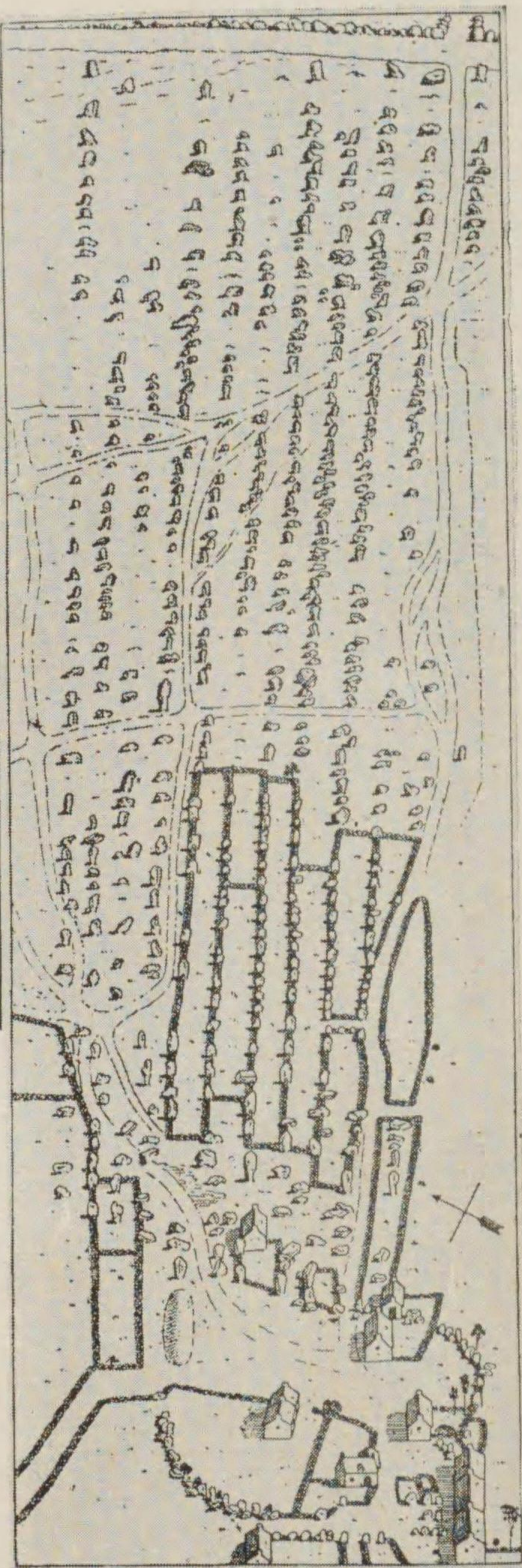
八 カルナツクの巨石記念物 (下)

博物館長ロザック (Rosio) 氏は生憎病氣であると云ふので、若い係員が我々を案内して、廣場から少し先きの小さな博物館に連れて行つて呉れた。僅か二室しかなく、陳列も少々不整順の譏を免れないが、此の地方發見の新石器時代以後、鐵器時代ガリヤ羅馬時代の遺物が多く並べられてゐる。ただ此の地方から青銅器時代のものが發見せられて居ないのは特徴である。殊に一の棚には美しい薄手の玉製石斧がある。又マネ・ルードの「ドルメン」發見の土耳其石製の頸飾や、黄金製の裝飾品の斷片などがあつたのに注意した。奥の一室には「ドルメン」などに彫刻した裝飾圖形の石膏模造品を網羅して陳列してある。

我々は此の博物館の出版物や繪葉書をシコママ仕入れて、十二時過トリニタの村に向ふことゝなつたが、道すがらケルマリオの「アリニユマン」(Alignement de Kernario)を見る。此の列石は石

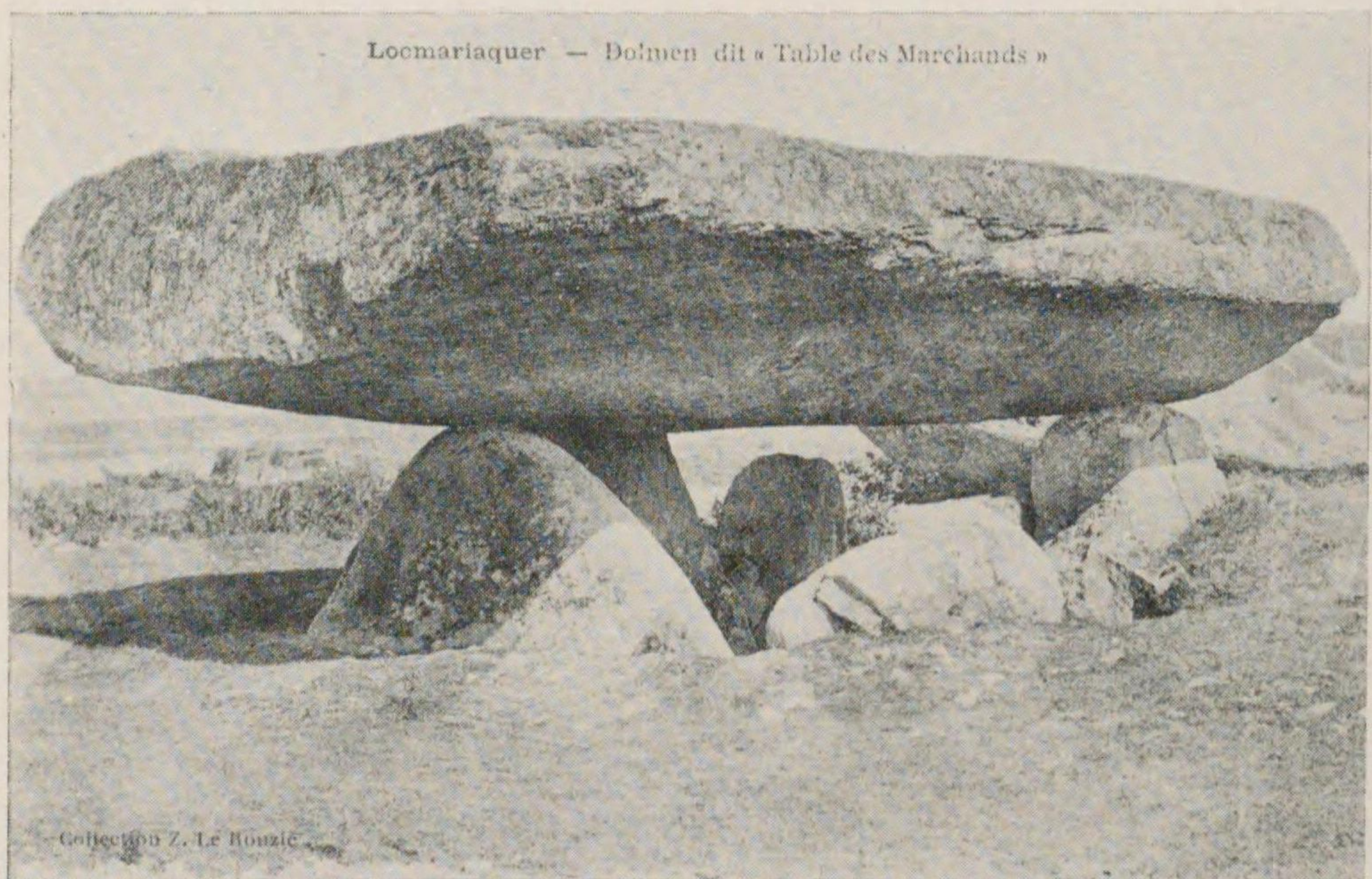


(右)カルナツクの巨石記念物
ケルマリオの列石(古圖)
(左)同上列石の一部





ロクマリアケー巨石記念物グラン・メニール



同上ターブル・デ・マルシヤン

の數に於ては、前のメネクのものよりは稍々少ないけれども、(九百八十本)其の大きさは遙に大きく、中には十數尺に達するものもある。是はメネクの列石及びケルレスカンのそれと、元は一の大列石群をなして居つたものであるとも云ふ。又一隅には「ドルメン」一側には「クロムレヒ」とがあるさうであるが、何分細雨霧の如く降り、風さへ吹き出したので、之を見物することも出来なかつたのは残念であつた。やがて一時頃美しい色に塗つた漁船が二三碇泊してゐるトリニタ (Trinita) の港に近い宿屋に著いて、蟹と鰯の新鮮なのを賞しつゝ、村人等と共に中食を取ることになつた。

二時過ぎ此處を出發し、高い鐵橋を越してサン・ミシエールの大「ツムルス」(高六十五尺、直徑二百五十尺)を遠望し、ロクマリアケー (Lomariquer) の村を過ぎ、村はづれにあるエル・オレックの「ツムルス」古墳 (Tumulus de er-Hroek) を見る。これは積石塚の如く、今は摺鉢の様に發掘せられてゐるが、石室に鎖されて見ることが出来なかつた。引きかへして村の廣場に自動車を降りて、西手の田圃にあるマネ・ルチュアルの「ドルメン」(Dolmen de Mané-Rutual) を見、なほ泥濘の野道を歩き、趣味ある農家の建物を見返り、數町先にある「グラン・メニール」(Grand Menhir) の大立石と「ターブル・デ・マルシヤン」(Table des Marchands) と稱せらるゝ大「ドルメン」を見に行く。前者は三百年前雷火の爲めに倒れて、今は三つに折れて地上に横はつてゐるが、全長七十尺餘。若しこれが直立して居たならば、定めて偉觀を呈することゝ想像せられる。折しも向うから黒衣白巾のブリ

タニーの若い村娘二人、芝生の上を此の石の傍に歩んで来たのも一幅の畫の如く、たゞ雨中我々の「カメラ」を用ひることが出来なかつたのを遺憾とした。又た後者の「ドルメン」は此邊でも一番大きなもので、其の天井の板石は恰も朝鮮の支石塚の如く、内に入れば奥壁天井石に、いろ／＼の彫刻があるのを見ることが出来る。

我々はロクマリアケーから歸途、なほマネ・ルドの「ドルメン」(Dolmen de Mané-Tud)に立寄つたが、是はジク／＼した海草を庭に撒き散かしてある汚ない農家の附近にあつて、石室の中から先刻カルナックで見た土耳其石の頸飾や石鏃土器などが發見せられた處である。今なほ封土が天井石の上まで残つてゐる具合は一寸面白い。併し此等カルナックの「ドルメン」は、其の構造に於て多少古拙粗大な處はあるにせよ、大體に於いて日本の露出石室の簡單なものと外觀上大差はなく、たゞ其の石器時代に屬する丈が違つてゐるに過ぎない。但し「メンヒル」(立石)「アリニユマン」(列石)の兩者は、未だ日本に於いて多く見ないものであつて、近頃日本の各地で「メンヒル」發見の報道を耳にするが、果してそれが有史以前のものであるか、否かを私は疑ふのである。

九 アウレーからエジエーへ

アウレー附近にはなほ古い建築などの見る可きものがあるのを割愛して、次の朝九時過の汽車で

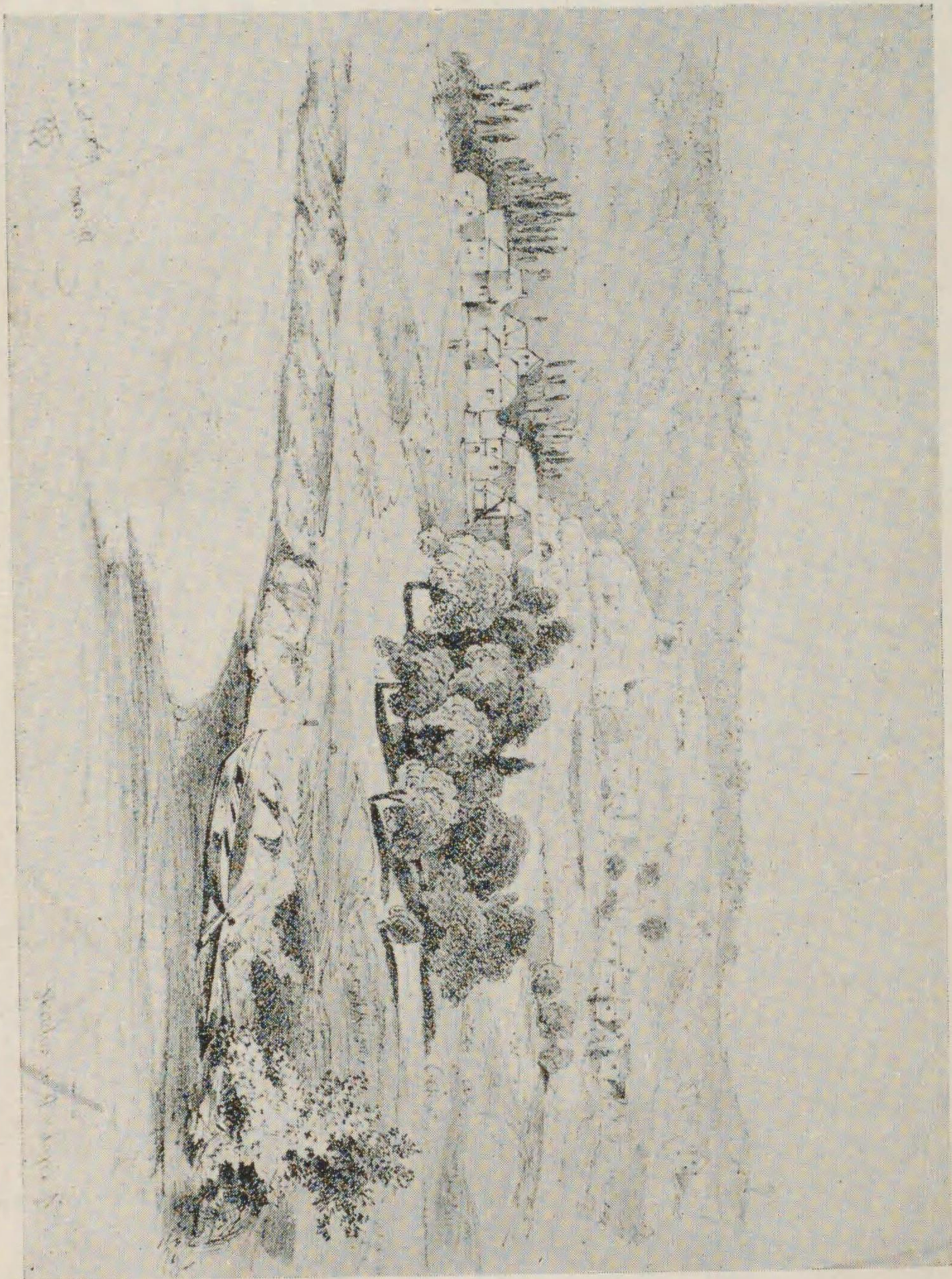
南佛ポルドウへ出發する。此の日は途中ナントで一度乗換をした丈で、夕方七時まで終日車中で暮したのであつたが、食堂車がない列車なのでナント國鐵驛で、我々は紙箱入りの辨當を買ふことにして赤帽に頼んだ處、用意がないので急に拵へて女が持つて來る間、汽車の出發を一分許り待たして呉れたのは、氣が利いて嬉しかつた。ポルドウでは折悪しく赤帽が出拂つて見つからず、重い荷物を手に／＼持ちながら、停車場「ホテル」へ這入つたが、これは巴里出發以來の上等の近世的宿屋であり、我々はポルドウの美酒を傾け、部屋付きの風呂にも這入ることが出来た。

我々はポルドウの市中見物には大した興味もないので、直にドルドーンヌ州の舊石器時代の洞穴見物に行くことにし、荷物を「ホテル」に預けて、次の朝十時過ぎの汽車で、ペリギュー廻りでエジエー(Eyzies)に行くことにした。丘陵の間を縫うてヴェゼールの谷に入ると、かねてラルテー氏の著書の石版畫で見覚えのある様な田舎の景色が、親しく目の前に現れて來る。午後二時頃赤帽も居らぬエジエーの寒驛に着き、乳母車を守る耳の遠い老婆が、喇叭のやうなものを取り出して聞き取るのと、不思議な會話を交して「ホテル・ド・クロマニヨン」といふ宿への道を尋ねると、一筋道の向うにある工事中の家がそれであつた。是は何千年の舊石器時代にクロマニヨン人が矢張り住んで居つたと、同じ懸崖の下の赤煉瓦の三階屋であるが、其の前には荷車や自動車が横はり、木靴を穿いた老人が二人話し合つてゐる。その一人が宿の主人で番頭も居なければ、女中が一人居るばかり、

御客自身で何もかも世話をしなければならぬ處は、いかさま舊石器時代式であるが、却つて心安い處が嬉しい。荷物を入口に置いて、早速程近い此の村の博物館にペロニー (Peyrony) 氏を尋ねる。

懸崖の下にある古い城の様な建物は、即ち所謂博物館である。鈴を鳴して案内を求めても何の音沙汰もないので、下の往還まで歸つて、トある店の女に、ペロニー氏の在館か否かを尋ねると、確かに居る筈とて大きな聲で『ペロニー〜』と下から叫ぶと、上なる博物館の後ろの家から一人の老翁が顔を出す。『あれがペロニー氏です』といはれて、再び山に登る。

ペロニー翁はもと此の村の小學校長をしてゐた人であるが、舊石器時代の遺跡遺物の研究に没頭し、此のエジエー附近の實際に就いては、此の人の右に出づるものは無い生字引となり、今は専ら此の遺跡の保存調査と博物館の事を司り、苟も此地を訪ふ人で、ペロニー翁の世話にならない人はないと云はれる位である。翁は私共を懸崖の下の見晴しに招き、ロージェリー・ベース、フォン・ド・ゴーム其他の地を指しながら、早口で悉しく説明せられる。雄辯な佛語では殆ど聞き取り難いので、我々一同が呆然としてゐるのを一切構はず、西班牙アルタミラ洞窟の繪畫の發見せられた當時、學者も皆な之を疑つたことの話から、自分がフォン・ド・ゴームの洞窟繪畫を發見した時の事に移り、近頃評判のグロゼール問題を持ち出すと、急に活氣を加へ、かのレナツク氏の如きは机上の空論考古學者で、此のドルドーンヌ地方へは一度も來たことが無いといふ。是は我々遠く日本から見物に來る



(クリスチアナル著書挿圖)

ドルドーンヌ州サエセルの谷

人もある際、寧ろ奇怪至極に思はれた。

ペロニー氏の演說的談話を拜聴してから山を下り、村の小店で繪葉書や石器を買ひ宿に歸ると、部屋の用意が出来てゐて、U君は家族の室を明けて貰つて、別の入口から家に入り、私共二人は三階の二床ある部屋に落着くことになつた、夕暮ヅエゼールの新橋を渡り、河畔の芝生の上に出ると洵に西洋旅行以來始めて人里離れた山村の情趣を味ふことが出来た。宿に歸つて夕食をすませ、私共の部屋で話し込んでゐると、寒氣漸く身に沁んで暖房もない部屋には、たゞ外套を掛け「シャツ」をも脱がず、寢に就く外はなかつた。

一〇 舊石器時代の洞窟

巴里を出發前アベ・プルーイ老師に會つて、舊石器時代洞穴見物の道順など、いろいろ教を請うた際、ドルドーンヌ地方は今頃天氣が悪いだらうと云はれて、聊か恐れをなして居つたのに、今日いよゝく洞穴見物の日の朝になると、天氣は日本晴れの而も暖いこと春の様なので、一同勇み立つて宿の息子を運轉手として、九時半頃自動車で、先づ最初にフォン・ド・ゴーム洞 (Grotte de Font-de-Gaume) へ向ふことゝなつた。洞穴への小徑の處で車を降り、懸崖高さ百尺ばかりの中腹をばよち登つて、一足先きに洞の入口に著いて待つてゐると、後から肥太つて口髭さへ生えた番人の老婆が、悠

然とやつて来て戸口を開き、切符を賣り電燈を點してくれる。此の洞は餘り深くなく、奥行二百尺位、幅平均三四尺であるが、高さは一丈或はそれ以上に及ぶ處が多く、概して頭のつかへる心配はない。やがて稍々広い「ガレリー」と稱する處に達し、手持ちの電燈をつけ、之で照明して觀覽に便にしてくれる。而して此の「ガレリー」の兩側、丁度六尺前後の處に、かの有名な動物の形像が描かれてゐるのであるが、岩石の天然の窪みを利用して、獸の胴體を巧に現はしたものが多く、亦褐色黒色の色彩の外に、輪廓に線刻を施したものもある。「ビソン」馬、馴鹿「マンモス」など凡て八十許りの動物が、前後左右順序なく表現せられてゐるが、其の寫實的な圖法、其の善く保存せられてゐる程度は、西班牙のアルタミラ洞のそれには及ばないかも知れないが、是が今から一萬年近くにも溯る可き舊石器時代のマデレーンヌ期のものだらうとは、成程最初人々に眞偽を疑はれたのも無理はないと思はれた。此の洞はカムバレルの洞穴と共に、今から二十五年程前（一九〇一年）カピタン、ブルイ及び、先刻のペロニー三氏が發見したものである。

次に自動車に乗つて行くこと少時、カムバレルの洞穴（Grotte des Cambarelles）の入口に達する。是は前の洞とは違ひ、殆ど道路と同じ平面に口を開いてゐる。番人の家は直ぐ其の前にあつて三十過ぎの小柄の女房が我等を案内して呉れたが、此處には電燈の設備がないので、銘々一本の蠟燭を點じて穴に進む。此の洞は狭くして低く、多く身を屈して漸く歩むことが出来る位である。中

程の處で一人の老男と若者とが、穴の底を掘つてゐるのがあつたので聞いて見ると、別に發見物はなく、たゞ通行に便利にする爲に深く掘り下げてゐるのであると云ふ。動物の圖形は餘程深く進んで後、はじめて兩側に現はれて来る。先づ往路は右側のもの丈けを見て行くに、圖は多く一二尺の小さいもので、浅く線刻し彩色のあるものは甚だ稀である。而かも圖像が幾重にも重なり合つてゐるものが多いので、圖形は見分け難い。これを案内の女が一々指頭を以て、「これは頭」「これは胴」と「トレース」して親切に説明して呉れる。其の聲細くして優しく、時には我々の蠟燭を一方に集めて彼女の傍に坐せしめ、頭を傾けてつくづく眺めさせる。先刻入口で我々に吠えついた小さい犬も、此の女主人について穴の中にやつて來たが、いつの間やら我々の友達となつてしまつた。狭い穴のこと故犬の顔、女の顔、我々の顔もくつき合つて、何れも蠟燭の光に集まりながら、動物の畫を横眼に眺めてゐる親しさは、是こそ同穴の好みとでも云ふ可きであらう。遂には犬の顔に自分の顔をさしよせて撫でてやる。

此の洞の圖像には餘り優れたものは無い。形も小さく手法も弱いけれども、時たま「マンモス」、「ビソン」、馬の頭などに佳く出來たものもあり、殊に洞の奥に近い處に、三四稍々優秀な畫を見た。奥の方に進む處は、高さ三尺にも足らぬ程で、殆ど四つ這ひになつて歩く外はなく、外套を着てゐる我々は、暗い洞中で暑さと疲勞とで大分弱つてしまつたが、歸路は左側の圖像を見ながら四十分

ばかりで、漸く奥行三百米突の洞の見物を卒業して、入口に出た時には、ホツと蘇生の思をした。此の案内の女に、穴の中で働いてゐた若者は息子かと聞くと、『いえ、あれは隣りの人。自分には一人の男兒があつて、六歳になるが、いま學校へ通つてゐます』と答へる。して見ると彼女は思つたより若い年で、これは聊か失敬な問であつた。

一一 鐘乳洞からボルドウへ

このエジエ附近にある舊石器時代の洞穴は、フォン・ド・ゴームとカムバレルの二つ丈ではない。ムート、グレーズ、ベルニワル、タイヤークなどの洞があり、其他當時の遺跡地として見る可きものも少くないが、何分今日の午後にはボルドウへ歸へらなくてはならない豫定であるから、凡て此等を割愛して、たゞロジエリー・パス(Laugerie Passes)の方へだけ行くことにし、エジエーに引きかへし、午後ヴェゼール河に沿つて『地獄の谷』(Gorge d'Enfer)を左手に眺め、『グランロック』(Grand Roc)の處で車を降りる。懸崖の中腹に小さい陳列處があつて、こゝから發掘せられた遺物が並べてあるとの事であるが、今日は閉館で見ることが出来なかつた。併し崖の奥には黒石の碑が新に建てられて、クリスチー、ラルテー以來此の地の研究家の名が金文字で刻せられてあるのを見た。

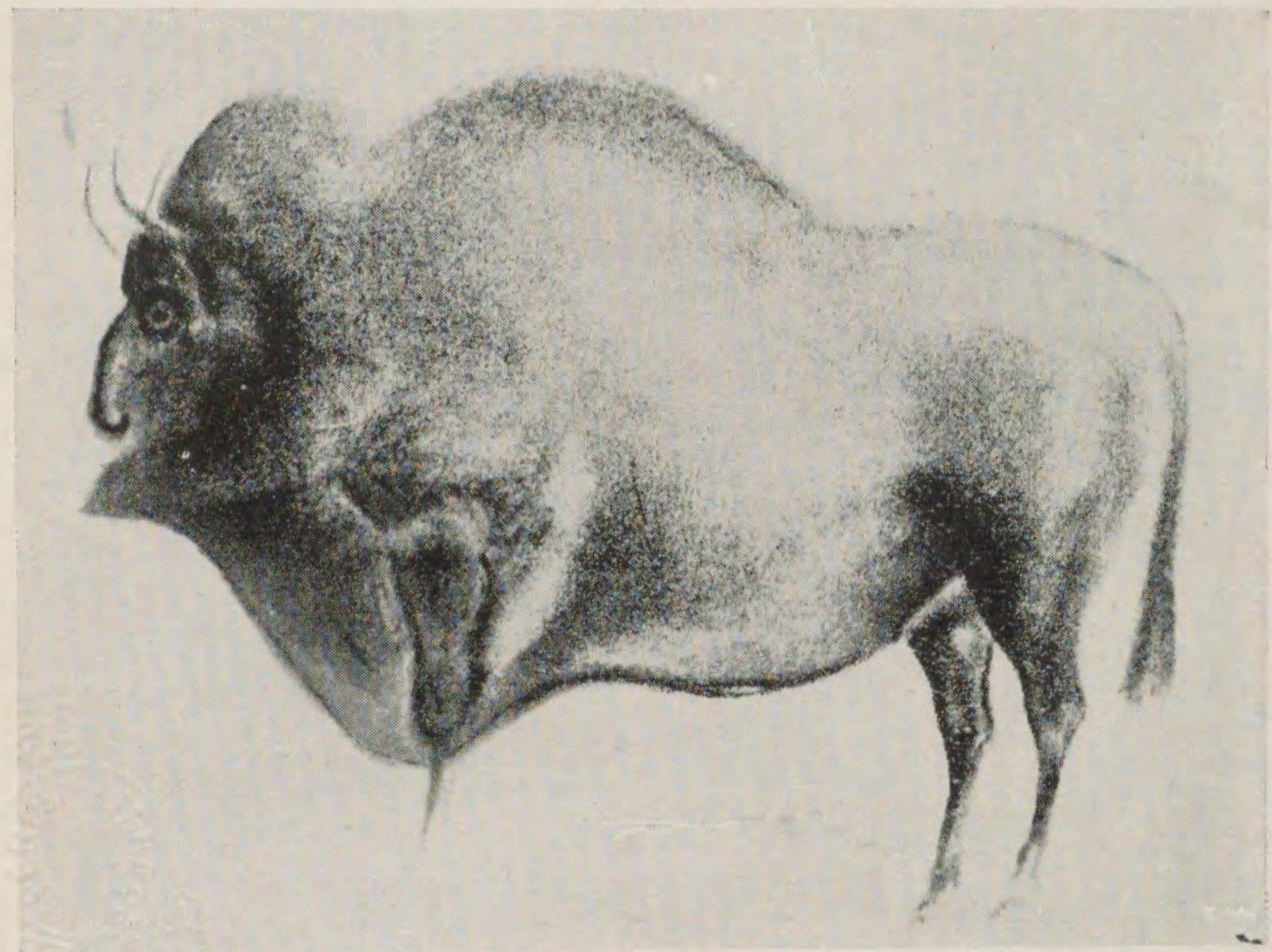


(梅原君寫眞)

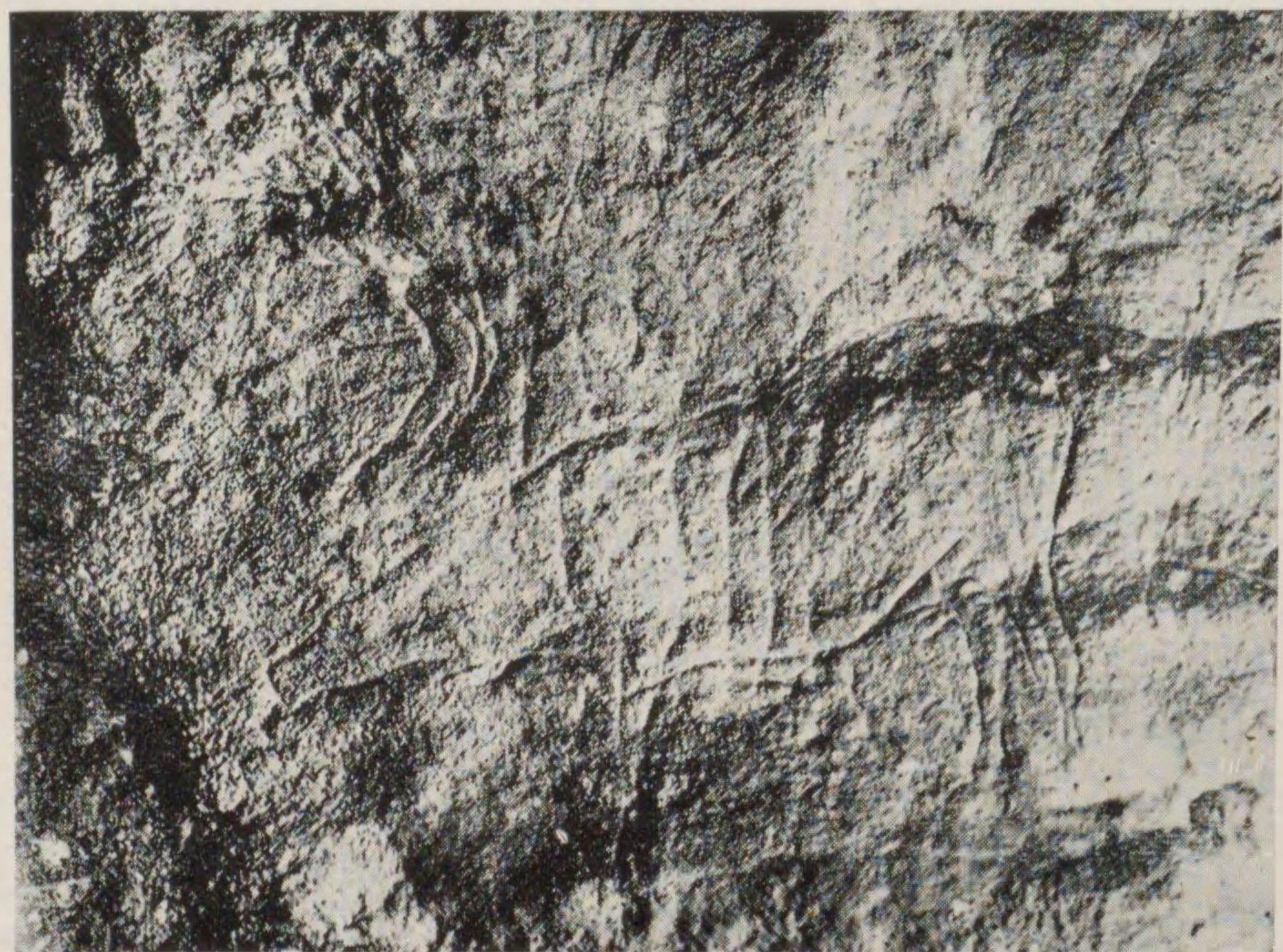


(上)フォン・ド・ゴーム洞穴入口

(下)同洞穴内部「ガレリー」



フ
オ
ン
・
ド
・
ゴ
ー
ム
洞
穴
繪
畫



カ
ム
バ
レ
ー
ユ
洞
穴
刻
畫

『グラン・ロック』の鍾乳洞は直ぐその左手にある。木の梯子を登つて、「アセチリン」燈を持った男に案内せられ、手にく蠟燭を振りながら、内部に這入つて行くと、鍾乳は或は「ツララ」の如く、或は素麵の如く、或は林の如く、或は時に横に、或は斜に、或は時に曲線なりに奇觀を極めてゐる。『マドンナ』と名づける石がある。日本ならば『観音』と云ふ可き處であらう。又た『日本の庭園』と稱する小さい石筍の竝んである處もある。二三の石片を記念に貰つて山を下り、徒歩ロージエリー・オート (Langerie Haute) に向ふ。此處には崖下の地層を發掘し、遺物包含の状態を標本的に現はしてゐるのがある。上オリニヤック期から下マデレーンヌ期までの石片獸骨等、ギツシリと含まれてゐるのが見え、傍に一個の小さい陳列棚を置き、各期の遺物を陳列してあるのもよい思ひ付きである。

我々は宿に歸つて中食を済まし、ヘロニー翁を博物館に訪問したけれども留守なので、博物館を見ることが出来ず、空しく引きかへす道すがら、ヒョッコリ翁に出會した。併し汽車の出發の時刻も切迫してゐるので、遂に三時前の汽車でラプイソン廻りの道を取り、ポルドウの「ホテル」へ歸り着いたのは七時過ぎであつた。

次の日の朝はポルドウの市中を自動車で急行的に見物する。ポルドウは大きくはあるが餘りキレイな町ではなく、たゞ聖アンドレーの伽藍は十二世紀から十四世紀の建築として、殊に北側の入口

とロアヤール門の彫刻を見る可く、同じ「ゴシック」式の鐘樓の別に離れて立つてゐるのが一寸珍しく思はれた。「ブラス・デ・カンコンス」から聖ブルノーの寺、聖ミシエールの寺を廻ると、はからず此の寺で結婚式を済まして石階を下りてくる新夫婦を見た。撒き散した木の葉の間を踏んで「ゴシック」の寺内に入るのも、面白い経験であつた。

ポルドウの市中見物を済ました我々は、いよ／＼午後一時二十分發の汽車で、一路西班牙に向ふのである。あこがれの西班牙、我々は明日の朝には、早やマドリーの都の人となつてゐることかと思へば、心躍らざるを得ない。(昭和三年十月)

西班牙の旅

一 西班牙に入る

フランスのポルドウを出てから、汽車は暫らく小松原の中を走る。夕暮バーヨンを經てエンダエに着けば、こゝはフランス側の國境として、車中の人皆一旦下車しなければならぬ。二人の赤帽はわれ／＼の荷物を一切合財「エビアン」の水の瓶まで持つて、荷物検査所でドウ／＼廻りする有様は頗る物々しいが、その實はたゞ一片の形式に過ぎない。そして再び元の車室に歸へつて、今度はスペイン側の國境イルソンへ着くと、これまた同様の荷物旅券の検査がある。元來われ／＼はスペイン語を全く知らぬ啞同然。こゝに至つては俄に心細さを加へたが、驛の大きな食堂の御客もなくガランとした中に、始めてスペイン流の夕食を攝る。隣席に食堂の女中連とみゆるスペインの「マトロン」が卓巾を修繕してゐるのも心安く、暫らく「ストープ」にあたつて時を過ごしたが、八時過ぎいよ／＼マドリー行きの列車に乗込む。スペインの汽車は大抵一等と三等の客車があるだけ、しかも三等は一、二輛しかない。軌幅もフランスなどより少し大きいので、やゝユックリとして氣

持がよく、その上乘客も少ないので、座席を自由に廣く取ることが出来た。

コンカの灣に臨む美しいサン・セバスチアンも、たゞ閃々たる燈火の星の如く水に映ずるのを見たばかり。梅原君が別席に退いて早く寝てしまつた後は、龜井君と二人で借りた枕に頭を横たへたけれども、暖房が暑過ぎるので寢心地が悪く、なか／＼寝つかれない。まゝよ今晚は御通夜のつもりに語り明かさうと、一時過ぎまで話してあるうちに、いつの間にかやうら二十歳ばかりの、身なりも餘り立派でない若い男女が、われ／＼の部屋に這入つて来て、戸口に近くソツと腰をおろした。彼等の持つてゐる荷物は毛布と小さい鞆がたゞ一つ。折角伸ばしてゐた足を引き込みまして、彼等に席を譲つたが、さてこの深夜何處の驛から何處まで行く人々であらうか。互ひに黙々として語らず、女はやがて鞆の上に打伏してしまふ。さては相思の間柄を故ありて遠く走らんとするか。將たまた父母故舊の變に赴かんとするか。いさゝか氣の毒な思ひがして、いろ／＼と想像をめぐらしてゐるうちに、一時間ばかり立つて、彼等はブルゴス邊で下車したらしく、われ／＼もいつの間にか睡に陥つた。

七時ごろ眼が覺めると、もはや夜は明けそめて、窓外は一望たゞ荒涼たる石原の如きを見る。あこれスペインの高原にあらずや。大小の石はさながら捨てられた「ドルメン」の如く、人家は極めて少く、石國とも名づくべき國土と思はれた。遙か左手に名高いエスコリアル(Escorial)の僧院の大きな建物を望み、九時誤らずマドリーの驛に着いた。かくの如くして、一九二八年正月十一日わ

れ／＼は西佛の旅行を終へて、恙なくスペイン國都の人となつたのであるが、さて宿屋は何處に決めやうか。出迎へてくれる友人もなく、言語不通のこの國で便りとなるのは、大正十五年の出版に係る舊いベテカー一冊である。

二 マドリー府、プラド畫廊

われ／＼はベテカーに出てゐる宿屋のうち、質素ではあるが「評判よし」と註せられてある『ホテル・オリエンテ』すなはち東洋館といふのを選んで、これに車を走らせた。此の宿はアレナール通りにあるとのことであるが、賑やかなソルの廣場を経て、さて宿屋に着いて見ると、大分舊式でキタナらしいのみならず、老番頭はじめ宿のものはスペイン語しか話さないので、大に勇氣を挫かれたけれども、今更出るわけにもゆかず、いつの間にか部屋をあてがはれてしまつた。併しこの宿の主人にはその後會つて、彼れが佛語を話しかつ頗る親切な男であることがわかり、いろ／＼われ／＼の便宜を圖つてくれたのみならず、年寄の女中と少年の給仕は、手眞似と片言で私達と話すのが楽しいと見え、時々部屋へ遊びに来るといふ有様で、遂には頗る家庭的に感ずるに至つて、この宿に御輿を据ゑることに決心した。

宿に着くと直に手眞似で一週間以來の洗濯物を女中に命じてから、先づ日本公使館を訪れること

にした。幸ひ太田公使にも會ひ、龜井君の知友笠井君とも相見ることが出来たのは嬉しかった。笠井君は親切にも市中見物の案内をしようとのこと、それでは何はさて第一にブラド (Prado) の美術館をのぞいて見ることにした。細長い建築の一端から階上の室に入ると、先づイタリヤ復興期初葉の繪畫が並んでゐる。そのなかにアンヂエリコの聖母受胎圖もあつたが、氣に入つたのはラファエルの筆に成る赤衣の若い僧正リアリオの肖像である。その典雅にして端麗なる筆致はセバスチアン・デル・ピオンボの影響を受けたものと稱せられてゐる。チチアン、チントレットなどの諸作を見て、次にこの館の最大の誇りであるヴェラスケスの諸室に入ると、スペイン諸王及び家族の肖像、基督磔刑の圖などがある。次の大陳列室に進むと、われらの周圍に展開せられる彼のあらゆる大作傑作がある。さて何の圖から見て行かうかと迷ふばかりであつたが、北側には『ゴブラン織』『イソポ』『メネド』などがあり、東端には『ブレダの開城』南側には『アルカン』『酒飲み男』などが見え、寫真で年久しく馴染の諸作は皆わが目の前に並んでゐる。ヴェラスケスの偉大なる手腕と、彼れの全力量はこの畫廊に來なければ、到底十分に會得することが出来ないであらう。またエル・グレコの大作も或る一室に並べられてあり、此の特徴ある異彩を放つた畫家についても、はじめてその面白味を知ることが出来た。

更に新築の大廊に入ると、こゝにはヴェラスケスもあるけれども、主としてムリリヨ、リベローラ、



(上) ゴヤ筆著衣のマハ夫人
(中) 同裸體のマハ夫人
(下) プラド畫廊



(下) 萬治版伊曾保物語挿畫
(上) ヲエラスケス筆イソボ像



ゴヤの作が多く掛かつてゐる。ムリリヨの軟弱にしてアマい畫には感心することは出来なかつたが、ゴヤに至つてははじめてその奇才に驚嘆する外はなかつた。王室の人々を描いた飾氣のない肖像畫の類はさることながら、圓堂の一端に相對して掛けてある『マハ夫人』の裸體と着衣の畫前には、暫く歩を止めて立去ることが出来なかつたのは私ばかりではない。あの妖艶な女性の魅するが如き顔の表出、美しき肉色、青緑の「ビロード」の床上に横臥したる姿は、實にイタリヤ畫家が今まで描き古した女の姿とは、全く新なる美術を形造つてゐるではないか。しかも、彼れは十八世紀の末葉の人なるを知るにおいて、われ／＼は一層の感嘆を禁じ得ないものがある。

次に地下室に降りて行くと、なほ多くのゴヤの作品がある。輕妙な風俗畫など、いさゝか粗雑に流れた感はあるが、彼が獨特の境地を開いてゐることは争へない。彫刻室を一巡して館外に出た時には、すでに一時を過ぎて、空腹の俄に襲つて來るを覺えた。

三 西班牙料理、考古博物館

われ／＼は笠井君に頼んで、スペイン流の料理屋へ案内してもらふことにした。ヘラドールス廣場にある『バチン』といふ家に這入ると、これは一六〇二年の開業と稱し、有名な文人なども始終出入した處として、部屋は狭くキタナイけれども、なか／＼趣はある。「メヌー」が羊皮紙に書いてある

のも氣に入つた。いくらスペイン名物でも、豚の腹子には閉口して、アサリ貝の汁、鷓鴣の煮付けぐらゐで我慢する。食品を黒く古びた土焼に入れて來るのも面白く、スペインの葡萄酒「リオハ」の杯を傾くれば、陶然として南歐の氣分に酔つてしまふ。況んや隣室には大宴會があつて、男女數十人喝采の聲を揚げ、拳をさへやつてゐる大陽氣の有様は、日本支那を除いては、歐洲において此の國とイタリアならでは、到底見ることにない光景であるに於いてをやである。

食後はアルカラの大通りを歩いて遂にエル・レチロの公園に出る。こゝには「ラゴ」(湖水)と稱する大きな池があつて、向ふ側に樓閣が立つてゐる具合は、ローマ時代の庭園を思はしめるものがある。池には「ボート」を泛べて美人を載せて漕ぐ人もある。夏の日の夕暮の情景さこそと思はれるが、なほこの公園内の自動車道を逍遙すると、マドリーの上流社會の人々が、いづれも上等の自動車をスル／＼と緩く驅つて「ドライヴ」をしてゐる。そしてそのなかには佳人を擁してゐるものも多い。枯林のあなたに冬の夕日が血の如く赤く落て行く景色は、さすがに物淋しく感ぜしむるものがないではないが、空氣は何となく柔かくして寒からず、さながら故國では鹿兒島あたりの冬の趣である。

マドリーの町の繁華にして近世的なることは、われ／＼の想像を裏切るものが多い。夕暮アルカラの大通りから、ソルの廣場邊の出入の盛んなことは、恰も毎日祭日のやうであつて、「カフェー」その他の盛り場の雑沓は凄じいものがある。群衆のうちには勞働者のやうな風體のものも少くない

が、同時に流行を逐ふ風流の男女は、更に一層多い。しかも漆髮にして雪膚、黒眸にして皓齒のスペインの女性に至つては、イタリアのそれに比して一段の東洋味を加へ、太田公使のスペイン美人に對する最大の讚辭も、大した誇張でないことを信するに至つた。

ブラドの畫廊を見た次の日の午前は、國立博物館の考古學の部を訪ふことにした。これはちやうど國立圖書館と裏表になつてゐる建物であつて、なか／＼廣く、地階には新舊石器時代の遺物をはじめフェニキヤ時代、ローマ時代の諸品がある。但し小さい銅像などの中には、僞物も少くないとペデカーに珍らしく悪口を記してゐるのは眞か。また支那漢代の車鑾とソツクリな銅器が、イタリアのものとして出陳せられてあつたのは、非常に面白いと思つたが、果してその出所は何處か。これにも多少の疑問を挟みたくなる。次にギリシア陶器室、その中にアジオンの銘のある一個は優品といはれ、クラヅメネーの陶棺も二三見受けられる。館の中庭にはこの國發見のローマ時代の彫像祭壇の類が多數あるけれども、これには美術的價值のあるものは少い。また他の諸室や中庭には回教時代及び基督教時代の作品を藏し、階上には土俗學の標本などのほか、寶飾室にはローマ時代や南米の黄金製飾品が少からず秘藏せられてあつた。

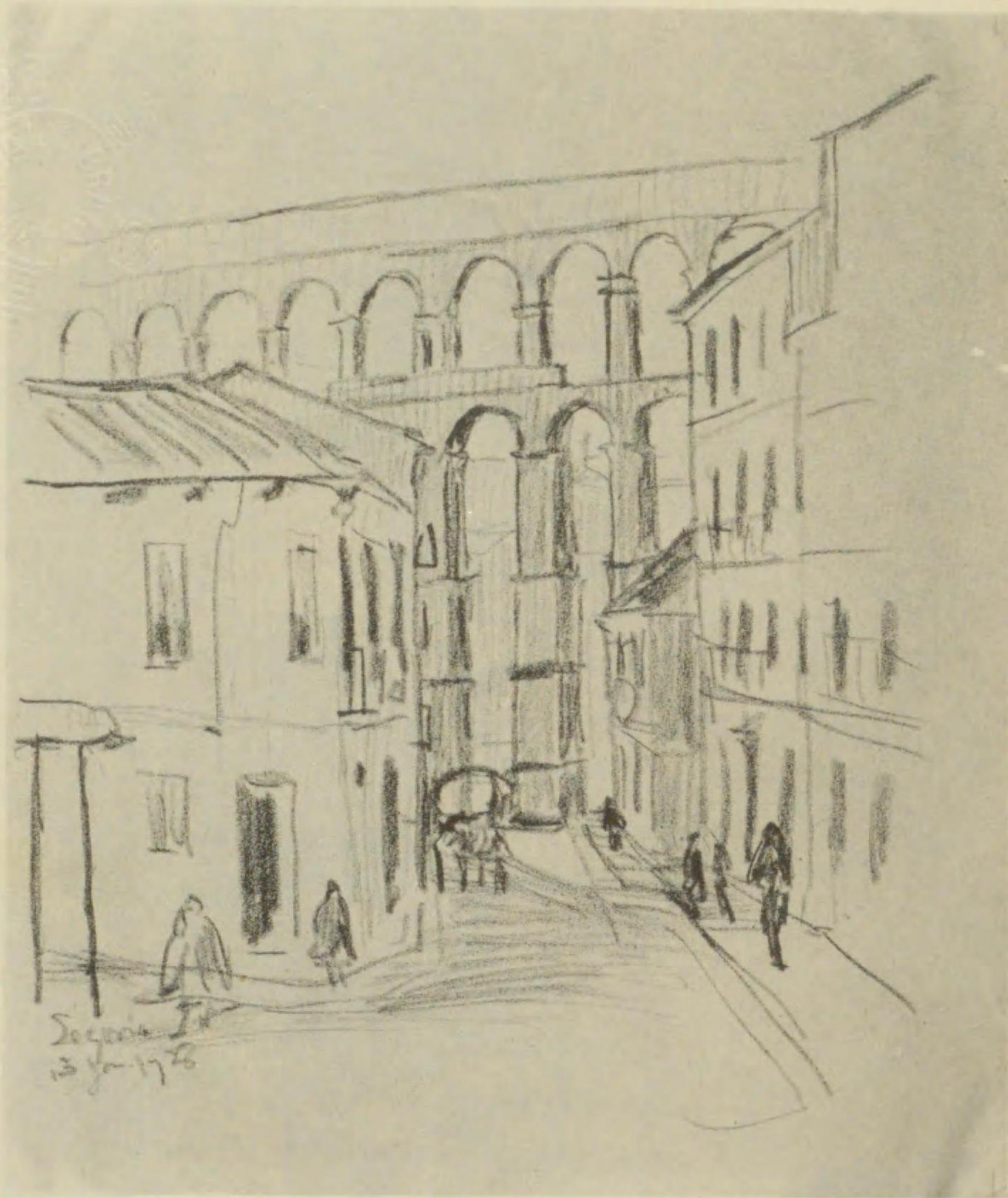
一時半ごろ博物館を出たわれ／＼は、アルカラ通のさる地下室の「セルヴェテリヤ」すなはちスペイン流の「ビーヤ・ホール」に這入つて、簡単な點心を食べて、空腹を醫すことゝした。われ／＼

の隣席には「ビール」の肴に小蝦を食ひ、その皮を山の如く皿に積んである連中がある。之を見て一つ蝦を食べたいと思つたが、さて蝦といふ言葉がわからないので、一寸蝦の畫を描いて給仕男に示すと、早速合點して笑ひながら持つて來た。これは「ガムバシユ」といひ、酒の肴にあつらへ向きのものである。

四 セゴヴィヤの羅馬古橋

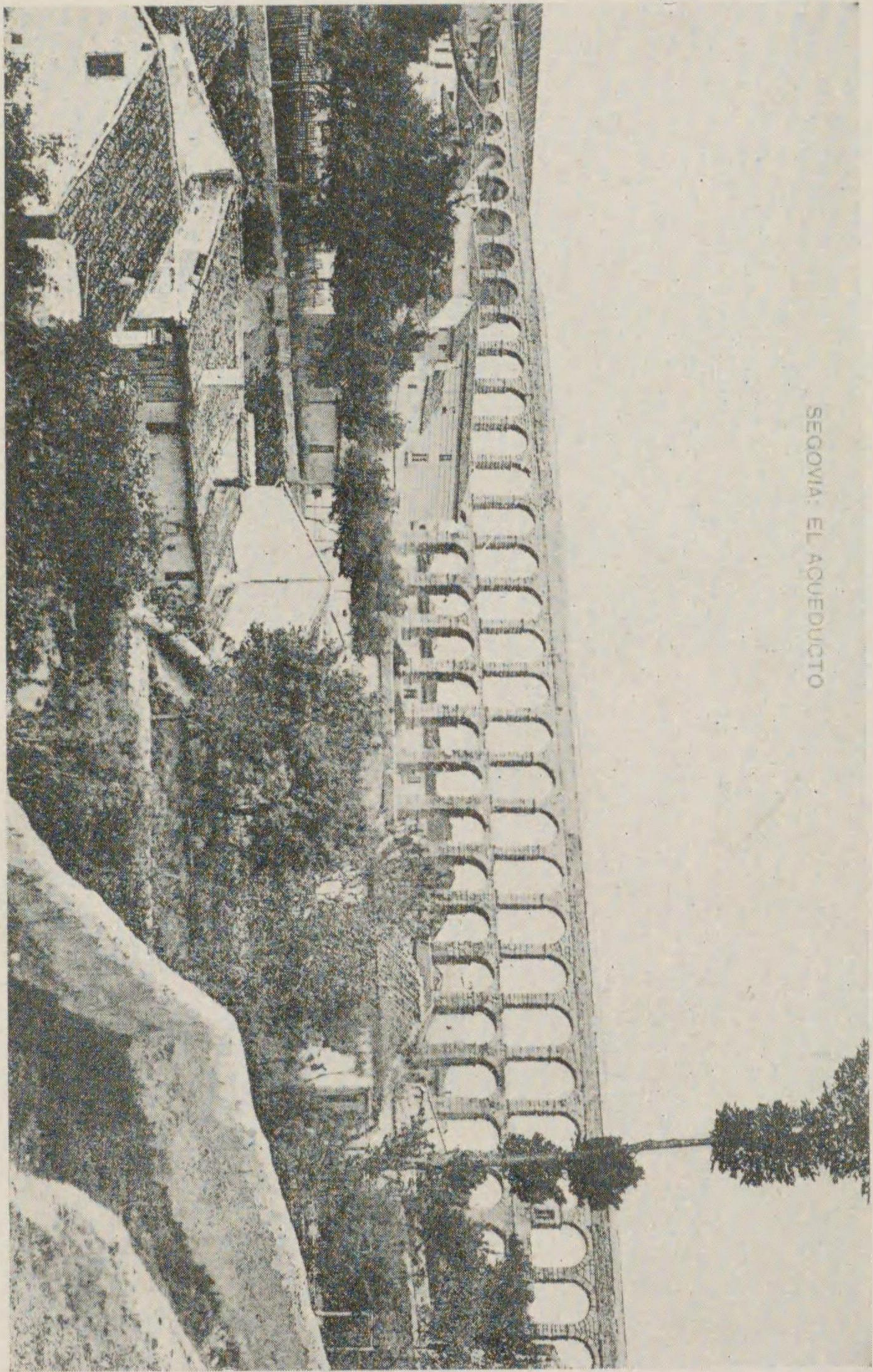
昨夜は太田公使邸に招かれて、半月目に心盡しの日本食に飽くことが出來たのは、渡り鳥のわれ／＼に取つて何よりの喜びである。殊に雞煮餅、野老、牛肉のスキ焼など、生憎料理人の病氣にいづれも夫人の手料理で、故國の風味に満腹することを得たのは、感謝の辭を知らぬところである。しかし、われ／＼は次の朝早くセゴヴィヤ(Segovia)へ行かなければならないので、スペイン流の長夜の宴に、夜の更け行くのを忘れるわけに行かなかつたのを憾みとした。

朝九時の汽車に乗れば、例の荒涼たる高原を過ぎ、シエラ・デ・ダアルダーマの分水嶺の「トシネル」を抜けると、十一時半ごろセゴヴィヤの驛に着く。セゴヴィヤは捨てられたる町の如く、驛の前のだゞ広い道は、却つて淋しさを加へる。そのキタナイことから全體の感じは、さながら支那とソツクリであるが、たゞ一つ重大なる相違がスペインと支那の間に存することを發見した。それは



セゴヴィヤの羅馬古橋

(青澁畫)



SEGOVIA. EL AQUEDUCTO

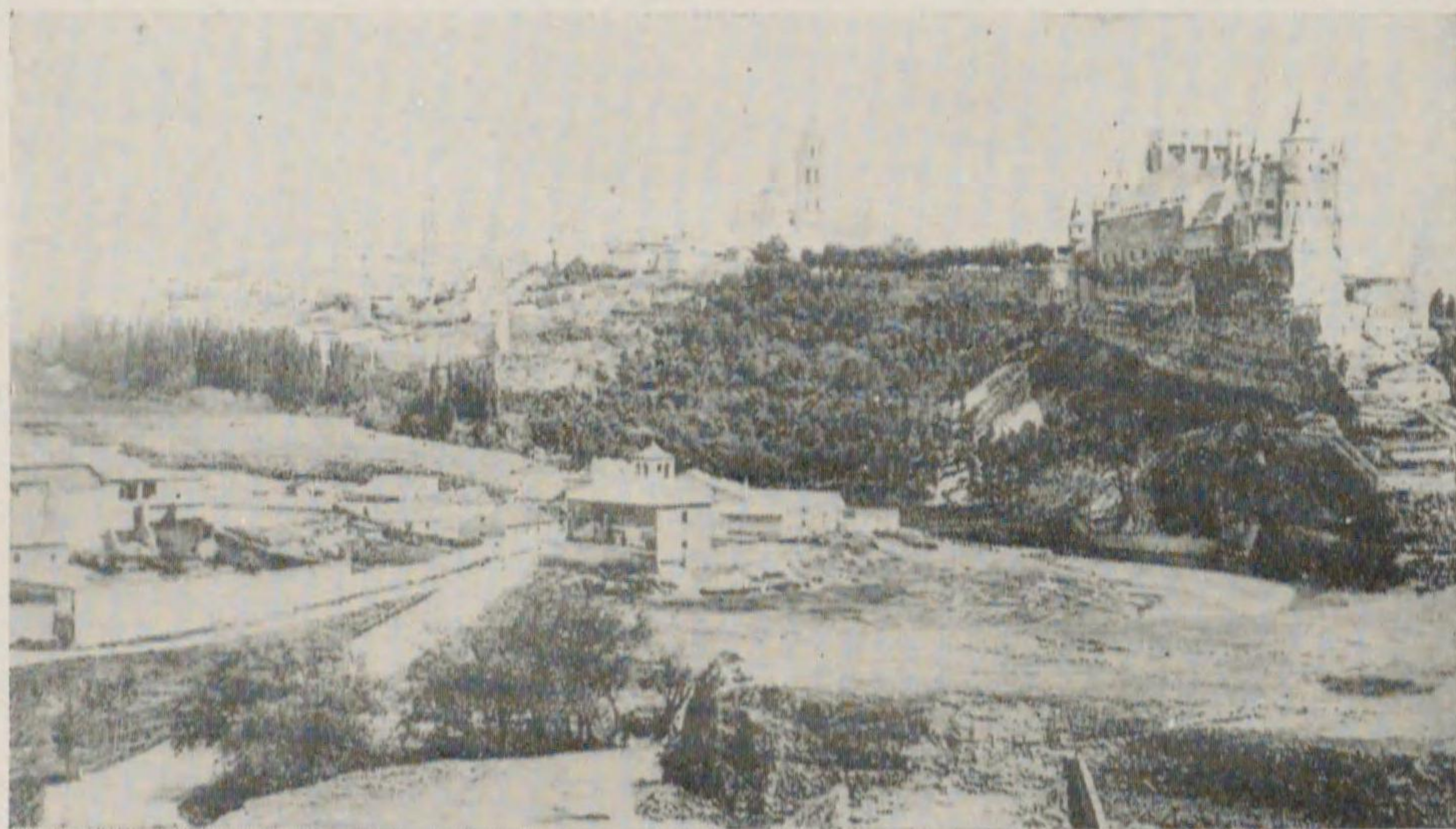
セゴヴィアの羅馬古橋



セゴヴィヤ 伽藍

(伽藍)

(アルカザル)



セゴヴィヤ 遠望

このキタナい廢屋のやうな家の窓や「バルコニー」の中から、白い美しい女の顔が時々出てゐることである。支那ではかゝる市の小路から現はれ出る女は、乞食のやうな衣服を纏つた銅色の老婆の姿のほかは滅多にない。

われ／＼がこの町に來たのは、名高いローマの古橋を見る爲めであることは言ふまでもない。二十分ばかり歩いて少し降り道になると、ブランドウインの畫でかね／＼見覚えのある水道橋が、長虹の如くに『アソケーホの廣場』を挟んで、兩方の谷に跨つてゐる奇觀が、忽然として眼前に現はれた時には、われ／＼は『ヤア』と嘆聲を發せずにはをれなかつた。これは今から約二千年以前、ローマのアウグスツス帝の時に創建せられ、その後トラヤヌス帝の時再修せられたものといはれるが、こゝから十マイル先のグアルダマ山脈のフリオ河から水を取つて、セゴヴィヤの東方において貯水池に入れ、そこから水道橋を通つて「アルカザル」に達するのである。橋の全長凡そ二千七百尺、最高九十五尺。大小二段の「アーチ」をなし、凡て花崗岩をもつて作られてゐる。かの南佛ボン・ト・ガールのローマ水道橋に比べて、その構造や、纖弱ではあるが、長さにおいては、三倍を越えてゐる。實にスペインにおける古代の一大遺物である許りでなく、世界におけるローマ時代の最大記念物の一ともいふべきである。土人がこれを『惡魔の橋』(El Puente del Diablo)と稱し、鬼工に附會するのも無理はないと思はれる。しかしこの巨大な古代の構造の下に、近代の低矮な人

家が立ち塞がつてゐる具合は、如何にも皮肉に見えるが、却つて面白い「コントラスト」で、畫趣を加へるのである。ブラングウィンもすかさずこの人家を添景として、面白い畫を作つてゐるので、私も同じ方向から下手な「スケッチ」を試みることにした。

しかし、セゴヴィヤにおいて見るべきものは、單にこの古橋ばかりではない。われ／＼は伽藍と「アルカザル」の城を是非見なければならぬ。狭い街衢の間に立つてゐる古い中世の家——中には「ムアー」式を少なからず混じてゐるものが多い——を見ながら伽藍へ行つて見ると、これは黄い石で造られた十六世紀の「ゴシック」式の宏大の建築で、その外觀においては何ら取り立てゝいふべきものを見ないが、その内部に入れば、六十尺にも近い柱が林の如く立ち、窓の高くして長いことも他にその例少ないくらいであつて、この伽藍ほどの莊嚴崇高の感を與へる建築は、餘り多くないかと思はれる。時間が遅いので、美しい「クロイスター」は遂に見ることが出来なかつた。

聖アンドレスの小さい會堂を見て、なほ西の方に進むと、セゴヴィヤの臺地の西端「アルカザル」(Alcazar)城の前に出る。リオ・フレスマの清流の洗ふところ、懸崖によつて畫の如き古城が立つてゐる。今の建築は十九世紀中葉のものに過ぎないけれども、古へのカスチリヤの城のよい標本である。内を見物して西端の突角「ブンタ」に出れば、巉々たる丘陵の起伏する高原は目の前に擴がり、グアルダマの雪峰は屏風の如く後ろにそびえてゐる。實にスペイン一流の絶景であり、セゴヴィヤの町が海拔三千三百尺ばかりの高原にあることが、今更ながら思ひ知られるのである。今日は日の光麗かに輝いてゐるに拘はらず、足先きまで冷たく感ずるのも、かゝる高原の上にあるため、全く無理のないことである。

五 トレドの舊都 (上)

マドリーの都だけを見て、スペインの景情が分かつたと思ふものがあるならば、それは恰も京都や奈良を訪はずして、たゞ東京だけをもつて日本を論ずる人と同様である。マドリー府が一五六〇年フィリップ二世の時國都に奠められるまで、ヴィシゴス、ムアーの時代以來長い間、スペインの政治的また宗教的中心は、トレド(Toledo)の市にあつたのである。しかもこの舊都において、中世のスペインの榮華と文化とが、今なほ昔ながらに残つてゐるのである。

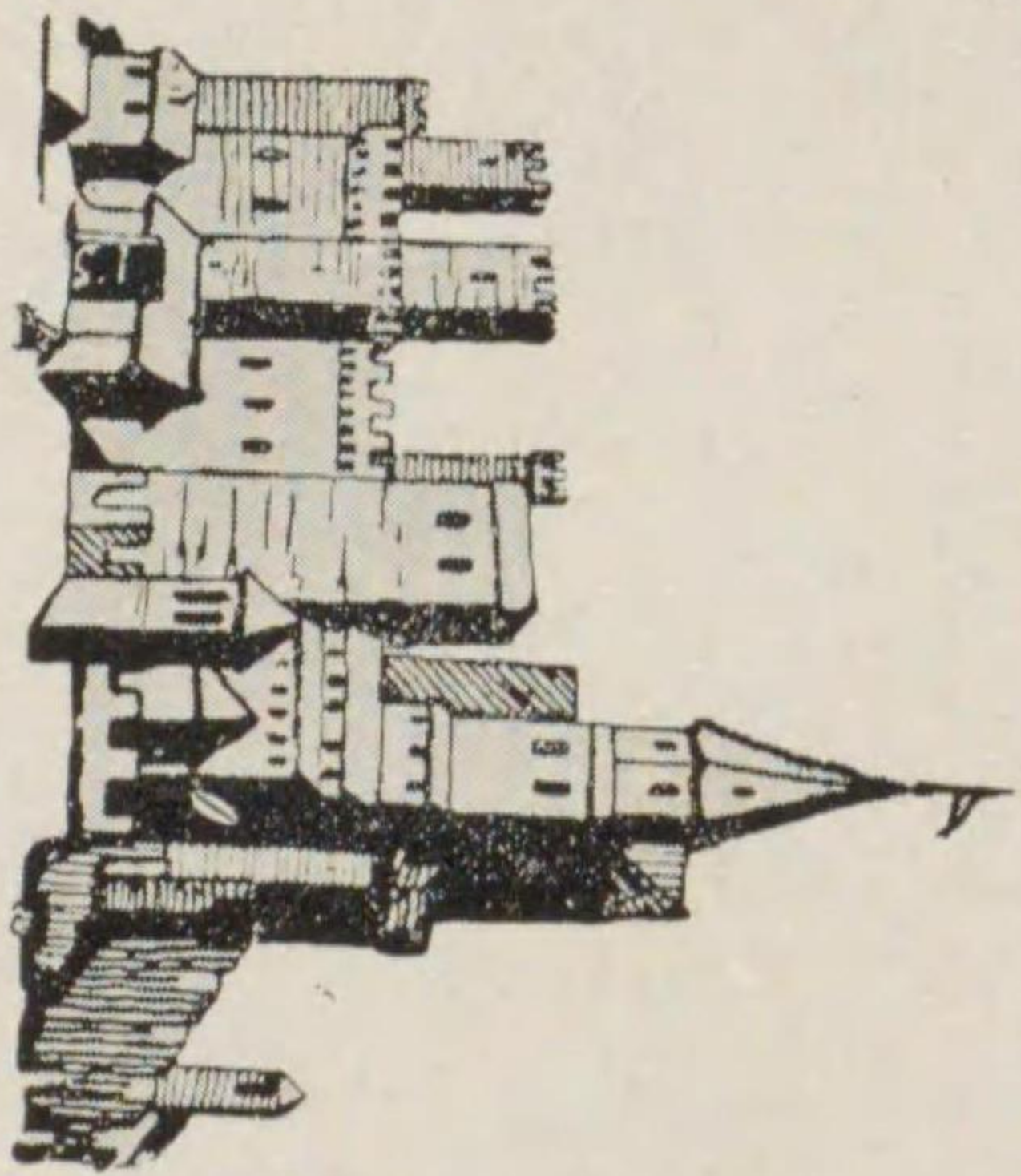
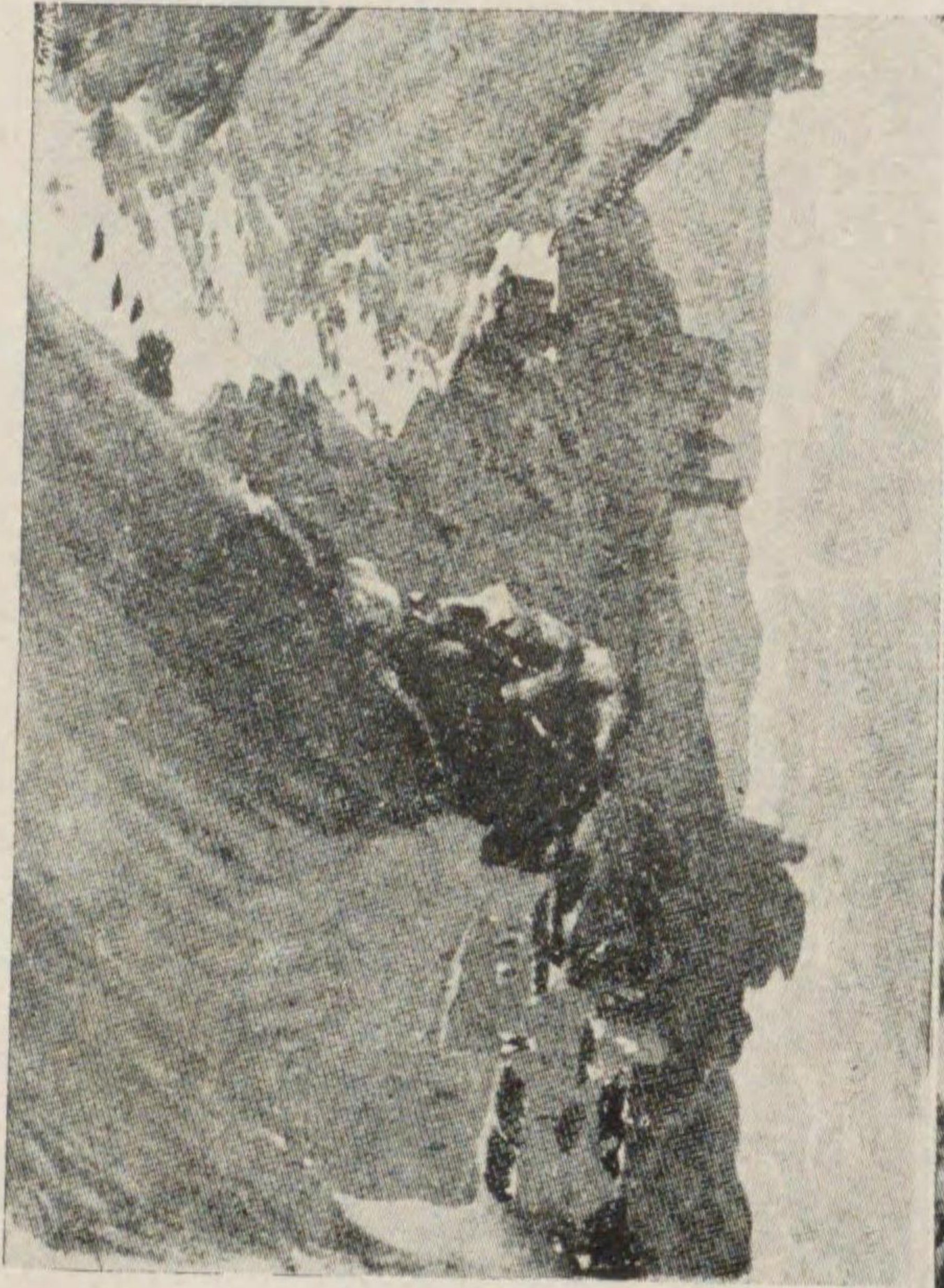
トレドの面白さは、しかし、この古い歴史と文化の都であるといふだけではない。その都の自然的地形の「ユニーク」なること、かくの如き大きな都會で、しかもかくの如き地形の上に立つものは、世界廣しといへども、その例決して多くはあるまいと思ふ。マドリーの南停車場を朝九時過ぎの汽車に乗つて、われ／＼はアランフェスを経て十一時過ぎトレドに着く。もしも自動車を飛ばさ

ずして、あの「ムジヤール」式の停車場から、悠々とアルカンタラの橋の袂に出たならば、われはモツと早くこのトレドの偉觀に驚かされたことであらうが、市中に這入つてパセオ・デル・トランシートの見晴しに出て、車を降りた時、はじめて脚下絶壁の底深くターホ（Tajo）或はTago）激流が、迂曲してこのトレドの丘を繞り、トレドの市はこの河によつて三方を取り巻かれた、花崗岩の瘤の上に立つてゐることを知つたのである。スツリート氏はトレドの地形を英國のダラムに比較してゐるが、いまだその趣の眞を傳ふるに遠いといふほかはない。この支那大陸にも似た高遠なるスペインの原野のたゞ中に、魁偉豪宕なる岩石の一塊が、ターホ河の迂曲してゐる一隅に突出し、その上に中世の建築が水晶の如く結晶せる奇觀は、支那にもまたイタリヤにも見出すことが出来ない。況んや英國においてをやである。われはこゝの見晴らしの上に立つて、しばらくはただ感嘆の聲を放つて眺め入るのみであつた。右手眼下に近く繪のやうに見えるのは、聖マルタンの古橋、河をへだて、對岸の丘上に立つてゐる小さい寺院は、カベーサの僧院であらう。

われは先づほど近いグレコの家（Casa del Greco）とその博物館に行く。エル・グレコ本名はむつかしいドメニコ・テオトコプーリ。ギリシア人であるゆゑに「グレコ」の稱を得たことはいふまでもない。彼は一五四八年ギリシア、クレタ島のカンヂヤに生れ、三十歳の時、このトレドへ來住し、一六一四年こゝで死んだのである。博物館には彼の作品二十餘點を並べてあり、彼の家には雅

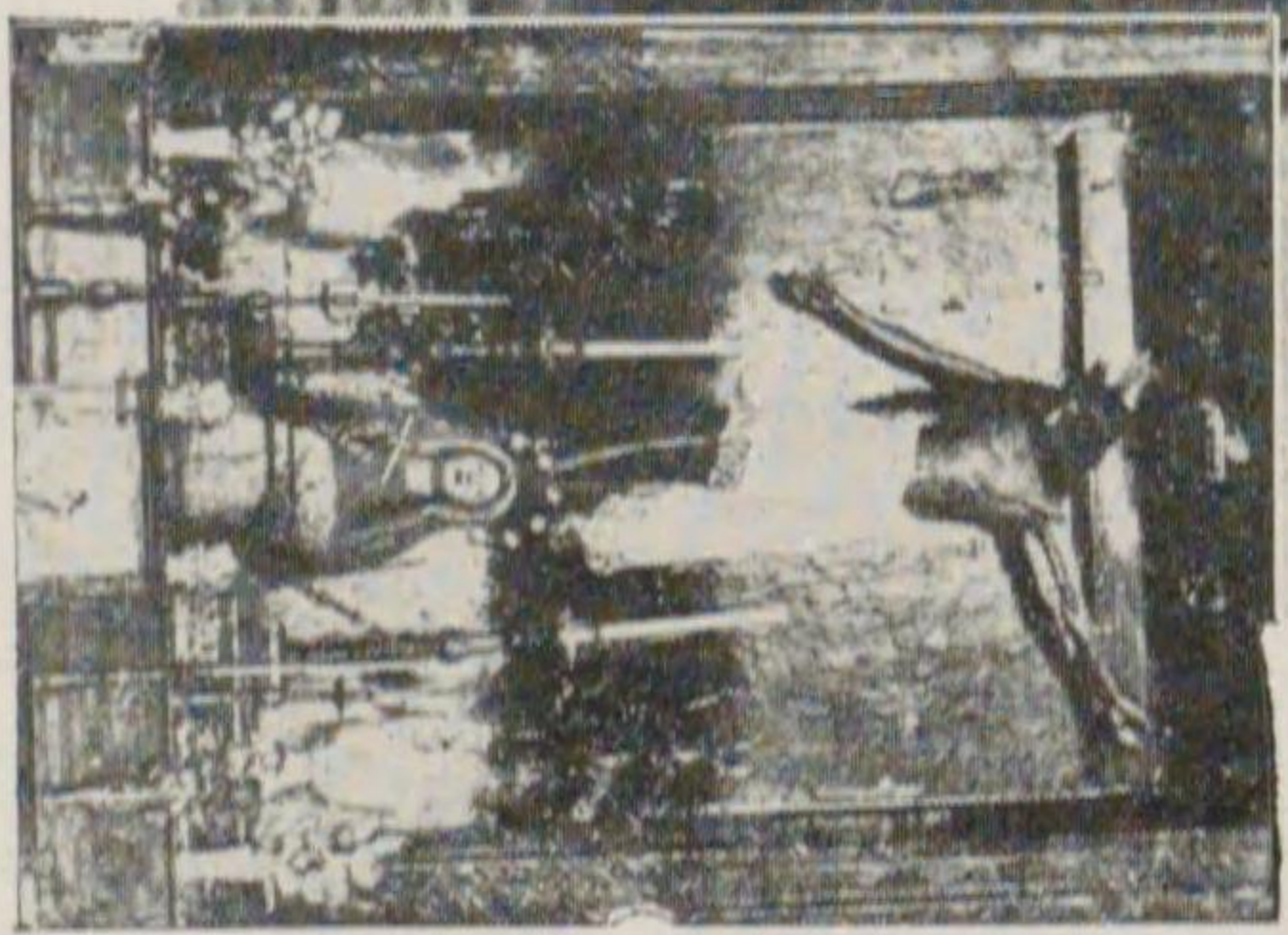
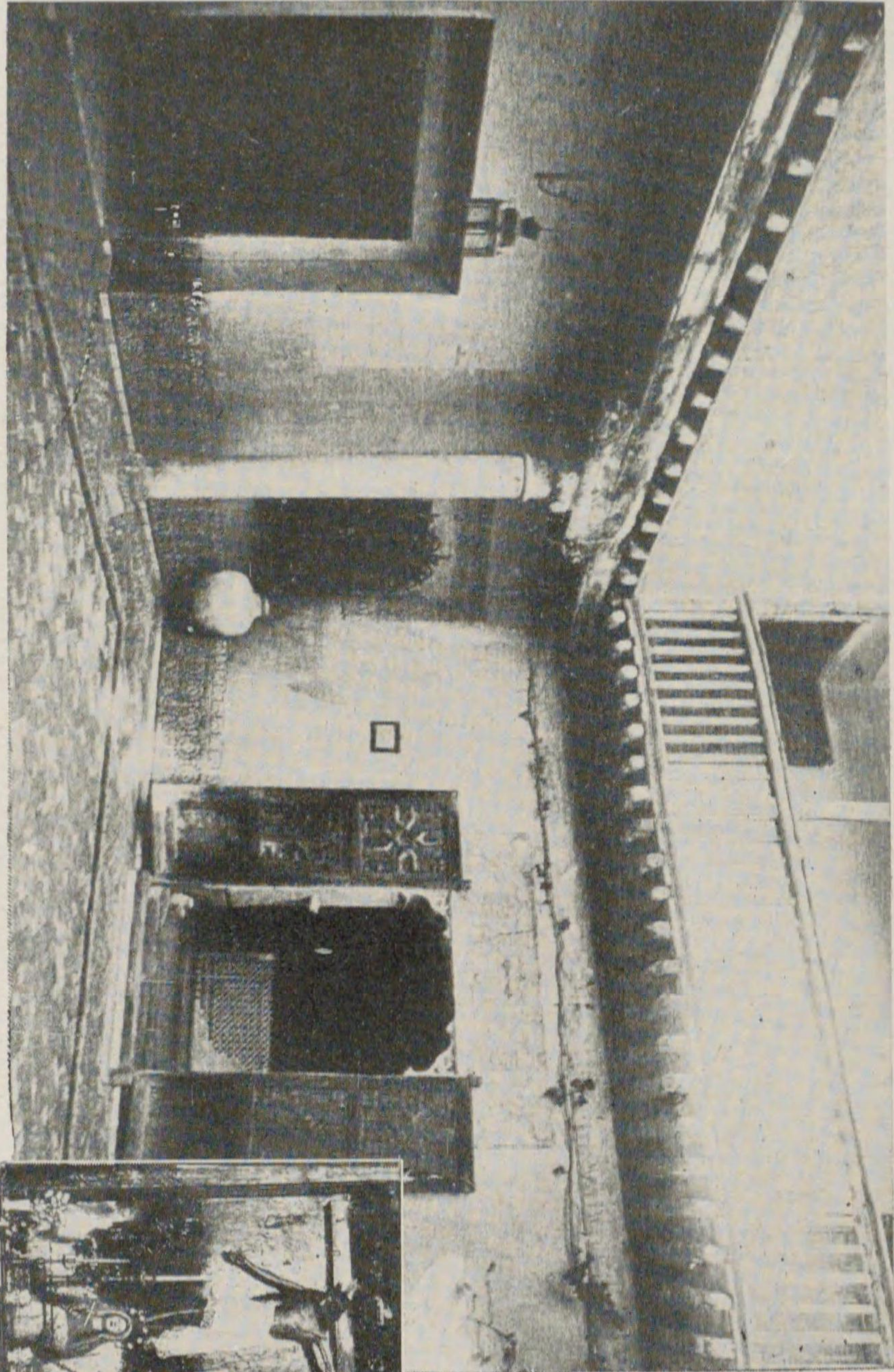


(ト) (ト) マドリード市風景
(ト) (ト) マドリード市風景



トレド市アルカザル古圖(第十六世紀)

トレド市グレコの家 中庭



クリスト・ラ・ベガの基督像

致ある中庭、臺所、階上の晝室などが残つてゐる。しかし、彼の傑作の唯一なる『オルガス伯の葬式』の圖は、この市の聖トメ寺にあるが、ちやうど鎖されてをったので見る事が出来ず、たゞ伽藍にある『エル・エスポリオ』の方だけ見ることを得た。

次にもとユダヤ教の食堂であつた『トランシット』(Transito)に入る。これは私の見た最初の「ムヂヤール」式の建築で、その精巧なる天井や壁間の裝飾には大に感心した。われ／＼の狡猾なる案内者は、それから無理にトレド名物の刃物細工の家に連れて行く。元來トレドの刃物は早くも紀元前一世紀の書物に「クルテル・トレタヌス」(culter toletanus)と出てゐて、爾來有名なものであるが、今は刃物よりもその裝飾たる鐵地金象嵌の細工を、主としてゐるやうである。われ／＼は小さな小刀や鋏などを買つただけで、しかもその細工の工場を親しく見る事が出来たのは、必ずしも損とはいへない。

この附近にある聖マリヤ・ラ・ブランカ(Sta. Maria la Blanca)の堂は小さいけれども、前の會堂よりも古く、馬蹄形の「アーチ」柱が立つてゐるのは、これも私のはじめて見た處であつた。次の聖ファン・デ・ロス・レイス(San Juan de los Reyes)の大寺に入ると、これは綺麗な「ゴシック」式の建築で、その「クロイスター」は特に面白い。この寺を出ると、ちやうど聖マルチンの橋を直下に見おろす廣場に出る。

六 トレドの舊都 (下)

聖マルチンの橋(Puente de San Martin)はトレドの西端にあり、一五一二年の建造であつて、同じ名の門の外に架つてゐる。これは橋の兩端に塔樓が附いてゐる中世の防禦橋の一好例である。この橋に關して面白い傳説が残つてゐる。昔この橋を作つた建築家は、計算を誤つて設計したので、足場を取去つたならば、橋は直ぐに墜落するだらうと心配し出して、ひどく氣に病んで病氣になつてしまつた。彼の妻は夫の生命と名譽とを救ふために、ある夜竊に足場に火を放ち、橋を墜落せしめたので、彼は新に完全な橋を造り上げ、病氣も治つたといふのが、すなはち今日見るところの橋であるとい傳へられてゐる。なほこの橋の西北河の右岸に『ラ・カーヴァの浴場』(Baño de la Cava)と稱せられるところがある。今はたゞ「ムアー」時代の橋門があるばかりであるが、昔ドン・フリアン伯の娘ラ・カーヴァ本名フロリダが、ここで浴みをしてゐた艷容を、ゴス王ロドリゴが上の方の城から覗いて見た。これを知つたフロリダの父は大いに憤激し、ムアー人の助けを得て、遂にロドリゴを打ち倒したのが、紀元七一一年で、これが即ちゴス王朝の滅亡となつたのであるとい傳へられてゐる。

この傾國の美人の話も近ごろは嚴正なる歴史家の手によつて、史實としては抹殺せられてしまつ

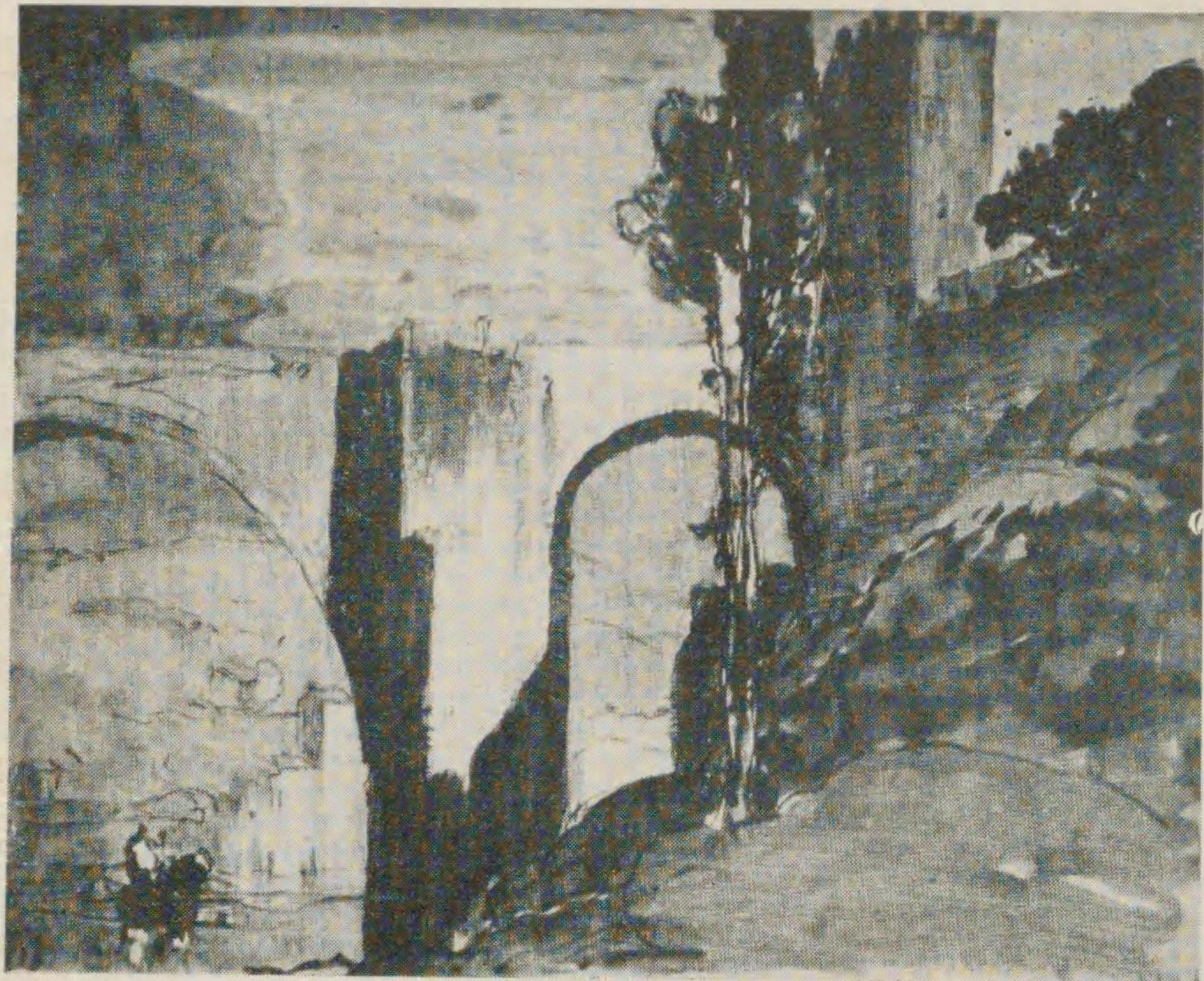
たが、われ／＼をしてなほ「ロマンチック」な中世の傳説のうちには、徘徊せしめるならば、カムボン
の門から北に向つて、平野の中に見える小さな御寺は、エル・クリスト・デ・ラ・ヴェーガ(El Cristo de
la Vega)の僧庵である。これはもと四世紀の殉教者聖レウカヂアの遺跡に立てられた大寺で、昔は
トレドの大會議は大抵この寺で催された位であつた。今御堂の祭壇にある十字架上の耶蘇の像は、
右手が垂れて落ちかゝつてゐるのであるが、これは昔デエゴ・マルチネスといふ男がイネス・デ・ヴァ
ルガスといふ女と、基督を證人として結婚を約しながら、これを反古にしてしまつた。女は遂に人々
と、もに男を拉して、この像の前に行き、基督に約束の眞偽を證せんことを願つた。その時この像
の右手が自ら下つて、その約束の誤なきを證したといふ。スペインの詩人ゾリルラは『善き裁判に
は善き證人』といふ題でこれを歌つてゐる。私はかくの如き傳説に満ちてゐるトレドを愛する。
それからトレドの北部の曲りくねつた小路を縫ひ、古い家々の間を潜つて行くと、そこには車の
音もなく、固より自動車の影も見えず、われ／＼はいつしか中世の人になつてしまつた感がある。
ソルの門に降りる坂道で、ゆくりなくクリスト・デ・ラ・ルス(El Cristo de la Luz)の廢寺を見たが、
これはコルドヴァの寺を小さくしたやうな、面白い十世紀の「アラビヤ」式の建築である。この寺に
あつた耶蘇の像にも、不思議な傳説が附會せられてゐるが、その一つにはユダヤ人がその足の釘穴
に毒を付けておいたところ、ある信心な婦人が来てこれを知らずに、そこに接吻しようとした時に、

その像はスーツと足を引きこめたといふ。
 ソルの門を見て、北サンチアゴの門を出ると、西側に古いヴィサグラ (Visagra Antigua) の門がある。なほ北に行くと聖フアン・パウチスタの大建築があるけれども、空腹に疲れて引きかへしアルパンデーガの見晴らしに登つて、アルカンタラの橋を望み、ソカドヴェールの廣場で中食をしたのは二時に近かつた。

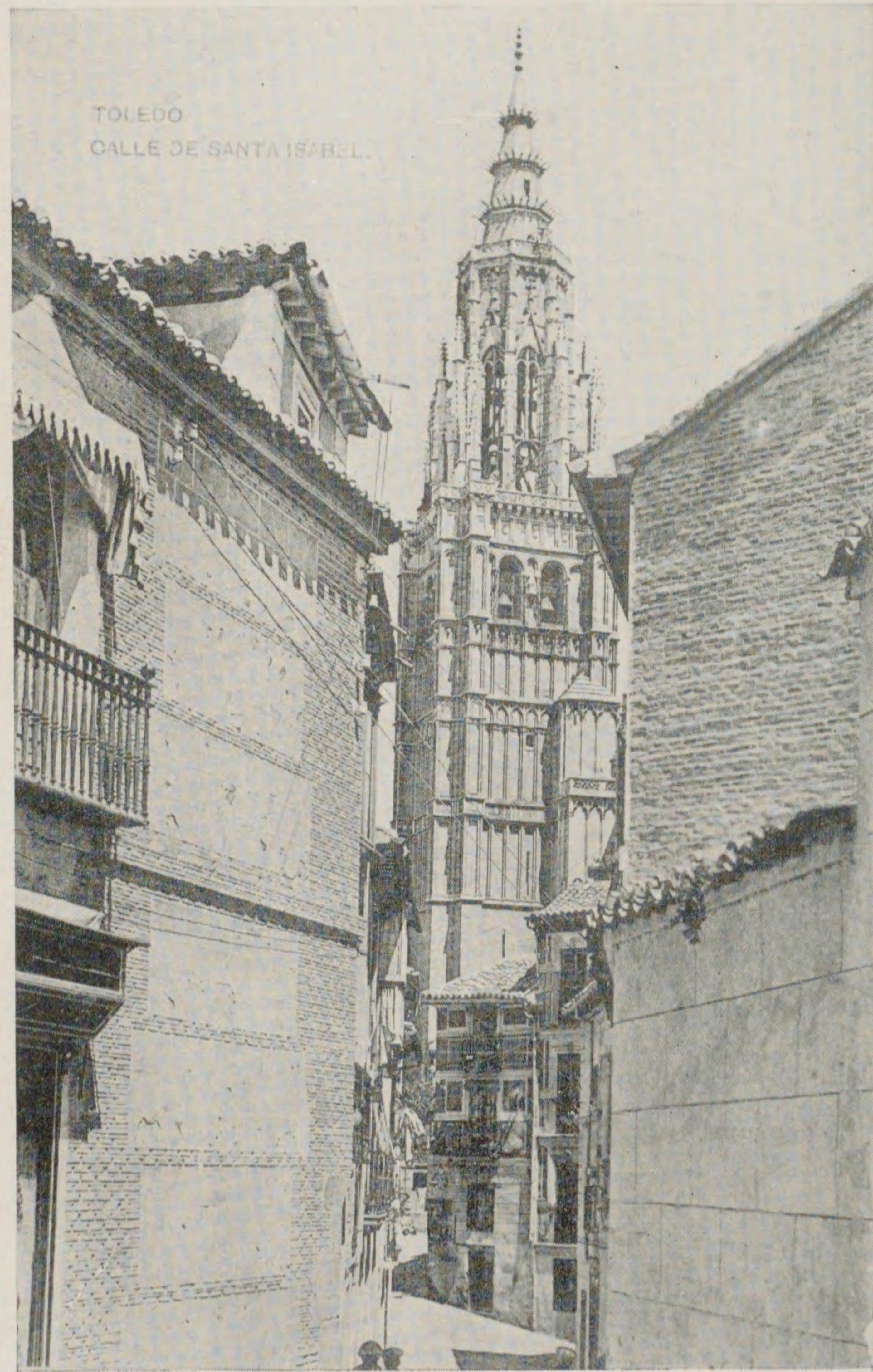
トレドの伽藍は華麗をもつて誇り、スペイン「ゴシック」建築の粹と稱せられるが、一二二七年礎石をおいて以來、二百六十六年を経て完成せられたものである。此の美しい大伽藍も、今は周圍に民家が建ち塞がつて、西南と東側の一角の外殆どその全形を見ることが出来ないのは残念である。しかし、そこがトレドのトレドたるところであつて、もしもこれ等の家屋を取り拂つたならば、伽藍は髻男が髻を剃つた後の如く、トレドの町の特徴は失はれるに相違ない。「コロ」や「カピラ・マヨール」の莊嚴、精巧なる木彫に驚き、寶器室に金色燦然たる法衣寶器に魂消げ、「サラ・カピチュラール」の木彫にも感心したが、全體の建築としては、質素にして嚴肅なるセゴヴィヤの伽藍の方が遙に優つてゐるかと思はれた。

伽藍を出てからを見物したのは、新しい「アルカザル」の城と聖クルスの廢院とである。われは夕陽暮き残暉なほ映するアルカンタラ橋 (Puente de Alcantara) を見晴らしの上から眺め、ターホ

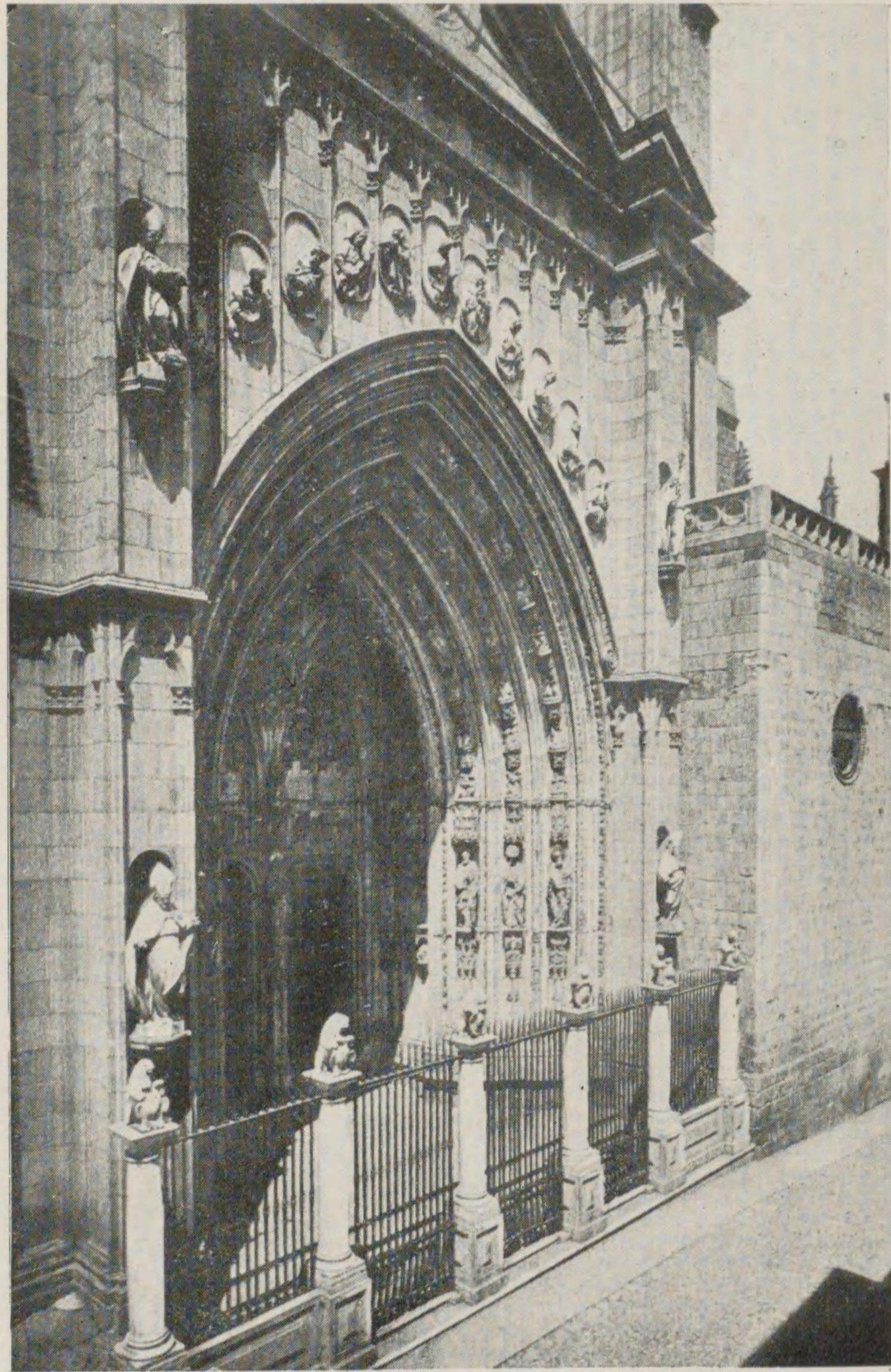
(上)トレドのサン・マルチン古橋(下)アルカンタラ古橋



(フラングウィン氏畫)



トレド市聖イサベラ通より伽藍を望む



トledo伽藍獅子門

の流れの落ち行く深谿を見入りつゝ、今更ながらトレドの舊都の趣味深きを稱へ、一日にして此處を去らねばならぬ「日程」なるものを呪つた。

七 アルハムブラの故宮

われ／＼のスペイン旅行はトレドの見物をもつて、その興味の絶頂に達したと思はれるが、なほ前途には南スペインにおける「ムアー」美術の郷土といふ大物が残つてゐる。これは或る意味において中部スペイン以上の興味を唆るものであらねばならぬ。それゆゑ、われ／＼はエスコリアル、アランフェスなどの見物を割愛して、直に南アングルシヤの旅へ發足した。

スペイン中部の高原はモレナの山脈を過ぎて、ドンキホーテの山中における悔恨の舞臺であると信ぜられてゐるヴェンタ・デ・カルテナスの谷に出で、名高きプエルタ・デ・デスベニヤベルロス(Puerta de Despenaperros)すなはち「犬の齒」を急下すると、岩石の褶曲は殆ど直角をなし、自然の奇觀をなしてゐる。こゝを過ぎると、われ／＼は早くもカスチラ州を出でて、アングルシヤに入つたのである。風強く日暮れて淋しいモレダの驛に乗換へて、夜九時半漸くグラナダ(Granada)に着き、驛から遠いアルハムブラの丘の中腹なる『ホテル・カジノ・アルハムブラ・パレーズ』といふ長い名の美しい宿屋の客となる。こゝで私たちはスペインに入つて以來はじめて入浴し、フランス以

來の垢を流すことが出来た。

アルハムブラ (Alhambra) の朝は早く明けて、ツと窓外を眺むれば、空は碧く日の光まばゆきま
でに輝いて、脚下にはグラナダの市の白い家々が、廣い野邊に畫のやうに擴がつてある美しさ。あゝ
われらは一夜にして既に南歐の人となつたことを直覺した。何はさてアルハムブラの故宮へ行かう
と宿を出でて、森の坂道を登ると、ウルさく案内者がついて來るので、遂に兜を脱いで雇ふことに
したが、いつの間にやら忽然として森の中から桃色の衣をつけた三十あまりの「ジブシー」の女が
われ／＼の前に現はれた。そしてスペインの踊に使ふ「カスターネット」を懷から出して、これを買
はせようとし、自分も一寸踊つて見せる。年はやゝ老けてもなほ美しいこの女、アルハムブラの
「ハレム」から現はれ出た妖精ではないかと疑はれる。

カルロス五世の廢宮の前からアルヒベスの廣場に出で、遂にアルハムブラの故宮に入れば、この
外觀は何の奇もなき煉瓦の小さい建物の中に、いかなる神祕と過去とを藏してあるかと、われらの
心は早くも躍らんとする。その灰色の「サラセン」式模様ある壁、象嵌ある天井、そこに孤影悄然
たる番人の姿を見るのも、なか／＼に淋しい感がある。一二の小さい部屋を過ぐれば、忽にして日
の光まばゆく碧空豁然として明るい「コート」の真中に、鏡の如き水をたゝへた一廊に出る。この
強烈なる自然の色が、柔かく鮮麗なる回教式の拱柱と壁飾と相伴ふところに、却つて神祕と夢幻と

があるのであらう。この「コート」はすなはち『アルベルカの庭』(Patio de la Alberca) 一名『アル
ラーネスの庭』である。この庭から北に接して『使節の間』(Sala de los Embajadores) がある、そ
の北端の窓が黒い輪廓をなして、緑の木蔭が隠見してゐるのも繪のやうである。

われ／＼は次にこの故宮の中心ともいふべき『獅子の庭』(Patio de los Leones) に出る。想像よ
りは小さく今は噴水も出ず、何となくもの淋しいが、周廊の柱の參差せる間から、中庭を眺める美
しさは何に譬へようか。『二姉妹の間』(Sala de las dos Hermanas) などの諸室を経て、階上から『王
妃化粧の間』(Peinador de la Reina) の塔樓に登れば、われらが高く懸崖の上にあるを知るべく、
谷を隔て、『ゼネラリーフェ』を望む佳景は、見るにこと久しくして、いよ／＼去ること難きを憾む
ばかりである。『ダラクサ』の庭には、絲杉や柑橘、匂高き桃金嬢の樹が茂りあひ、夏の日の涼しさ
を思はしめるが、百年前ワシントン・アーヴィングはこの邊の階上の一室で、かの「ロマンチック」
な『アルハムブラ』の物語を書き綴つたのである。それから地下室のやうなところを進んで行く
と、ユースフ一世の作つた浴室がある。中にも『カマスの間』は脱衣休息のところで、歌ひ手の廊
もついてゐる。この薄暗く狭い鍾乳天井の下、金碧の裁飾淡く色映ゆる室内に、香高い湯浴に夏の
日を夢の様に送つた「ムーア」の王侯妃嬪の生活は、如何なるものであつたらうか。われ／＼はそれ
を想像するよりも、今は夢の如く消え去つた過去の果なきを哀しむのである。總じてこのアルハム

ブラは、十三世紀から十五世紀の間に出来上つたものであるが、故宮の諸室大小幾十、しかもその大きなものといへども、方十數間を出でず、多くは「コート」を中心とし、天日を遮つて夏の最中閑寂清涼を楽しむを専らとしてゐる遣り方である。「アルハムブラは建築上獨自のものにして、これと並び比ぶべきものなし。ムアー人の趣味の横溢せる空想は、こゝにその頂點に達せり。細部の織麗の豊富とは、これ以上復た進むこと能はず。」とてその内部は全く夢の建築であると斷じたステータムの言は、洵に簡にして要を得てゐると思ふ。

八 グラナダの市、ジブシーの村

薄暗い神祕のアルハムブラ宮から明るい外へ出た時には、われ／＼は全く夢の世界から現實の國へ醒めた様な心地がした。「アルカザール」の城へ立寄つて眺望を恣にし「グイノの門」に近いリナーレスの店でいろ／＼の御土産物を買つたが、私はアーヴィングの「アルハムブラ」をも一冊求めた。もしも私がこゝへ来る前に、この書物を精讀してをつたならば、如何に一層感興の深いものがあつたか。今にして残念に思ふのであるが、しかしもしサイド、ソライダ、ソラハイダの美しい三姉妹の話を覚えてゐたならば「朱色の塔」をも尋ねなくてはならなかつたらうし、「童女の塔」にも登り度くもなつたらう。そして遂にグラナダに流連して、マドリーに歸る機會は何時になつたか

分からなかつたかも知れぬ。

われ／＼は「フヂチアリアの門」を抜けて噴水の傍に出で、遂に「アラメーダ」の見晴しで、腰掛けに倚り、暖かい日光に日向ぼっこをして、南國の春に夢心地になつてゐると、隣の腰掛には可愛らしい六、七歳の男と四、五歳の女の兒二人を連れて、こゝに遊んでゐた若いアンダルシヤの母親があるのを見た。手風琴を鳴らしてゐる一番末の妹と、子供ら三人は、われ／＼の處へ次第々々に近寄つて来て、遂には私の手を握つた瞬間、母親は遠く向ふへ行つて、この光景を見ながら微笑してゐる。私は故國を去つて以來六ヶ月にして、はじめて可愛らしい子供の仲間に入つたことを喜んだ。

午食の後われ／＼は丘を降つてグラナダの町に入り、先づ伽藍を見に行く。この寺もトレドのそれと同じく、周圍に人家が立ち塞がつて、その全景を仰ぐことは出来ない。建築の様式は「ルネサンス」式であるが、その宏壯なる感じは、ローマのサン・ピエトロなどにも劣らないと思ふ。折しも「コロロ」から漏れ出でる少年唱歌隊の聲、太い僧侶の低音の響きと相和して、堂中に反響するもゆかしく、正面の薔薇窓から差し入る光線は強く屈折して「プリズム」を通過する光のやうである。案内者は、これは水晶であるからだといふ。「カベルラ・レアーレ」堂に進み入り、フェルナンドとイサベラ兩帝の墓像と、地下室にあるその銅棺を覗き、祭壇の障屏の木彫などを見て、横側の出口か

ら伽藍の外に出ると『カビルド・アンチクワ』の面白い家があつた。

乞食の群にとりまかれてある『カルツィーハ』(Carrizosa)の尼院に立寄つて、その「ロココ」式の御堂を一見したわれは、新しいグラナダの町へは行かず、山の手の昔のグラナダに急ぐ。これはちやうどアルハムブラ宮の後の丘陵の上にあつて、聖ニコラス寺の前からは、谷をへだて、『女王の化粧室』の塔を直ぐ目の前に見ることが出来る。ジブシーの村も矢張りこの丘つゞきアルパシン丘の上にあるので、行つて見ると、崖に倚つて洞穴を穿ち、その内に寢室を設け、穴の外部に家屋を作りかけてある。十数人の「ジブシー」の女連は、われは取りまき、踊りを見せようと勧めるのも氣味悪く、五十「ベセタ」を呉れといふのも馬鹿々々しいので、女の頭目カビタに少しの酒錢をやり、巡査の助けにやうやくこゝを抜け出して、ダルロの川筋を経て宿に歸つたのは日暮に近かつた。

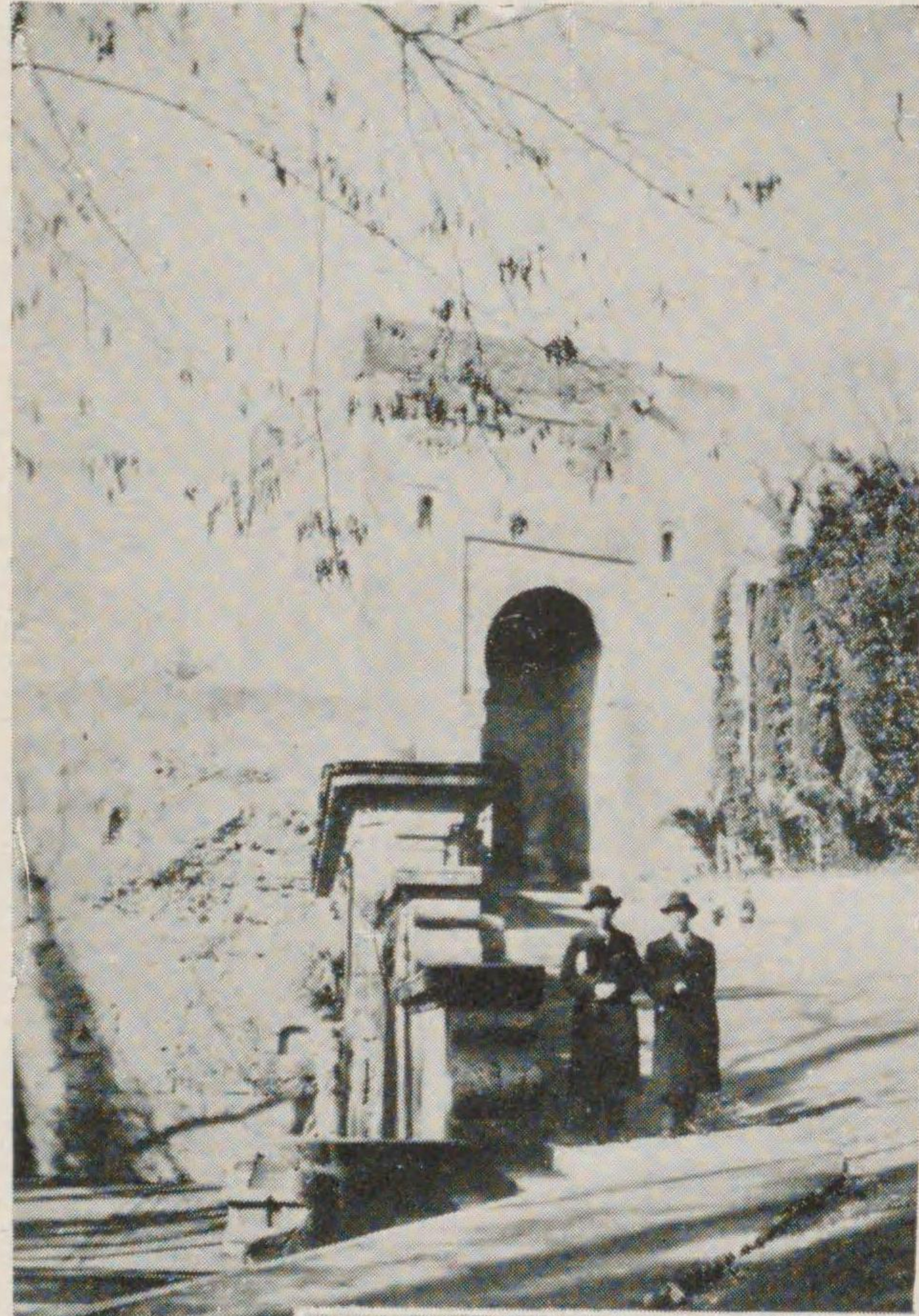
アルハムブラの二日目の夜は「ホテル」の廣間に語り明し、次の朝兩君は『ゼネラリーフェ』の山莊を訪ひ、私は再びアルハムブラの内に逍遙して、靜かに「スケッチ」に時を費し、午後四時過ぎの汽車でグラナダからセヴィーヤへ出發したのは、名残惜しい極みであり、また途中ロンダ(Ronda)の奇勝に立寄らうかと三人で相談したことも、遂に時間を惜んで割愛するに至つたのも、残念であつた。ローハの驛では美しいスペインの娘から「カステーラ」のやうな菓子を買ひ、ポバヂルラの驛で辨當を食べてみると、親切な食堂の男が「コーヒー」を持つて来てくれる。日が暮れ果て



(下)アルハムブラ公園のジブシーの女
(上)アルハムブラ宮アルベルカ泉庭



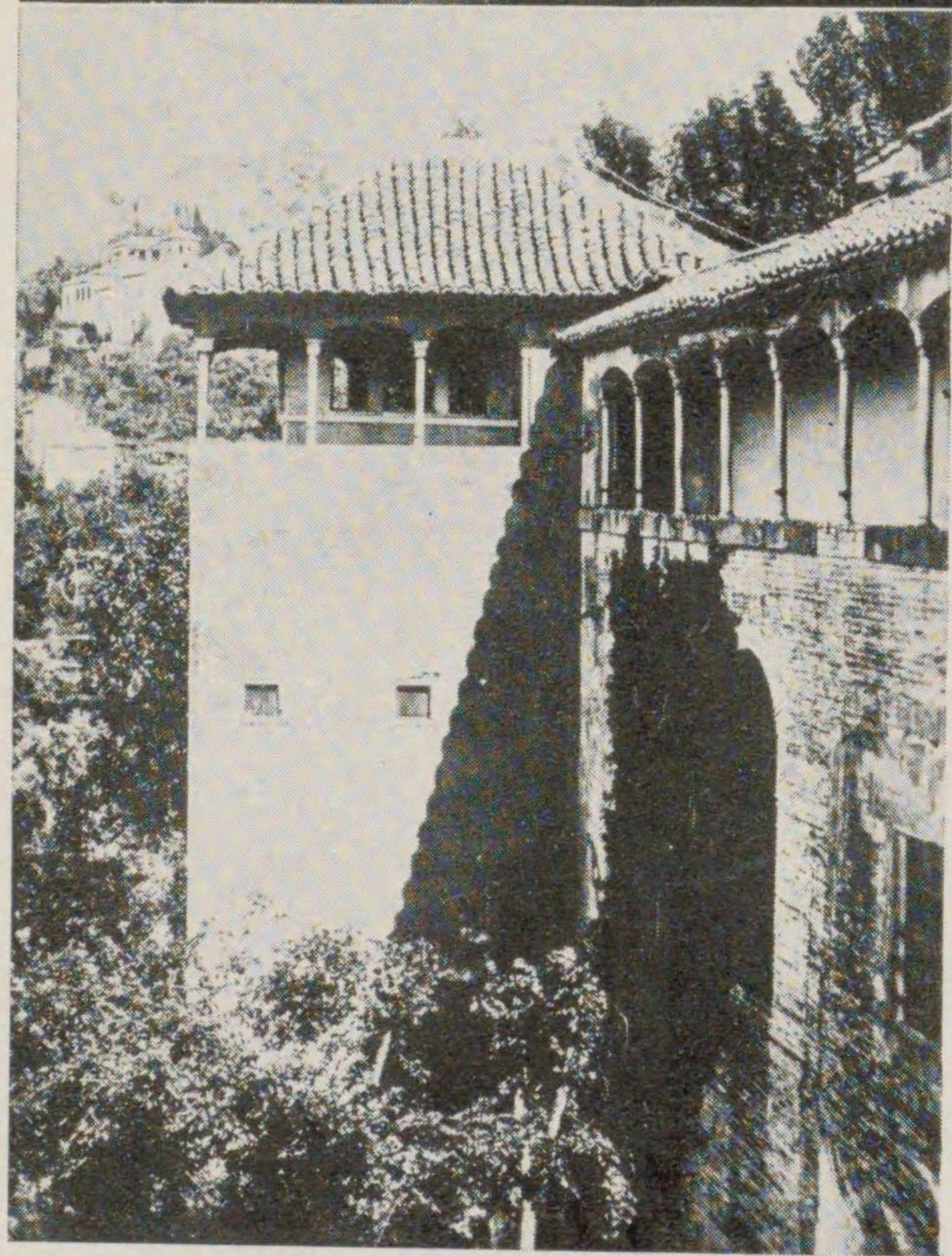
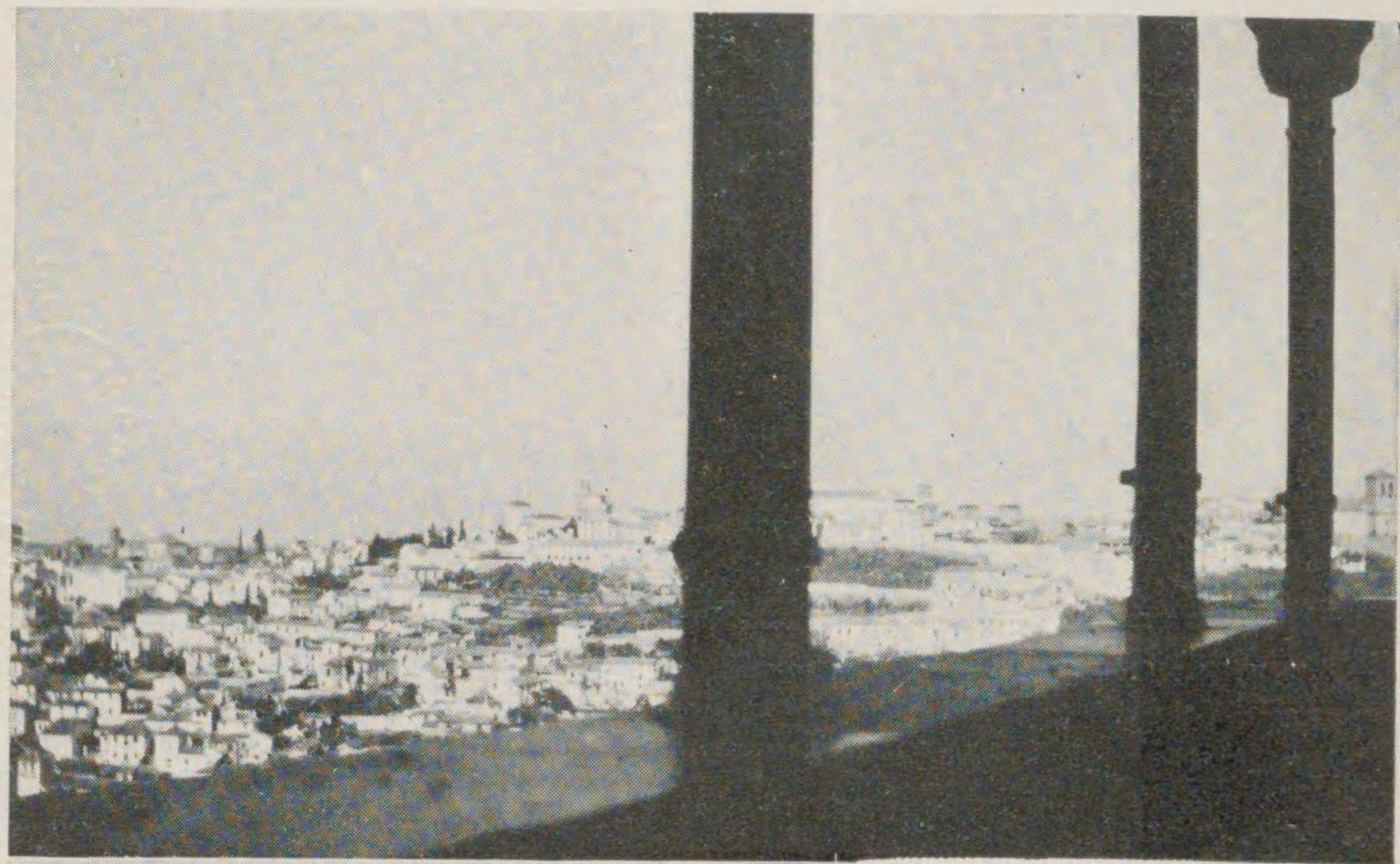
(梅原君寫眞)



アルハムブラ宮フスチ、ヤ門



同公園の小兒と著者



(上)アルハムブラ宮ペイナドール塔よりグラナダ市遠望
(下)同上ペイナドール塔全景

ては、スペインの騎士マニエールとムアールの娘ライラが、叶はぬ戀に身を投げたといふ『戀人の岩』も見えず、アングルシヤの野邊を語りあかして、やう／＼夜の十二時過ぎセヴィーヤに着き、フェルナンドの廣場にある『ホテル・デ・オリエンテ』の客となつた。

九 セヴィーヤの伽藍と古城

セヴィーヤ (Sevilla) は、グアダルキヴィル河の沃野に沿ふたアングルシヤの大都會であつて、丘陵も何もない平凡極まる地形に位するけれども、その嚴冬の寒さを知らぬ南國の氣候と、その中世の由緒ある藝術とは、古い御寺の祭禮、昔ながらの風俗とともに、歐洲中で最も面白い市として知られてゐる。マドリーの形式的にして開放的ならざる氣分、バルセロナ、ヴァレンシヤの政治的情熱と産業主義なるに反して、このセヴィーヤは忠誠にして、しかも上品な滑稽と、軽い氣分の快樂主義とを、その特徴としてゐると云はれてゐる。

聖フェルナンドの廣場の一角には「ルネサンス」式の大きな市廳「アユンタミエント」(Ayuntamiento) が立つてゐて、その横町を曲ると直ぐ伽藍の前に出る。『トレドは豊麗、サラマンカは剛健、レオンは美麗、オヴィエードは神聖、そしてセヴィーヤは壯大』(Toledo la rica, Salamanca la fuerte, León la bella, Oviedo la sacra, e Sevilla la grande) と言はれるだけであつて、外部は「ル

ネサンス」的のところはあるが、内部の「ゴシック」の大堂の感じは、壯大を極めたものである。周圍の諸禮拜堂や法王室は、取り立てていふほどではないが、クリストバル・コロソ（コロムブス）の記念物は、スペインの四王國を人化した女性に擔がれてゐる棺を現はした巨大な彫刻である。伽藍の背後の門を出ると、高い『ヂラルダ』（Giralda）の塔が立つてゐる。これは元トレメーンの光塔のやうな回教寺院の「ミナレット」であつたのに、後に「ルネサンス」式の頂部を附加したのであるが、十二世紀の建物で高さおよそ三百尺。番人の家族が住んでゐる最下層から、八十六區に分たれた緩やかな斜面を登つて行くと、頂上に近いところにも番人の溜り場があつて、細君は今しも午餉の用意に忙しく、犬さへ飼つてあるところが氣に入つた。巨鐘大小二十四を吊るしてある頂上に達すると、雙眼鏡を持つた鐘樓守がある。年が年中この高塔の上に、塵界を離れた生活をする人はさぞ仙人めいてゐやうが、また一方には定めし淋しいことであらうと思ふ。頂上から「パノラマ」のやうに目の前に擴がる白いセヴィーヤの市街、蛇の如く紆曲してゐるグアダルキヴィルの流れ、この大觀に眺め入つてゐる間に、ちやうど正午十二時となつて、二人の鐘樓守は掛け聲を合せて、一番大きな鐘『聖マリヤ』を鳴らせば、ガーンとわれ／＼の耳をつんざく。

ヂラルダの塔を降りて、ほど近い「アルカザル」の故宮に行く。「ナランホス」（橙）黄金色に實れる庭には、草葉薔薇の早くもこの冬の眞盛り、椰子の木蔭に咲き匂ひ、いかにも、南國の景趣

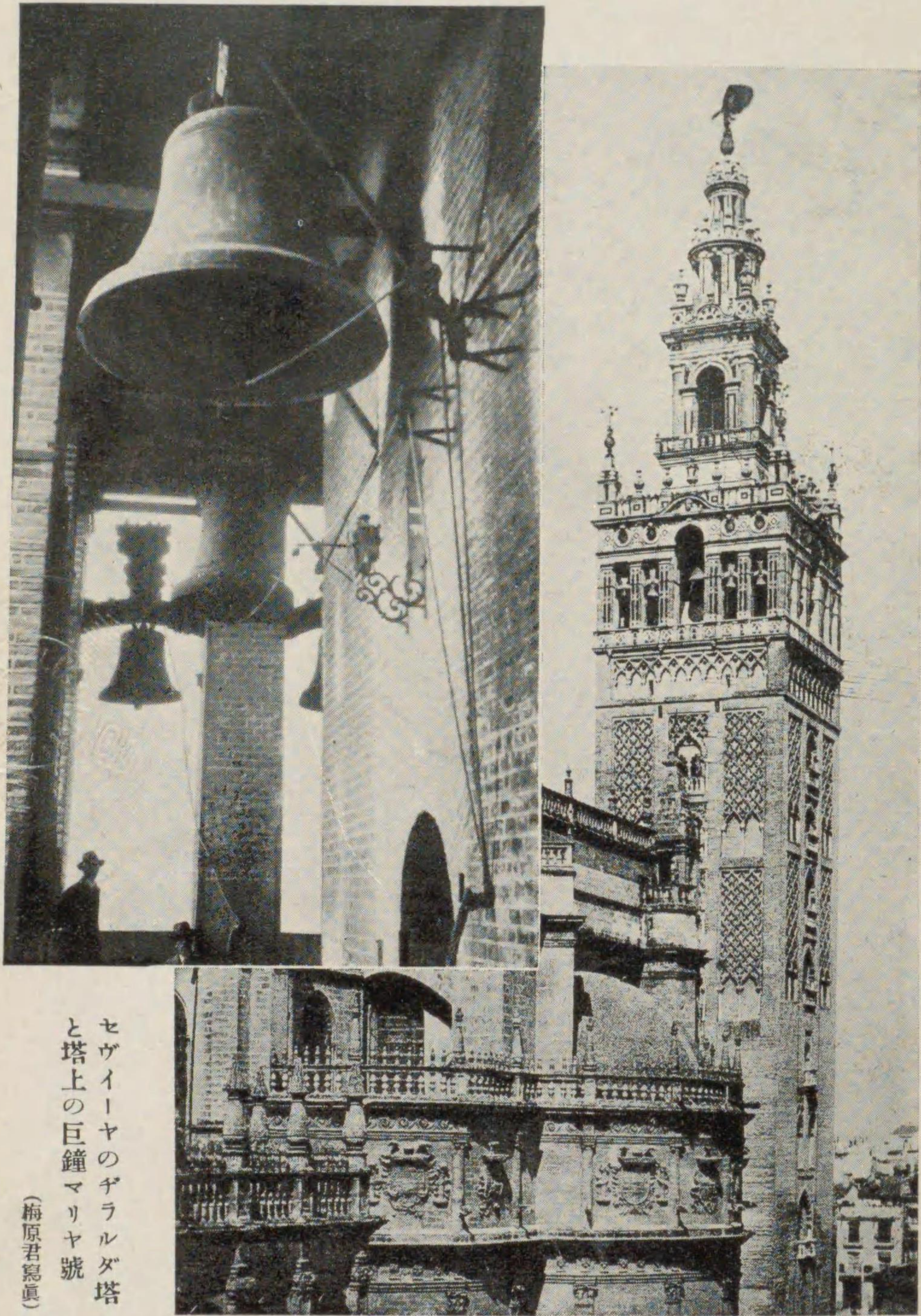
が溢れてゐる。庭の眞中には泉屋がある。また美しいカルロス五世王の榭亭もある。「アルカザル」の正門を仰げば、その壯麗なることアルムブラ宮にも過ぎ、『乙女の庭』（Patio de las Doncellas）に入り、『使節の間』に進めば、その近世の修理にたとへ誤謬はあるにもせよ、これによつて、金碧の色燦爛たる當初の面影を偲ばしめるものがある。慶長十九年（一六一四）十月二十一日、伊達政宗の使節支倉六右衛門は、一行四十人許りの大勢で、このセヴィーヤ生れの聖フランシスコ派の僧ソテロとともにこの市に安着し、行列を整へトリヤナの門からこの「アルカザル」に入り、國王御用の室を大使等の用に供したとあるから、この正廳及び附屬の諸室を使用したのに違ひない。但し桃山式の莊嚴絢爛な裝飾に馴れてをった彼等は、或は却つて私達よりも大した驚嘆の眼をもつてこの建築を見なかつたかも知れない。支倉はローマから歸途にもこの地に長滞在して、大分嫌がられた様子が當時の文書に見えてゐるのは、今日なほわれ／＼をして面はゆく思はしめる。『人形の庭』（Patio de las Marceas）は小さいけれども却つて趣がある。この庭に人形の名のついてゐる所以は、柱の裝飾中に二つの小さい人があるからだ、案内記に出てゐるので、われ／＼は物ずきに複雑繊細な彫刻を片端から探し廻つたけれども、どうしても見つからない。この時ちやうど隣の室で畫をかいである人がやつて来て、私どもに『マニエカスを探してゐられるのですか』と教へてくれるのを見れば、柱の上の方に小さい面子かほの様な顔があつたので、大笑ひして彼の人に禮をいふ。彼はなほ歸

途『ヤソの庭』とて荒れ果てゝはゐるが、庭上に樹あり、壁間に蔦あつて面白く、古い「サラセン」の大瓶さへあるところを教へてくれたのは嬉しかった。

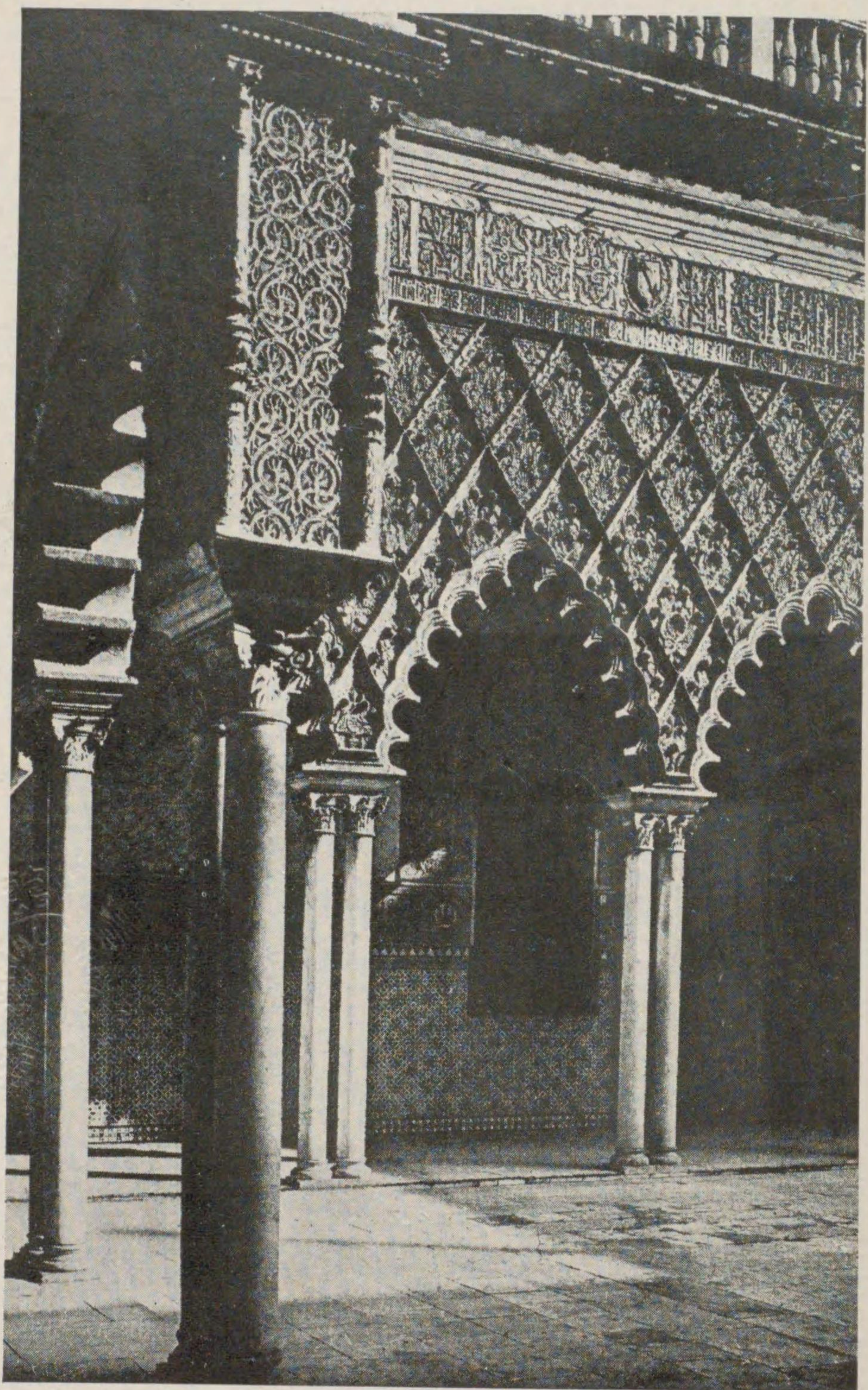
一〇 『セヴィーヤの理髪師』

「アルカザル」を出たのは午後二時過ぎ、空腹に疲れた身體をトリオンフオの廣場の腰掛に休憩すると、目の前のロンハの後に立つてゐる一七五五年の地震の記念碑の、燈籠のやうな形をしてゐるのが目につく。宿に歸つて中食を認めて三時過ぎ、市中にある第十六世紀の建築として「サラセン」式の家『カサ・デ・ピラトス』(Casa de Pilatos)を見に行く。若く凜としたスペイン美人が案内して、この『アラビヤのロココ式』とも稱せられる家の中庭の美しい噴水、その四隅に立つてゐる彫像から『ピラトのプレトリウム』さては「ゴシック」式を加味した禮拜堂、壯麗なる階段を見せてくれた。「アルカザル」の宮殿では宮殿を見、この家ではちやうど貴族の邸宅概念を得たわけであるが、往來の人家を覗いて見ても、矢張り大なり小なり中庭を設け、鉢植を置いてある具合は、全くこの式を小さくしたものである。

『マルカード』の市場を経て大學の建物の前を通つたので、一寸中を覗いて見る。中央には大きな中庭があつて、銅像が立つてゐるが、この建物のもと耶蘇會の「コレヂョ」であつたので、規模は頗



セヴィーヤのガラダ塔
と塔上の巨鐘マリア號
(梅原君寫眞)



セウイーヤ市アルカザル宮使節の間中庭



DON FELIPE FRANCESCO FAXICVRA
 Indiferente del Re de VOXV nel Giappone alla S^{ta}
 DON arrivato in Roma adi 26 di Set
 1615

(上) セウイイヤのアルカザル宮庭園より伽藍遠望
 (下) 支倉六右衛門像銅版畫(一六一五年版)

(ローマ市アンヂエロ圖書館藏)

る狭いが、スペインでは古い大學の一である。學生はこゝかしこに屯して、我々をはやし立てるところなどは、さすがはスペインである。大學を出て、われ／＼は「タキシ」を拾つてこれに乗り、セヴィーヤの西北五「マイル」ばかり、豊沃なグアダルクビルの平野にあるローマの古市イタリカ(Tarica)を見物に行くことにした。これはかのシビオ・アフ리카ヌスが紀元前二〇五年に建設したところであつて、はじめはセヴィーヤの前身たるヒスパリス(Hispalis)なるイベリアの都會に附庸してゐたが、アウグスツス帝の時獨立の市となり、可成りの體裁を具へたローマ式都會であつたことは、その發掘された圓劇場などによつて知ることが出来る。私は今まで知らなかつたが、トラヤヌス、ハドリアヌス、テオドシウス諸帝もこの地で誕生したとのことである。番人の家屋の傍に小さい陳列所があつて、彫刻や記録の斷片、殊には一九二五年に發掘された大形の幾何學的模様を現はして立派な「モザイク」があるのに感心した。

セヴィーヤに歸ると五時ごろ、日が暮れかゝつて、最早名所見物に出かけるには餘りに晚いが、食事には少々早過ぎる。龜井君も私もパリ出發以來三週間も散髪をしないので、頭髪は蓬のやう。それでフト思ひ出したのは「オペラ」か何かに『セヴィーヤの理髮師』といふのがある。ロッシニの作であることは、その時どうしても思ひ出さなかつたが、要するにこの地で散髪するのもまた好記念と、二人で連れ立つてカノーヴァス・デル・カスチーロの通りにある、小綺麗な散髪屋に行くと、

一切スペイン語で啞ではあるが、宜しく手真似で事を辨すると、なか／＼親切でもあり、また上手らしい。さすがは『セゼイーヤの理髪師』と感心する。折しも可愛い二人の子供を連れて、子供の散髪をさしてゐる黒衣を着た五十ばかりの上流の婦人がゐた。アンダルシヤの風俗をして高い「ベッコウ」の櫛に黒い面紗をつけた姿は、如何にも氣高く、この邊には大體斷髪の女が甚だ少いのを嬉しく思ふ。夕食後市中を散歩して、シエベスの町の雑沓を見、ノヴェダーデスの「カフェー」あたりで、スペイン踊りを見物しようと思つたが、草疲れたのと言語不通に氣遅れして、残念ながらそのまゝ宿に歸つてしまつた。

次の日は午後コルドバへ出發までに、なほ見残りの各處を大急ぎで見に行くことにしたが、先づ伽藍の北側ベルドンの門を入り、『ナランホスの庭』に面してゐる莊嚴なナランホスの門を見て、さこの近處にあるコロムブスの圖書館(Biblioteca Colombina)の入口を探してゐると、四十前後の薄汚ない男が案内しようと附いて来る。廻廊の東手階上の文庫に入り、極彩色の文書などを列べてある室から閱覽室に進み、なほクリストバル・コロンの藏書、彼の息子フェルナンドの藏書をはじめ、稀覽の圖書を見せて貰ふ。コロムブスの藏書にはブルタルクス、プリニウス、マルコポロなどがあり一々書き入れまでしてあるものゝ多いのは、彼が決して無學な一介の航海者探検家でなかつたことを證するものである。それからなほ『カビネーテ・コロムビーナ』といふフェルナンドの古い文庫へ

も特別に入れてくれ、僧服の館員は『ヴェヌム・カロー』(Venum Caro)の如き珍書をも出して見せ、古い目錄と一々對照して、説明してくれたのは有り難かつた。

案内の男はわれ／＼が更にカサ・ロンハ(Casa Lonja)の中にある印度文書館(Archivo General de Indias)に行くのを知つて、これにも附いて來た。こゝは前の文庫よりも大きく、文書は大きな紙包にして、架上にやゝ亂雜に並べてあるが、珍しい文書や回畫は善く陳列してある。固より西印度地方のものを主としてあるけれども、日本關係のものもあり、慶長十五年五月四日附の秀忠の朱印狀を見たのは愉快であつた。往年村上直次郎先生が支倉關係の文書を、澤山こゝで發見せられたと聞いたが、時間もないので、それらを覗くことも出来なかつた。館長室には明代の支那地圖が倒さに掛けてあるのも面白いが、館員は親切に案内して、最後に館の屋上に出て、伽藍の壯觀を見ることを許してくれた。

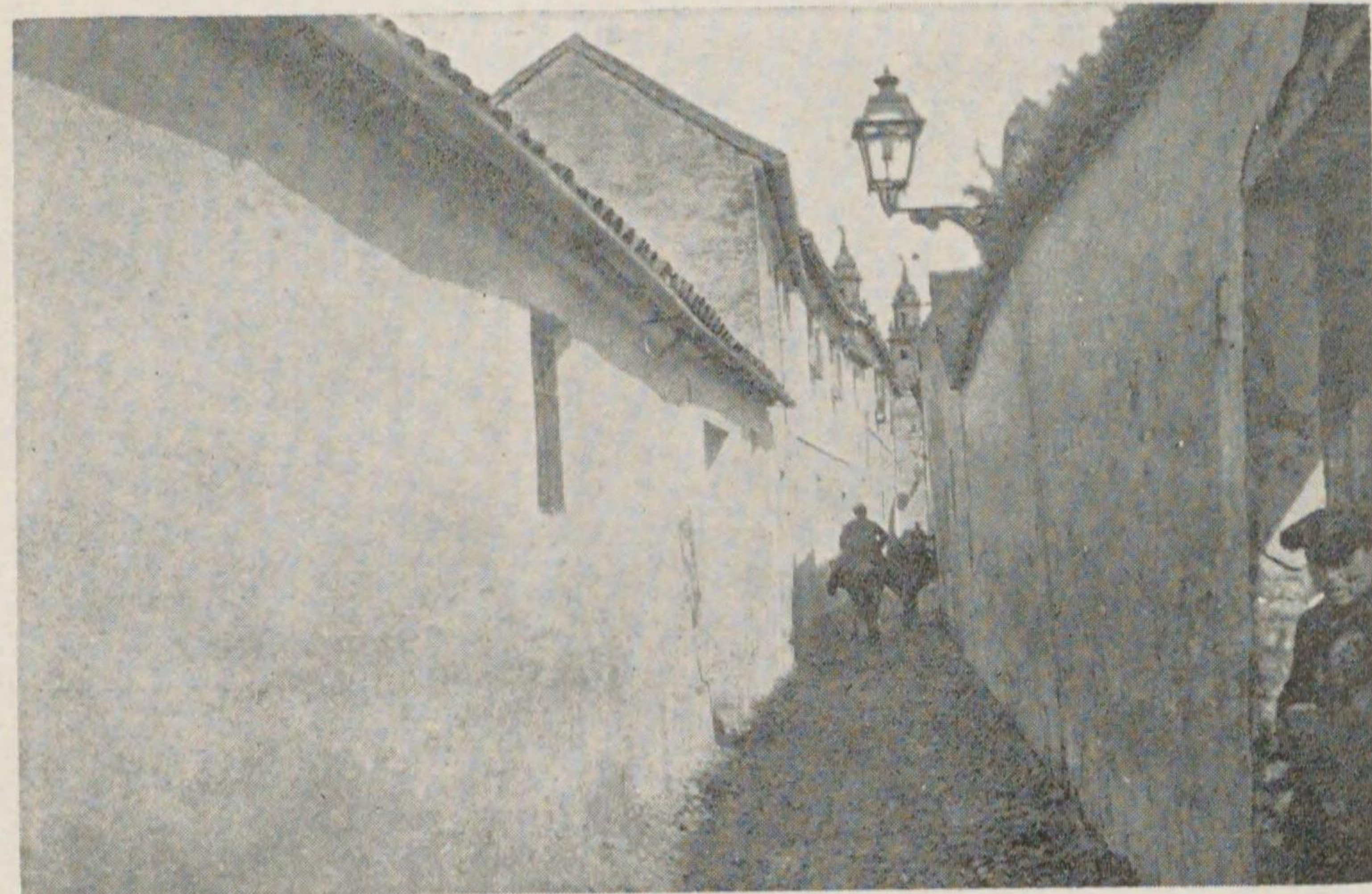
われ／＼はセゼイーヤにおける最後の見物として博物館(Museo Provincial)へ行く。昨日訪問したイタリカ發見の遺物が澤山陳列してあり、また大きな繪畫室もある。これにはムリリヨの大作數十の外に、ズルバランなどの作もあつたが、ムリリヨは大部分カブチニの寺から持つて來たもので、彼の作としては他に多く比べるものがないくらゐの優品であらう。たゞ幸か不幸か、私達は此の畫家の嘆賞者でないから、さつさと十五分もかゝらず出てしまふことが出來た。

一一 コルドバの伽藍

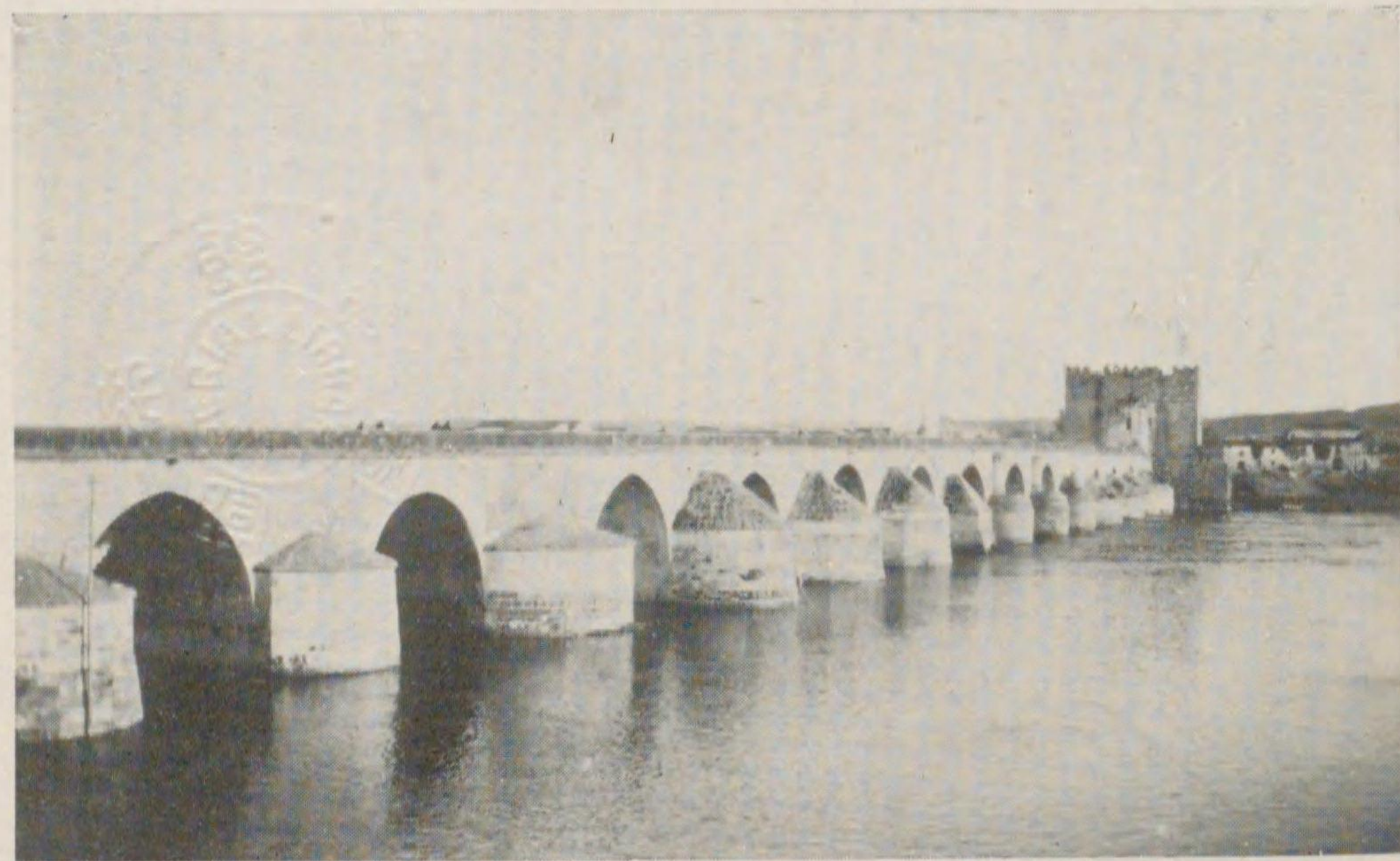
セヴィーヤを出發した汽車は、グワルダキヴィル河の廣々とした沃野に沿うて、低い丘陵の緩るく起伏する間を走る。空の色はトルコ石の如く碧く、野の緑は「エメラルド」の如く緑に、「ナランホス」の樹々に、黄金色の橙が枝もたわゝに實つてゐる。また沿線に龍舌蘭が不思議な恰好をして、生えてゐる工合は、いよゝ南國の趣がある。故國の春の野邊をフト思ひ浮かべて、「兒等とあらば、草摘まほしきセヴィーヤの、緑の野邊をわれ獨り行く」と歌めいたものを口誦み、山上憶良をしてこゝにあらしめば、如何に兒を思ふ名歌を多く作り出したであらうかなどいふうちに、四時ごろ遂にコルドバの驛に着いた。赤帽に「ベテカー」の案内記にある「オテル・オリエンテ」へと命じたところ、「その宿屋は今はなくなりました。「オテル・シモン」がよいでせう」といふ。宿に着いて直ぐ市中の概觀をしようと出て行き、細い小路の迷宮の如き間を過ぎて、伽藍の北側「ベルドン」の門を潜つて内庭に入れば、これは例の「ナランホスの庭」である。斜陽に輝く橙實は赤くして花よりも鮮に、緑の枝蔭に點綴してゐる美しさよ。簡單嚴肅の外觀を具へた伽藍には、薄暗い堂の此處彼處に光線が差し入り、八百六十本の赤黒の柱は、紅白の馬蹄形「アーチ」を頂いて、參差林立して低く影を重ね、他にまた較べるものもない神祕の感を興へる。何れ精しい見物は明朝にと西門を出て、



コルドバの伽藍内景



コルドバ市内小路



コルドバの橋



聖ラフワエルの高い柱の記念碑から、半ば捨てられたる『橋の門』を見ながら、グワルダキヴィルの河岸に出ると、壮大な橋が架つてゐる。これは古へのローマ時代の橋の基礎の上に作られ、橋の向ふ側に「ムアー」時代の堡塞「カラホラ」が附いてゐるところは、古代中世の橋として、最も善い標本の一つに違ひない。また橋の下手河中に「ムアー」時代の水車が二三残つてゐるのも面白い。橋を渡つて彼岸に出で、驢馬引きや乞食が、日向ボッコをやつてゐるキタないところから、コルドバの市を顧みれば、古橋を前景として伽藍、寺々の圓蓋、白い家々が今しも落日に映じて、一幅の畫をなしてゐる。「アルカザル」の側から、グイクトリヤの殺風景な公園を歩いて、市中に入り、ゴンドマールの賑やかな通りを逍遙する。

コルドバの一夜は蚊に襲はれて眠安からず、殊にわが室に近く道を隔て、聳ゆる、聖ヒポリトの古寺の鐘樓は、十五分ごとに鳴り響いて、早くから目を覺ました。九時過ぎ再び伽藍に行くと、ちやうど勤行の最中であり、名高い『第三ミルハブ』(Mirhab)は閉ざれてわからず、大いに迷つた末、若僧や子供などの力を借り、漸く番人の男を見付け、燭を點じて『第三ミルハブ』の美しい「モザイク」貝形の天井などを見てから、「カビチュラール」の寶器を覗き、「根本のミルハブ」『第二のミルハブ』なども見、丁度勤行の終つたころ、木彫の「レレード」の美しい「コーロ」、「カピラ・マホール」などを大急ぎに見物したが、林立せる堂内柱の景趣は、到底昨日の夕暮に及ばなかつた。元來この伽

藍は「ムアー」の建立した回教寺院『メジド・アル・ヂャーミ』であつて、今も『ラ・メスキータ』(Mezquita)と通稱せられてゐる。スペインにおけるアラビヤ人の最古の宗教建築であるが、その大さにおいて「イスラム」寺院中これに及ぶものは、メッカのカールバ寺を除いて殆どないといはれてゐる。またこの寺地はもと々ローマの神祠、次いでゴス人の會堂があつたところで、八世紀の終りオマイヤード家の始祖アブデルラーマン一世が創立し、その後しばしば増修を経て、十九世紀に至り、當初の二倍大の堂となつたのであるが、遂に十三世紀に至つて、再び耶蘇會堂になつたものである。その多數の柱は或は佛國ニーム、ナルボンヌ、或はセヴィイヤ、サラゴサ、或は昔のカルタゴなどの地から集め、コンスタンチノブルから獻ぜられたものもあると傳へられてゐる。とにかく回教建築、特にその寺院としては、世界中尤も重要な遺物であることはいふまでもない。

午前十一時過ぎコルドバを立つて、夜八時マドリーに歸りつけば、南方の麗かな天氣に引きかへ、霧は深くしてロンドンの如く、自動車は警笛を連鳴して、夢の中に磨り硝子の下から輝くやうな燈火の中を走り、もとの宿屋にをさまる。

一二 アルタミラ行

佛國フオン・ド・ゴームの洞穴に舊石器時代の繪畫を見た私は、スペインのアルタミラ (Altamira)

洞穴の繪畫が、それよりも佳く保存せられ、また手法も勝れてゐるとは聞いてゐたものゝ、餘り道寄りでもあり、とにかく佛國のものと、大同小異であらうから、見に行くことを止めようと思つてゐた。それでフランスからスペインに這入る時も、北海岸をサンタンデル廻りの線路を取らず、マドリーに直行したのであつた。しかし、折角スペインまでやつて來ながら一生のうちにも再び來ることもむづかしいこの國に、たゞ二晝夜の旅行を厭うて、これを見なかつたとすれば、これまた生涯の遺憾であるし、さてどうしようかと考へ悩んでゐたが、同行の梅原君の切なる遊意と元氣とに勵まされ、たうとう南方から歸つて來て、一日をマ府に休養した次日(二月二十一日)、龜井君がアビラへ行つてゐる間に、アルタミラ行を決行することにした。今にして思へばフオン・ド・ゴームよりも遙に優れたあの洞穴繪畫を、能くも見て來たものと喜ぶ次第であるが、當時はかなり面倒に感じたのであつた。第一汽車には寢臺が取れず、或は取らず、一晚向ふで泊つて、直に引き還さねばならないのみならず、言語不通の片田舎の旅であるから。

マドリーを夜七時半の汽車で出發し、車中にはゴロ寝をしてゐると、眼がよくさめ切らない薄暗い翌朝の七時過ぎ、スペインの北岸サンタンデル市から一つ手前の、トレラベীগ (Torrelavega) といふ驛に着く。乗合自動車で運ばれ、半道ばかり先きのトレラベীগの町の『ホテル・ビルバオ』といふ思つたよりも大きな宿屋へ入れられる。パリでアベ・ブレイ先生から、この宿屋ではスペイン語

しか通じない故、この書付けを持つて行けと、スペイン語で書いたアルタミラ行自動車の用意の依頼状は、これを見せるまでもないうちに、我々日本の書生の旅行の目的を、向ふで知り抜いてゐるので、早速アルタミラ行の自動車を勧められ、萬事手取早く片づき、九時過ぎ宿を出で、この町の西方數マイル、洞穴に近いサンチラーナ (Santillana) の村へ急ぐ。夜明け時分には日本晴れと思はれた今日の天氣に、全く裏切られ、時々大きな驟雨がやつて来て、風まで強く吹く。なるほどこゝもフランスのブリタニーユ邊と同じく潮流の支配を受け、冬季は何時もかういふ天候であるが、その代り割合に寒くないだけ取り柄である。

サンチラーナの村を出で、石塊はゴロゴロと、雨水は瀧の如く流れる丘陵の麓の道で、自動車から降りた時は、雨風が最も強い瞬間であつた。この丘陵を攀ぢ登ると、向ふの方に洞穴があると聞いて、洞穴の方向を示した道しるべを、唯一の頼みに山を登り出した時は、全く心細くならざるを得なかつた。しかも雨風は西北から逆に吹いて来る。ジクジクの芝山を時々後ろ向きになつて登り、スツカリ草疲れ果て、しばらく山の中途の茶屋に休んでから、雨の小やみに乗じ、牧場の傍を牛のお尻について歩くと、嬉しや洞穴の番人の住む一軒家が目の前に見え出した。もしも洞穴に達しても番人がゐなかつたらと、心配してゐたのも杞憂で、主人は留守であるが、三十餘りの女房が、先づ別室の小陳列室、そこには三四年前オーバーマイヤー教授が發掘した獸骨、顔料などの遺物があるのを

見てをつてくれと言ひ、そのうちに「ラムプ」の用意が出来たと、七歳の男の兒を大人しく留守を置いてゐるやうに云ひ残して、私達を直ぐ目の先の洞穴へと導く。

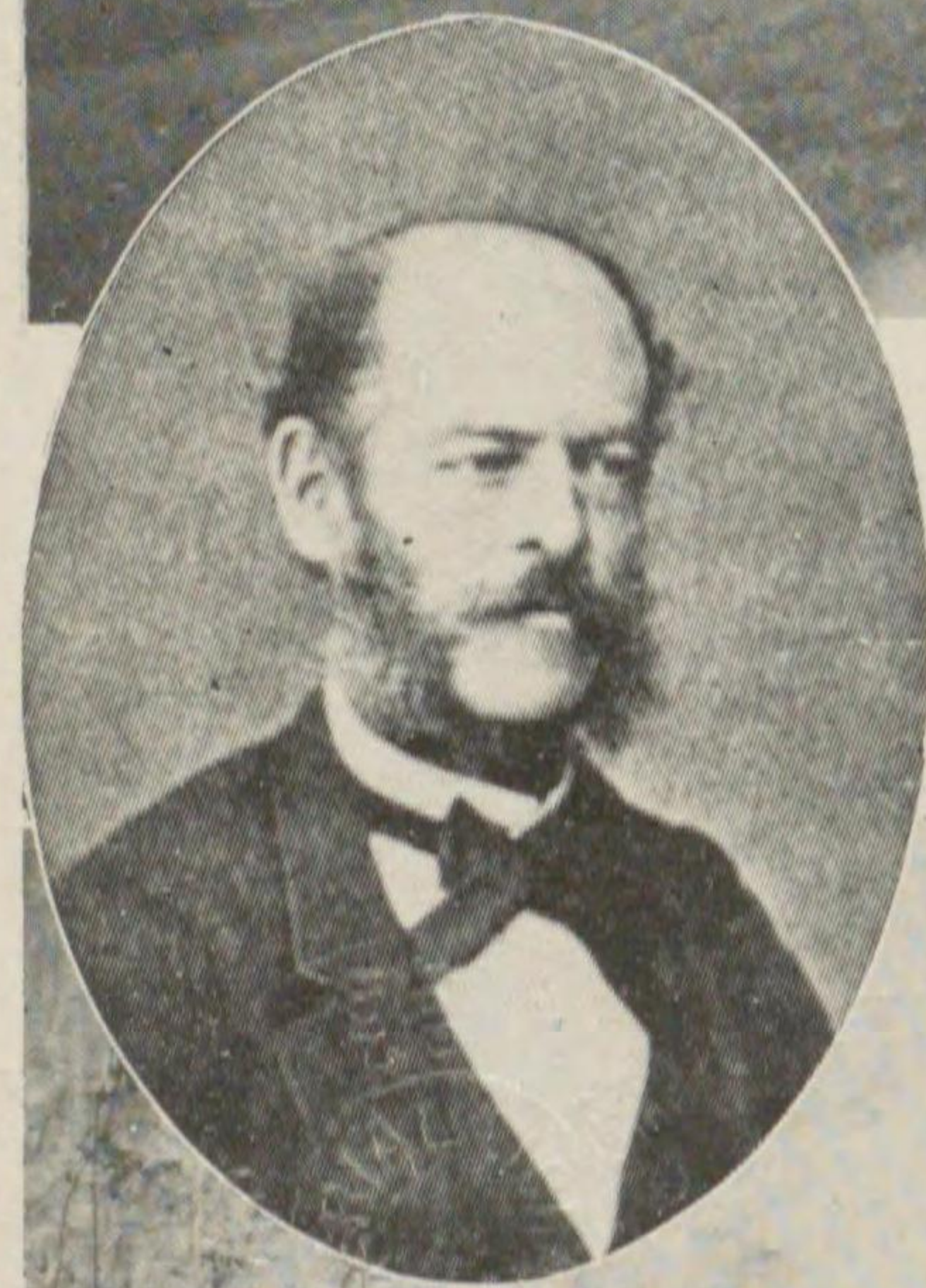
一三 洞穴繪畫、サンチラーナの村

われわれはこのアルタミラに来るまでは、矢張りフオン・ド・ゴームのその様に、斷崖に倚つて口を開いた洞穴であらうと想像してをつた。然るに何ぞ知らん、たゞノロノロとした丘陵の絶頂に近いところに、穴の入口は狐穴位しかなく、穴の上はすぐ平な芝山であらうとは。入口の上にはこの洞穴繪畫の發見者サンツォラ翁の碑が立つてゐる。私は今から十數年以前、はじめてこの人の名を書物で讀んだことがある。彼は一八六八年獵師が偶然發見したこの洞穴を研究するため、しばしばこゝへ來たが、一八七五年の某月彼は小娘を連れて穴の中に入つたところ、今まで父親はじめ誰人も氣が付かなかつたのに、娘は天井の上に「牛」の畫があると叫んだのが、そもそこの世界的の珍繪畫發見の奇しき端緒であつた。サンツォラは之を調査して直ぐ學界に發表したけれども、その餘り巧妙に畫かれ、且つ鮮かに保存されてゐるこの繪畫を、當時多くの學者は近代のものとして認め、到底舊石器時代のものとは信じ得なかつた。しかしその後佛國ドルドーン地方の洞穴繪畫が發見せられ、その性質全くアルタミラのものと同じことがわかり、遂にその悠漠たる舊石器時代のものた

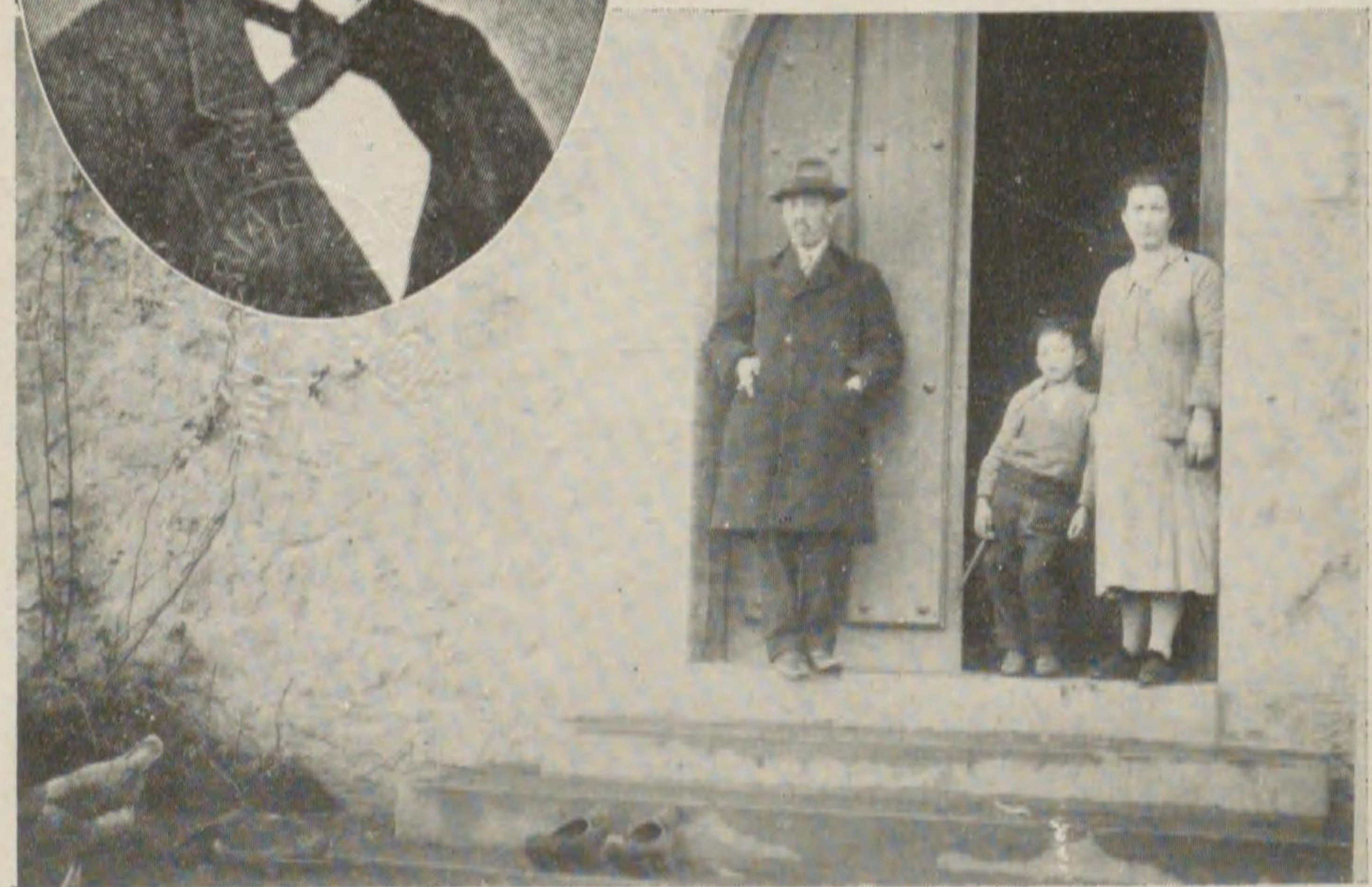
ることが、普く學界に確信せらるゝことゝなつたが、憐れむべしサンツオラ翁は、その以前衆愚の議論未だ決しない一八八八年に歿してしまつたのである。彼の少女もこの番人の女房の話によれば聖ミグエル村になほ生存してゐるとのことであるが、定めし六十前後のお婆さんになつてしまつたに違ひない。たゞこの翁發見の功を勅した碑が、空しく穴の入口の上に立つてゐる。

私どもは穴の中に這入つて又た意外に思つたのは、佛國のそれとは違つて高さは低く、むしろ横に濶いことであつた。今は底部を掘り下げたので、頭上には天井まで若干の空間が残つてゐるが、以前は恐らく身體を屈しなければ、歩くことが出来なかつたくらゐであつたらうと思はれる。番人の妻は先づ穴の大觀を見ることにしやうとて、數十間奥の鍾乳の垂れたところまで進んだ後、引きかへして繪畫のある窟中に導いた。見よ、頭上三尺ばかりの天井に一面に描かれた動物の群像、われ／＼はサンツオラの少女と同じく「トローロス」と叫ばざるを得なかつた。その鮮かな色彩、整つた形態、豪健な筆致、動物の大きさもフォン・ド・ゴームのよりは大きく、保存の状態、美術的の價值また遙に彼に過ぐるものがある。動物の種類は「ビゾン」鹿、馬等で、大抵は三尺ぐらゐの大きさであるが、奥に近いところにある一匹の鹿のみは、特に大きく自然大ほどある。カルタイヤック、プルーイ兩氏の著書や、他の複製品でお馴染のこの『有史以前美術のシスチン・チャペル』(La Capilla Sixtina del arte prehistorico)が、まぎ／＼とわが前に展開せられた嬉しさに、嚮の風雨も山登りの苦

アルタミラ洞穴附近風景

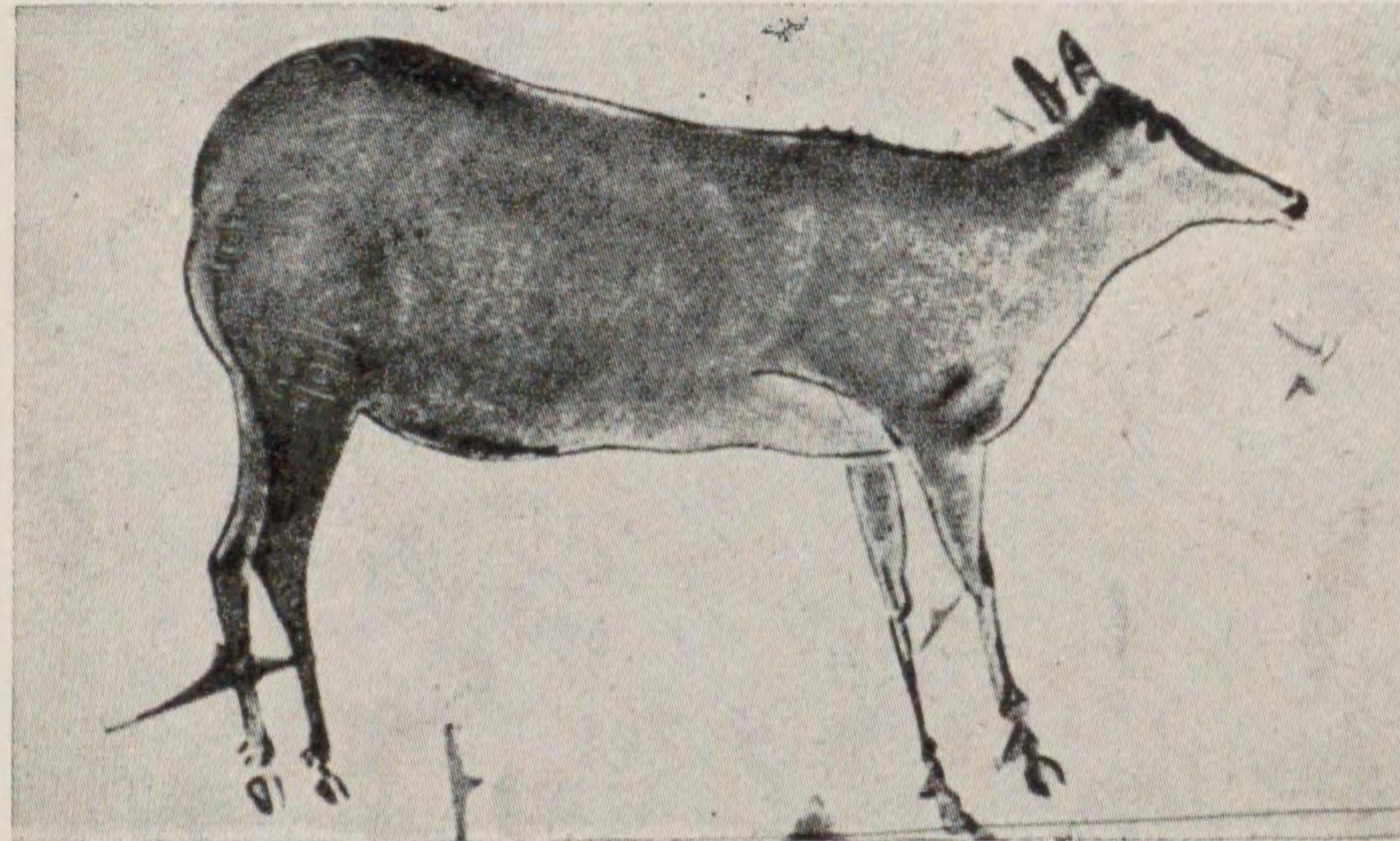
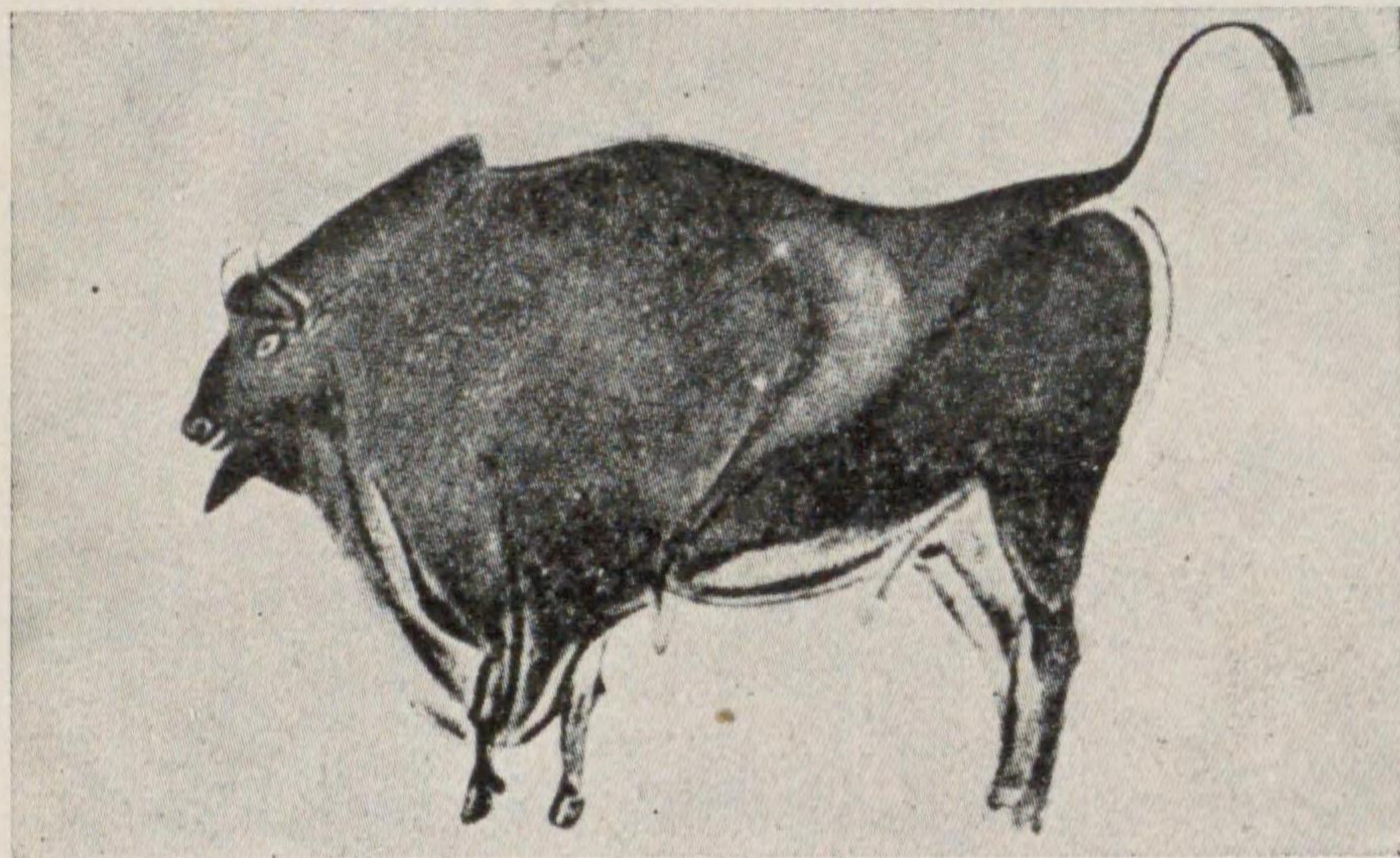


アルタミラ洞穴の發見者サンツオラ

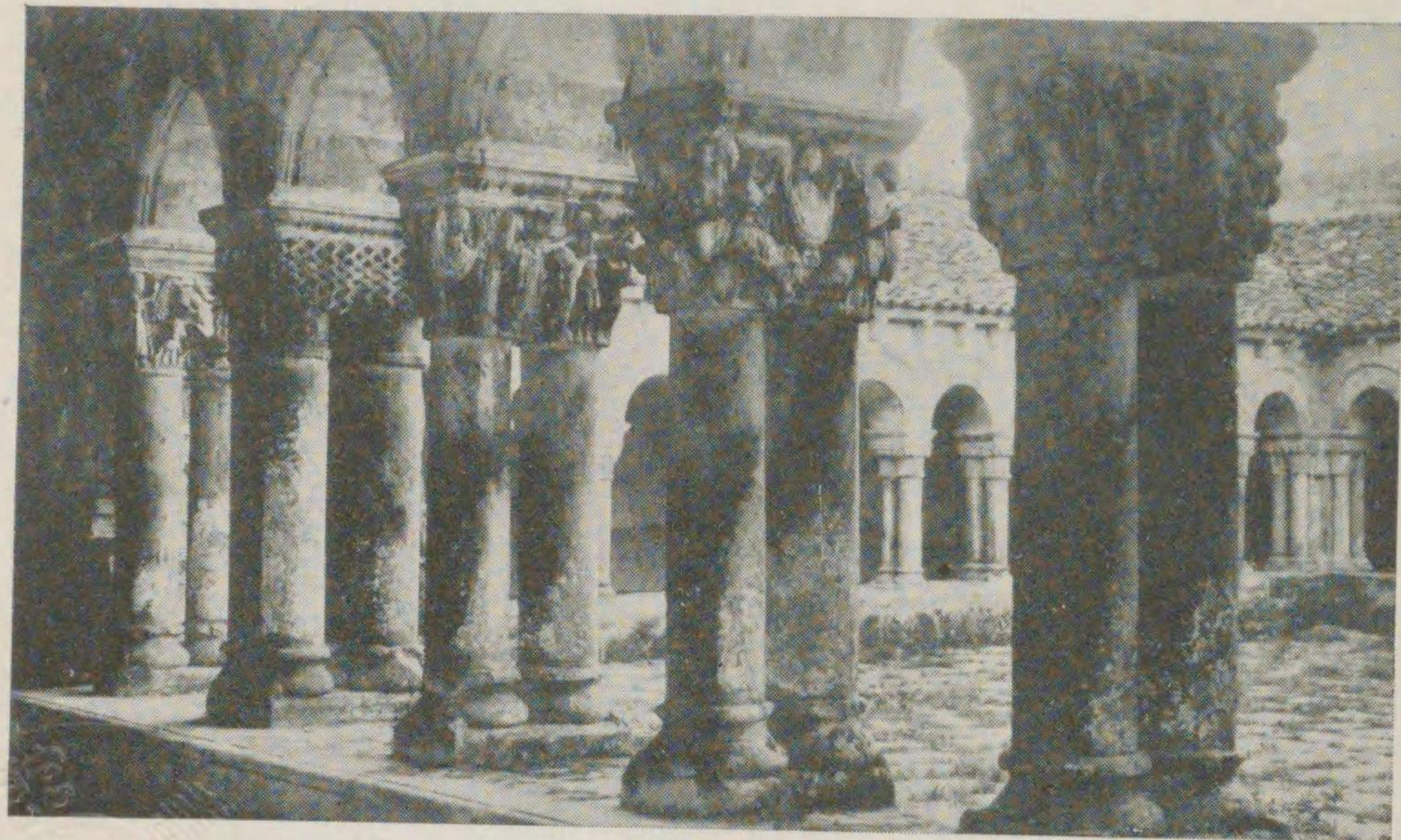


同洞穴番人小屋

(梅原君寫眞)



(上)アルタミラ洞穴天井畫(サンツオラ翁の摸寫) (中)(下)同上天井畫一部



(上) サンチラーナ・デル・マール村コレグラータ寺(十二世紀)
(下) 同村初代領主の家「ムセオ」(十五世紀)

しさも全く忘れてしまった。彼女は「アセチリン」燈に携へた棒をかざし、その影を圖像の上に反射せしめ、一々『これは胴』『あれは頸』と説明すること、ちやうどカムベラールの洞穴の女房と同じである。なほこの穴には已に電燈の設備があつて、天井部や時には地下に摺鉢の如く孔を穿ち、これに電球を挿入してある。しかし今日は如何なるゆゑにか、これを點じなかつた。なほ處々に都合よく腰を掛けられるやうに、岩石を造り出し、その上に細砂を撒いてあるなど、可なり考へた設備をしてあるのには感心した。

われ／＼はこの淋しい一軒家に、夫婦と子供と三人暮しの外には、たゞ鶏を多く飼つてゐるだけのこの家の前で記念の寫眞を撮り、「アヂオス」を告げて、サンチラーナの村へ歸つた。さてこの村は『建築の博物館』と土地の人の誇稱するが如く、十二世紀以後十八世紀頃の古い民家軒を接して立ち、多くは「バルコニー」を突出した二階造りで、なか／＼面白い構造であり、殊に「ロマネスク」式の村の會堂は、珍らしい古朴な様式である。いよく／＼出發と乗込んだ際に、自動車が故障を起し大に閉口したが、却つてその御蔭で再び會堂へ行つて、小さいが素朴古雅な「クロイスター」を見ることが出來た。これは他國でも餘り見ないほど心地のよいものであつた。村の雜貨屋は日曜にかゝはらず店を開いてゐたので、繪葉書と共に「バスク」の帽子を手眞似で買ふと、よく似合ひますと側にかけてあるギラ／＼凹凸のある鏡を示す。

自動車は到底修繕が出来ないと見込んで、運転手は電話をかけて別の車を呼んだが、この新しい車に乗って動き出すと、皮肉にも前の車も動き出して、却つてわれ／＼よりも先に走り出す。途中鐵道線路の踏切を高速力で横ぎつたため、われ／＼は車中でモンドリをうつつて強く頭を打つたが、命に別條なく、トレラベীগの宿に歸りついたのは午後三時ごろ、空腹に疲れて漸く食堂に入る。コアンゲロスと呼ぶ鰻の子を「オリヴ」油で煮て、沸騰したまゝを出す珍料理を味ひ、ビシヨ濡れになつた外套を脱ぐとヒドク寒いので、寢床の内へもぐり込み、浸水した泥靴を女中に頼んで乾してもらひ、大に閉口はしたものの、兎に角アルタミラ見物を無事に済ませたことを兩人で祝しあつた。

一四 マドリーの武器博物館、西班牙を去る

トレラヴェীগの宿に一夜を明し、次の朝出發前階下で靴磨を呼んで靴を磨かせると、頗る丁寧に磨いたので、昨日サンチラーナで買つて、吹ひ惱んだ手卷きの煙草を彼に與へんと差出せば、一本かと思つて袋の中から摘み出さうとするので『トードス』(皆んな)といへば驚喜したのをかしかつた。十時半過ぎの汽車に乗れば、今夜遅くマドリーに着くのであるが、往路は夜行でスツカリ景色が見えなかつたので、今度は窓外の眺めを飽かず送迎する。ラス・カルダスの田舎の温泉場を過ぐれば、バルセナからベスケラまで、僅か直經二マイルばかりの間を、旋回して十二マイルの距離を登

り「トンネル」また「トンネル」、道理でこれはカンタブリア山脈の急に聳ゆる嶺である。サンチウルデの驛で美しい娘の賣る菓子を一「ベセタ」で買へば、砂糖醬油をつけた餅の様なものであつたのも、日本的なところを愛すべく、レイノサの驛に着いて、驛の食堂で一同食事をすると、スペイン流の熱い「リソット」(米飯)料理を、始めて食べることが出来た。これからいよいよスペイン中部の高原を走るのであるが、近く白雪を頂いた山々峰々を眺め、その麓の斷層すさまじい處を過ぐれば山の斜面には小さい胡麻粒のやうに、牧羊の群つてゐるのが見える。ヴァラドリー(Valadolid)に着けば、こゝは大學もある大きな町で、コロンブスの死んだのもこの地であるといふ。やがて松の木形の面白い林がつゞいて、日本の海岸を思ひ出したが、残暉血の如く西天に映じて、風物荒涼を極むるところ、驢に乗つて家路に歸る人も見える景色は、いかにも支那旅行の記憶を呼び起さしめしめる。食ひ残しの餅を宿の老婢にくれてやらうと、包み紙に夕刊新聞紙を買つたが、直に反古にしてしまふも忌々しく、讀めない文字を一寸讀んで見ると、田中内閣が昨日議會を解散したとあつて、それだけが分つたのも愉快であつた。エスコリアルからは澤山の青年士官が乗込んで来て、俄に賑やかになる。

マドリーの最後の日は、王宮の武器博物館「アルメリヤ」(Armeria)を見ることにしたが、ちやうど十一時ごろ王宮の前に行くと、護衛兵の交替で面白い儀式を見ることが出来た。「アルメリヤ」

には中世以来の甲冑武器處せまきまで並べてある。ベラスケスなどの肖像畫にある帝王の甲冑もそのまゝあるらしいが、私は元來この蝦蟹の甲羅のやうな西洋の鎧には一向興味がなく、たゞ入口の部屋の壁間に、穿山甲の皮のやうに無残に張付けてある、四領の日本の甲冑を仰ぎ見るのが第一の目的である。これは天正十二年(一五八四)日本最初の遣歐使節伊東、千々岩らが、フェリペ二世に贈つたものであると目錄に記されてゐるが、不幸にして一八八四年の火災で焼け損じてしまつた。そのうち最右のは大鎧で紫緑の色緘らしく、次の二領は鐵製で肋骨、臍等をも現はした佛胴といはれるものであつた。この使節等自身も王宮の武器陳列所を見たことが、ガルチエリの書物などに記されてある。

先史博物館は已にコルドバから歸つた次の日に一見したから、別に見物すべき處もないので、われわれは笠井君を訪問、公使館へ挨拶などで市中をかけ廻る。遂にゾリラ街にある有名な古木屋ヴィンデル(Vindel)へ行くことにしたが、生憎中食時で店が閉つてゐる。われわれもどこかで晝飯を認めやうかとその邊を見渡せば、同じ町に『アルト・ハイデルベルグ・レストラン』の看板のある家を見付けて、懐しく思つて這入ると、客も給仕もすべてドイツ人で、久々ドイツ語で『ダンケ・シェーン』をも連發することが出来、心地よい晝をすごした。リナーレスといふ土産物を賣る店に入れば、極めて美しい「ムチャチャ」があたのも嬉しく、三時過ぎヴィルデルへ行けば、これはまた

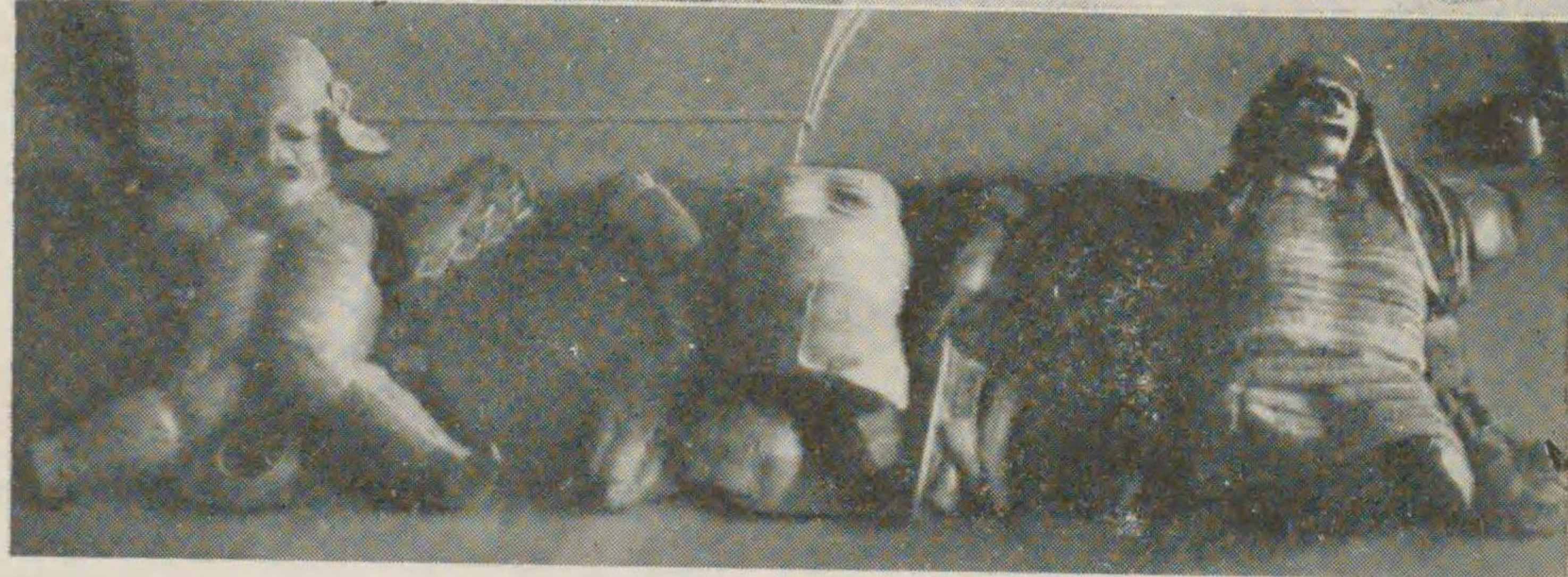
一五八六年版ガルチエリ日本使節記(武器博物館訪問の記事ある頁)

(梅原君寫眞)

62 **Viaggio delli Signori**
sopra l'altro. Restarono molto meravigliati sì di tanta magnificenza nella fabrica, come ancora delle statue, pitture, colonne di marmo finissimo, &



zo senza numero. L'altro à la colatione apparecchiata con molta larghezza, se ne doue nel resto che si ferma i più grandi Signori di quell'ente dall'Ambasciatore del Francia con offerir loro in officio, così in Ispagna come li pregò che si contentassero promettendo che il Rè suo Soluti con sua gran sodisfatione tempo attesero à ueder tutte, come l'Armeria del Re, e mostrandosi loro ogni ordine di sua Maestà, la arezze, uenèdo già il temere per li Proueditori de, & Alicante, acciòche fana commodità d'imbarca-



4 ドリ - 王宮武器博物館藏日本使節献上甲冑



女優マリヤ・ゲレルロ

マドリール武器博物館犬の甲冑



歐洲の他國にも見ないドツシリとした古木屋で、周圍の棚は「ヴェラム」などの本で一坏、日本に關する古本三四種を見たが、或ものは千四百「ベセタ」といふに辟易する。東洋文庫にいま珍藏せられてゐる天草板の『ドチリナ・キリシタン』ももと此の書店にあつたものであるといふ。こゝを出て大通りで、一昨日死んだ老女優マリヤ・ゲレロ (Maria Guerrero) の葬式に出會したが、その長蛇の列に驚かされた。それからヂエレミノ街で、二三回這入つたことのある『ヴィエネ』茶寮で、スペインに於ける最後の茶を取る。

午後七時になると、われ／＼は名残惜いスペインを後に佛伊の旅に立たねばならぬ。日ごろ親切であつた宿の主人や老婢小僕などに別れを惜しみ、「タキシ」に乗つて南驛へ急いだ。われ／＼は驛までの自動車賃を宿に拂つて置いたので、驛で「タキシ」を乗り捨て、サツサと中へ這入らうとすると、運轉手は聲荒らかに賃錢を請求する。私は宿で拂つてあると受取りを出して見せても、彼は往來の「タキシ」である、まだ貰つてゐないといつて承知せず、大に怒鳴り散らし、遂に巡査を呼んで來るといふ騒ぎとなり、驛頭毛色の變つた日本人と自動車やの喧嘩とあつて人だかりとなる。何分スペイン語でよくは分らないが、巡査の曰くには『事情はわかつたが、この自動車は金を受取つてをらぬ。往來の「タキシ」であるから、君らは賃錢をこれに拂ふべきであるが、宿屋の方の手違ひは宿へ行つて談判し給へ』と云ふにあるらしい。聞いて見ると、これも一應尤もの裁判であつて、たゞ

われは今や發車といふ間に、僅の金の談判に宿屋へ歸ることが出来ないのである。それゆゑ『分りました』と自動車へ賃金を拂ひ、聊か腹立たしいが、大に堪忍をして酒手をもやり、『有り難う』の言葉まで付け加へると、彼も恥入つて『ボン・ポヤーズ』と挨拶する。なほも私は巡査に面倒を煩はした禮をいへば、巡査も舉手の禮をして去つて行き、群衆も退散した。

われはかくの如くにして、不思議な經驗をマドリイ驛頭に殘し、一月二十四日午後八時スベインを發したのである。いふなかれ、マドリイの最後の印象は好くない。恐らく宿屋に何か手違ひがあつたのであらう。あの親切な宿屋の主人が、故意にかくの如きことをする筈はないと信ずる。そしてわれは喧嘩の仲直りをして、快よく出發し得たことを感謝しなければならぬ。たゞ遺憾なことは、わが黒板博士はわれと同じ線路をバルセロナ邊ですれ違つて、明朝マドリイへ着かれることを、先刻公使館で知つたことで、遂にわれの旅程を變更することが出来なかつた。

(昭和三年十月)

第一印象

〔米國ヨセミテで會つた不思議な女の話〕

去年の夏歐米漫遊の途に上つた私共の乗船春洋丸の桑港へ着いたのは、八月の上旬でありました。従來排日の本場と聞こえて居るカリフォルニア州を、先づ桑港、バークレー、スタンフォード大學と見物して歩きましたが、一向『ヂヤップ』の呼聲も耳にせず、却つて張合がない位でした。やがて倉田、小牧の兩君と共にロス・アンゼルスを経て、南太平洋鐵道に由つて、米大陸を東へ横斷することに致し、其の道すがら所謂國立公園として名高い、ヨセミテの溪谷を一見しようと相談一決しました。

桑港を夜晩く出發して南行の汽車に乗り、マーセッドと云ふ驛に着いたのは、未明でありましたが、置いてけぼりになつてゐた寢臺車から出たのは、夜が明けてからでした。驛附近の『エル・カピタン・ホテル』で朝食を取りましたが、別に食堂でも差別待遇を受けた様子もなく、十六人乗りの乗合自動車で、西洋人の間に挟まつて、愈々ヨセミテ見物に上つたのは八時過ぎ。斯う云ふ自動車

が三四臺、まつしぐらに一路髪の如き道を東に走つて、段々山手に向ふのでありました。兩側に見るものは果てしもない林檎島で、此邊には随分多くの日本人も労働をしてゐることゝ想像しましたが、或る鐵道線路の交叉點で、働いてゐる白人の工夫が、逸早く車中の我々を見付けて、『チャップ』が居ると云つたのが、神経質の私の耳へ這入りました。是が米國へ着いてから一週間ばかりの間に聞いた、始めての『チャップ』の語でありました。それでそろ／＼これから排日が始まることゝ聊か心中不安を感じた次第であります。

二

途中一二回小さい村で休息して、自動車と人間に水を飲ませ一時間程走ると、次第に丘陵地となり、溪谷に近くなつて行き、やがてエル・カピタンと云ふ大きな花崗石の絶壁が巨人の様に立つてゐる下を通過しました。是は高さ二千尺と云ふステキなものです、それ程には感じません。それから愈々ヨセミテの谷の中へ這入り、正午頃『アワンネ・ホテル』と云ふインデアン式の立派な新しい宿屋の前で一同車を下りました。此の『ホテル』の建築は一風變りの様式で、而かも其の莊麗な裝飾には、建築専門の倉田君をはじめ、私共迄大に感心さゝれましたが、食堂の給仕女も粒が揃つて、凡てよく訓練せられ、我々有色人に對しても、少しも特別の態度を見せないのみならず、一般に「チ

ップ」を張り込む日本人をば寧ろ好遇する位に見えました。

此の宿で中食を済ましてから、四時頃我々が乗る可き車が來たと云ふので、出かけますと、今度の「ステージ」には、三十前後の若い小ギレイな米國婦人が一人乗つてゐるばかり、そこへ我々三人の日本人が合客として乗込む。宿の番頭が『御客はこれ切り』と云ひますと、件の女は『是は困つた仲間だ』と思つたのでせうか、一寸舌を出した瞬間を、我々のうちで見つけた人があつて、車が動き出してから『怪しからん』『矢張り排日だ、是からロス・アンゼルスの方へ行つたら大變だらう』と憤慨する人もあり、悲觀する人もありました。

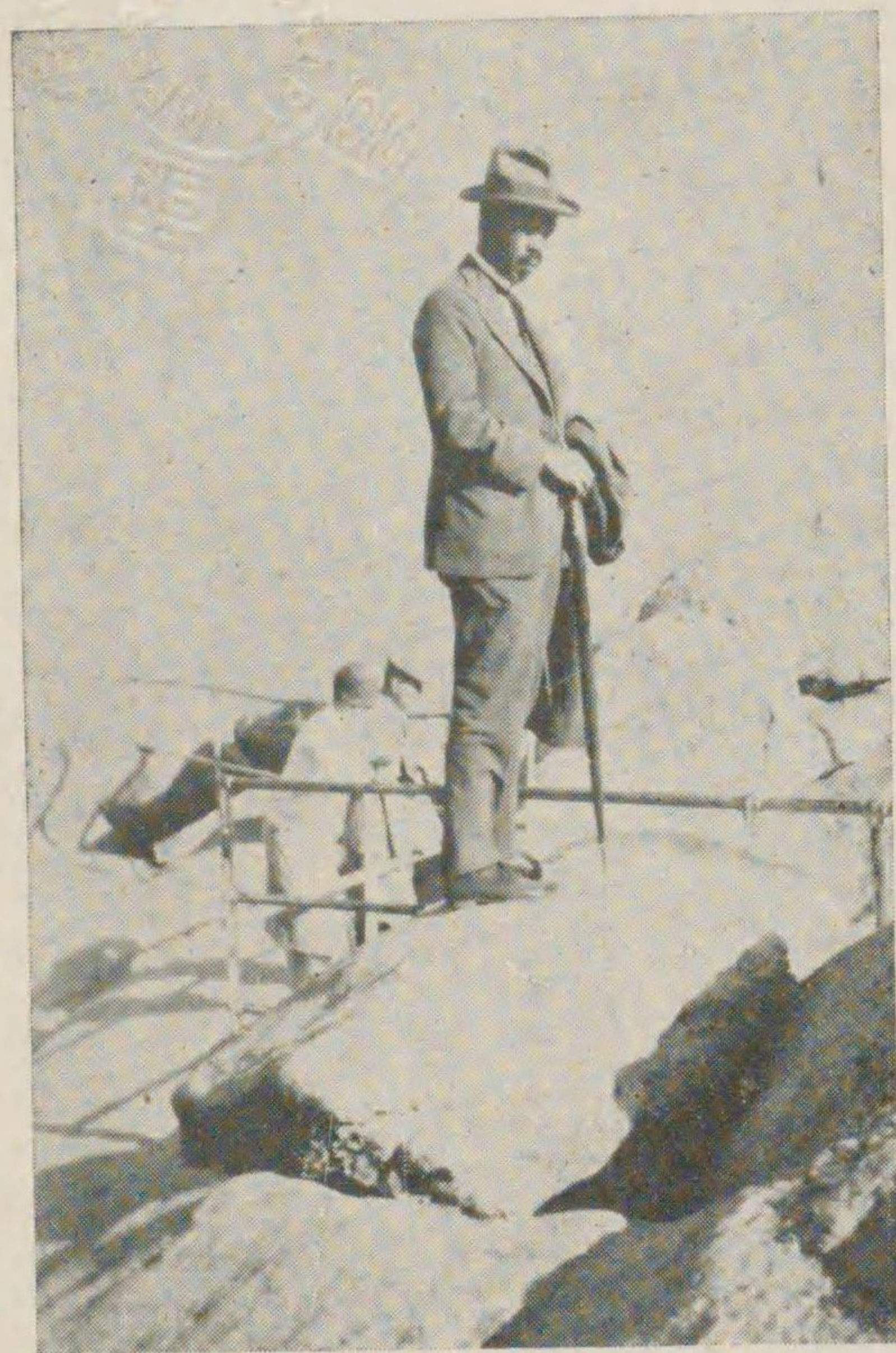
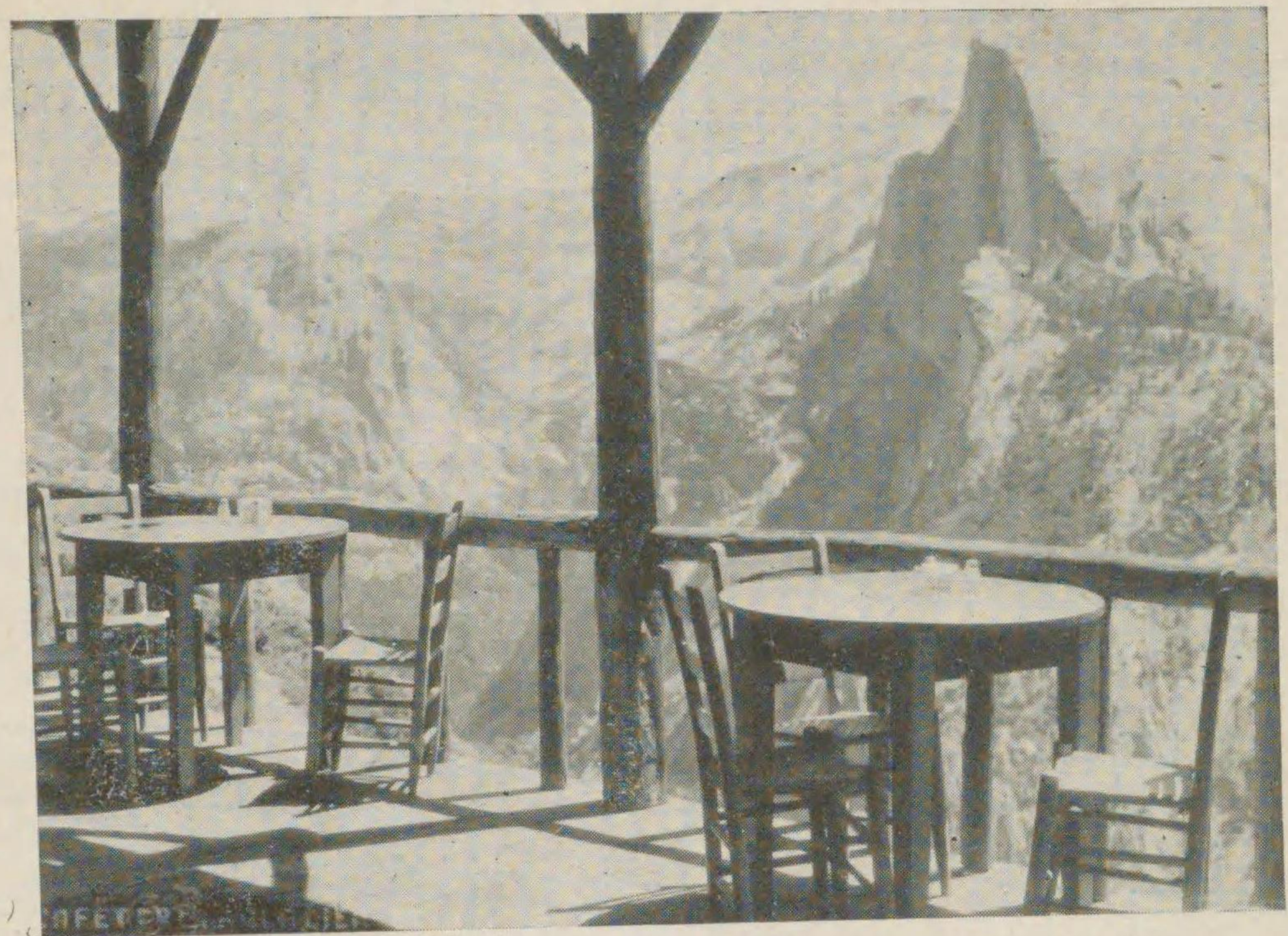
さて我々の行先きはグレシアー・ポイント(水河頂)と云ふ海拔七千尺の巔きで、今晚そこで一泊し、明日マーセッドの驛へ歸り着くまで、此の自動車の客は同じ人で、變らないことになつてゐるのですから、舌を出されてはタマらないのです。處が途すがら自動車は別の宿屋へ廻り、客を拾つたのでありましたが、そこでは二組の白人夫婦客が乗り込みました。而かも頗る意外であつたのは、其の一組は私共が春洋丸で桑港へ來るまで、横濱から同船したハーフエマンと云ふ獨逸人で、船中では一向物も云ひ交はしませんでした、顔は御互に知つてゐたので、『これは珍らしい』と話し合ふことになりました。他の一組はマーシユウス老夫妻で、紐育の商人、仲々氣輕な老人で、之が爲め車中は賑かになり、我々も無言でやり通すことが出來ず、遂には此等の人々や、彼女とも話をし

なければならぬことになりました。

三

自動車は険しい悪路をあえぎ／＼登つて、グレシアー・ポイント絶頂の宿屋へ著いたのは、丁度日暮時分でありましたが、此處は先の下から見上げた時、旗が立つて人が蟻の様に動いて居つた奇岩の巔邊であつたのには驚きました。懸崖の端からこわ／＼下を見おろすと、私共の中食をしたアワンネの宿は、直下數千尺の下に見えると思ふ凄じさです。何しろ米國と云ふ處は、自然も人間も突飛な處で、いつも輕業をやつてゐるやうな國だと思はれました。但し此の山上の宿はたゞ一軒の小さい家で、此の夕一時に到着した數十人の客を收容する餘裕がない位なので、宿の番頭が命令的に部屋の振割をして、お客は一言の氣儘も云へないと云ふ有様です。私共三人の日本人には、併し景色の佳い、谷に面した側の風呂付の部屋を當てがはれ、其の代りに一人床と二人床とが各一箇しかないので、私と小牧君とは「ダブルベッド」で二人寝なければならぬ事になりましたが、此の部屋の分配に關しても、我々は全く不平がありません。むしろ日本人に對して、充分の好意を表したやり方と思はれた位であります。

食事はみな隣の料理店の眺望の佳い露臺でやつて居りますが、一向給仕人は居りません。私共



(上)ヨセミテ溪谷グレシアー・ポイント旅館よりハーフ・ドームを望む

(下)グレシアー・ポイント岩上の著者

は何うしたらよいものかと、ウロ／＼して居りますと、例の舌を出した同車の女が、其の邊で早くも食事をして居りましたが、我々を見付けて『此の邊が景色が宜しいから御出でなさい』と席を指し、『此處は「セルフサービス」ですから、自分で食器を取つて来て、一々食物を貰つて來なくては』と、詳しく其の方法を教へて呉れました。實は私共は着米以來パークレーで一度、斯んな種類の食堂へ這入つた丈け、而かも其時は長く米國に居つた同伴の日本人が、一々世話をして呉れましたので、此のやり方に就いては始ど無經驗なので、スツカリ面喰つて居つたのでありました。

四

覺束なく食事を済まして本館の露臺へ出ますと、目の前の『ハーフ・ドーム』と稱せられる奇岩高さは海拔八千尺、ゾアーナルの瀧の音も幽かに聞える。そこへ上つて來た大きな黄い月は丁度満月で、だん／＼白く銀の様な光を山と谷に投げかけて、高く小さくなつて行きます。何と云ふ美しい景色でせう。何と云ふ不思議な景色でせう。飛行機を空中に止めて、天上から下界を見下した時の景色とでも云ひませうか。やがて角笛の音が聞えて、一同かの懸崖の處へ行きますと、ここで篝を焚いて、それを焼けたまゝ崖の上から、直下數千尺の山下へ突き落すのです。山下から見ると丁度火の瀑布の様に見え、珍らしい見物だそうですが、山の上では何だか馬鹿／＼しい丈けの感じ

でした。斯んな危つかしい處へ立つと、何だか自分もヒョッコリ身を投げはしないかと云ふ、恐迫觀念に囚はれざるを得ません。此の華嚴の瀧の様な處には、定めし一年に若干の身投げの男女があること、想像せられます。又大きな聲で叫ぶと、四方の山から反響が來ます。

さて宿へ歸つて來て再び露臺へ立つて、景色に見とれて居りますと、又た彼の女に出會しました。今度は二三の知合の人にも紹介して呉れましたが、未だ雙方とも名前を知らないのです、お互に「無名の日本人」「舌を出した女」たるに止まつて居りました。應接室には幻燈入りのヨセミテ高山植物講演が始まり、又た「ダンス」が隣室で始まりましたが、私達はやがて寢室へ引き込みました。窓外には月光を浴びた銀世界が夢の様に靜かに眠つて居ります。このまゝ眠るのも惜しく、屢々窓を開いて景色を眺め、遂には我々の不思議な女は果して何者だらう、舌を出した女が親切な女となつて行くのも意外であると、考へ廻はしながら、男二人が「ダブルベッド」の上で、何時しか眠りに陥りました。

五

次の朝我々八人組は、同じ運轉手の同じ自動車に乗込みましたが、今日はお互に全く親しい友人の様に氣心が置けなくなつて居りました。此の山上を出發して一路山をかけ下り、途中ワオンナの

村に小憩して、マリボサの巨木林を見物しましたが、是は例の寫眞でお馴染の大木に、「トンネル」が穿つてあつて、自動車が其の中を通り抜ける處があるのであります。だん／＼巨木林に近づきますと、丁度春日の山中を行く様に、就中下群中には全山の最古木「鼠色の巨人」と云ふのがあります。餘り高くもありませんが、随分太く直徑三十一尺あり、四千年の樹齡を保つてゐるとの事です。「セコイア」と云ふ杉か檜の類の樹です。其他之に次ぐ、『倒れたる帝王』『望遠鏡』などと名の付いた巨木があり、遂にかの「トンネル」のある樹を通過しますと、寫眞屋が「ピント」を合せて税關の様に待ち受けて居り、直ぐに記念寫眞を撮つてくれます。我々の珍らしい八人組の自動車が、巨木の「トンネル」を出かゝつてゐる寫眞は、其後シカゴで確に受取りました。それから巨木林の上群へ行き、見晴しの處へ出で、やがてワオンナの「ホテル」へ歸つて中食となりました。此の時は皆一緒の食卓で送別會をやらうと云ふ事になり、彼女は、我々の間に坐つて、色々食事のことにも面倒を見てくれました。それから悪い山道と暑い「アスファルト」の道を百哩近く走つて、マーセッドの驛へ着いたのは午後の五時頃。日本に居る時分には汽車よりも自動車の長い「ドライブ」をやつて見たいと思つたこともありませんが、今日はスツカリ自動車に閉口して草疲れてしまひ、やはり汽車の方が宜いと思ひました。さて八人組のうち私共三人の外は、皆桑港の方面へ行くので、こゝで二日間の楽しい一團が遂に解散されることに成りましたが、始めて互に名刺を交換し、將來の友誼を契るのも何だか

名残惜しい心地に堪えませんでした。あの若い女はアンニー・リポシュツと云ひ、紐育のブルックリンに住まつてゐる。一人旅をしてキュバの島へ行き、これからエーローストン公園を見物して、私共が紐育に着く時分には、家へ歸つて居るから、是非電話をかけて知らして呉れ、親兄弟にも會つて呉れと、堅い握手と堅い約束をして、我々は南北に別れて旅路へ上ることになりました。

六

ロス・アンゼルスからグラランド・ケニヨンの大峽谷を一見して、私達二人は倉田君と別れて、サンタ・フェー附近に「ブエプロ」土人の古跡を訪ね、シカゴからトレド、ナイヤガラを経て九月の上旬紐育へ参りました。それから東部諸地の見物に忙殺され、愈々九月十四日大西洋を『アクイタニヤ』の巨船で英國へ渡ることになりました。さてかのヨセミテで會つた不思議な女は、忘れると云ふではありませんが、何だか昔の話の様になつてしまひ、且つは一日を彼女の家に割く時間の餘裕は到底見つきりません。又た英語で電話をかける勇氣も到底ありません。併し呉々も云ひ置いた女に、一言の挨拶もしないではと思つて端書を出し、『遺憾ながら此地で再び御目にかゝることが出来ません、今度は日本でお目にかゝりませう』と云つてやると、次の朝電話がチリン／＼とけた、ましく掛つて来て、アンニー嬢からと云ふ事です。『親兄弟も皆な待つて居りますから、是非明晩夕食に來

て下さい』と泣くが如くに頼んで來るので、小牧君と私とは乗船の前日エール大學見物から歸つてからの忙しい時間を、彼女の爲めに割く大決心を致したのであります。

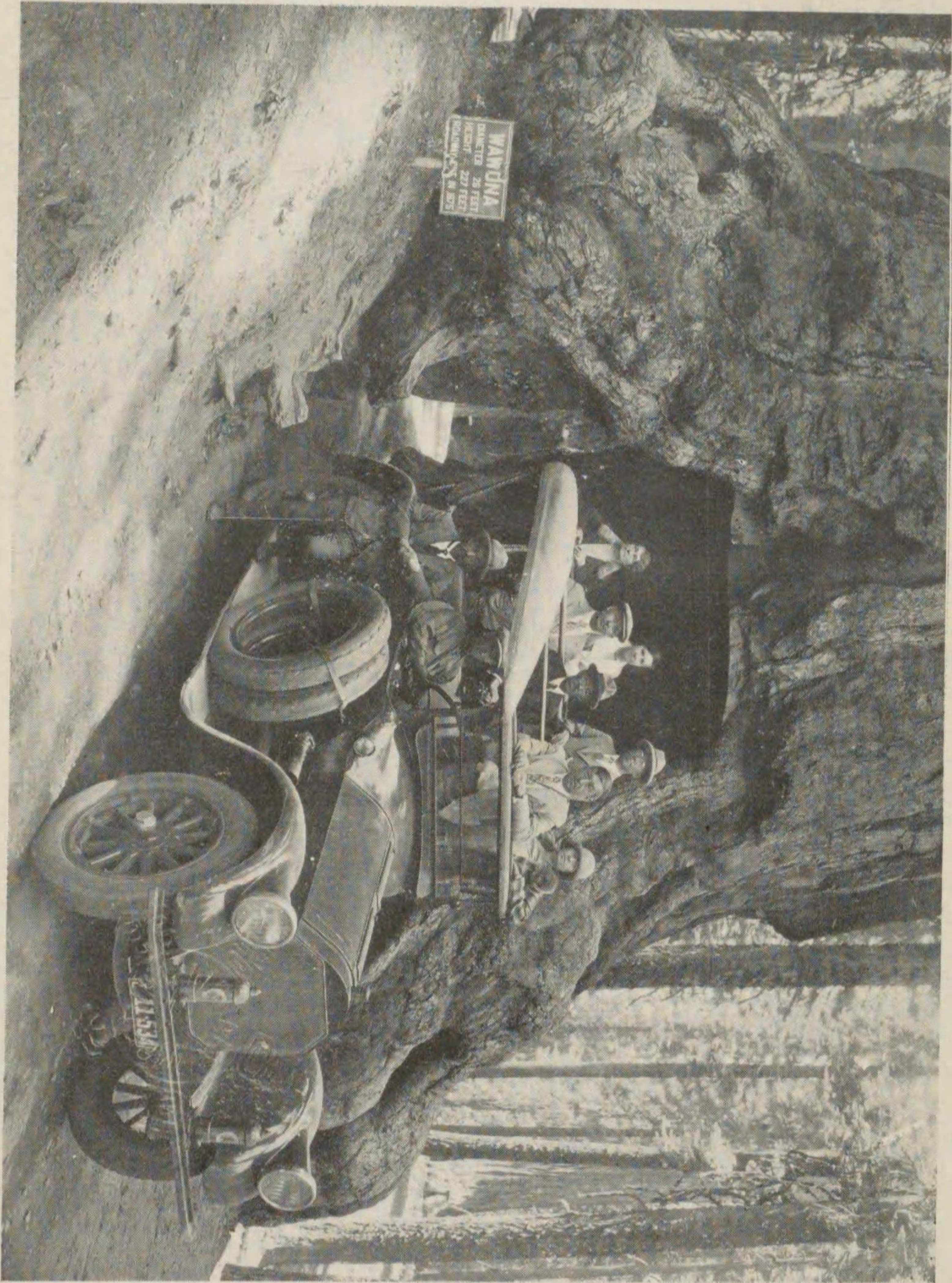
九月十三日は終日エール大學の見物にへ／＼に草疲れて、紐育へ歸つて來たのは夕方でありました。それからブルックリンまで、わざ／＼一面識の西洋人の御馳走になりに行く勇氣は、殆ど無いのであります。今更斷ることも出来ないで、屠所の羊の如く地下鐵道へ身を托し、それも勝手が分らないので乗り違へをやり、漸くブルックリンの某停車場へ上りついた時は、既に指定の七時を半時間も遅れて居りました。而して折悪しく雨は降り出し、暗は暮く不案内の土地を被ふて居りました。さて何の方角であらうか、地下鐵道から突然飛び出しては全く見當が付きません。彼女の家は何町何番地かと書いたものを探すと、これはしたり處書きのある手帳を宿へ忘れて來たので、もはや取りつく島もなくなつてしまひました。

七

私は此の時程困り果て、泣き度くなつたことは、生れて以來多くはありません。今更紐育の宿へ處書を取りに歸る譯にもゆかず、而かも一方アンニー嬢のシビルを切らせて待つてゐる姿を想像しては、嘆息の聲も出ず、たゞ氣がさせるばかりです。併し一つ考へ付いたのは、彼女は電話をかけ

たのであるから、電話帳に其の名前と宿處とが載つてゐるだらうと云ふことで、とある店屋へ飛び込んで電話をかけさせて貰ひましたが、他人名前の電話と見え、彼女の名は出て居りません。今や萬事休すと諦めた時、平生自分の家の電話番号すら、一寸忘れさうになる程の私に、不思議なことに彼女の電話が『スローカム〇七七〇』と云ふ珍しい番號であつたらしい事を、うる覺えに覺えて居つたことで、とにかく試みに小牧君に掛けて貰うと、あゝ嬉しやアンニー嬢の聲が聞こえて『一體何してゐるのです、先きから待つて〜』と云ふので、此の事情を話し番地を聞き、自動車を飛ばして其の家へ漸く着いたのは、指定の時間を遅れること一時間半にも近く、アンニー嬢をはじめ家族一同は、背延びをして戸口まで出て居り、死んだ人の歸つて来たかの如く歓迎して、直に食堂へつれ込みました。

私は此の騒ぎに折角お土産に持参した船で貰つた小さい花瓶の包みを、「タクシ」の中へ忘れてしまひましたが、アンニー嬢は『そんな事はどうでも宜しい』と年老いた人のよささうな兩親をはじめ、兄嫁や可愛い甥の子供などに紹介し、甲斐々々しく自分で食卓を斡旋して、日本人が好きであらうと豫て用意の心盡しの魚の料理と、それにも増した溢るゝばかりの親切に、私達は汗を拭きながら、やがて氣も落付き、いつしか今日の草疲も淋しい旅の思ひも忘れて、暖い家庭の人となつて、四方山の話しに時の移るのを忘れてしまひました。彼女の父母はハンガリー人で、日本へは来た事



ヨセミナ巨木林に於ける著者一行 (右端リボシエツツ機)

がないけれども、桂公爵の名前まで覚えて居るのには意外でありました。なほ階下に住んでゐる彼女の兄などにも紹介し、寝てゐる子供をも起して来て、珍客をあやなすには、何うした此家の歡迎かと自分の運命を疑ふ位でありましたが、夜が更けて十一時にもなると、さらに「アイスクリーム」を註文して之を饗し、十二時になつても話は更に盡きません。

八

併し私共は此の名残惜しいアンニー嬢の一家と別れなくてはならない時刻になりました。すると兄なる人が自分の「ガラージ」から自動車を出して来て、彼女の父と一緒に私達をブルックリンの町外れの驛まで乗せて送つて呉れることになりました。彼女は「私も一緒に御送り致します」と云ふと、老父は『お前は女だから、此の夜更けには失禮するが宜い』と押しとどめ、我々はモンドゴメリー街頭で、手を振り別を惜しむ彼女を、振りかへり振りかへり見送りました。

* * *
ヨセミテの不思議な女の話はこれで終ります。私は此の上多くの抽象的な議論を書くことを止めます。たゞ彼女の我々に對する最初の挨拶は、一寸舌を出したことであつたのです。勿論それは何等深い意味もなく、若い女の仕草に過ぎないのでせうが、我々は危く此の時の『第一印象』によつ

て彼女を批評し、或は全米の婦人をも危く批評する處であつたのです。然るに、彼女は次の瞬間から我々に最も親切なる女となり、終には全米の婦人に對する我々の最も深い感謝を代表する一人となつたのでした。彼女の純真な友情と利害を離れた親切、私共はヨセミテの樂しかつた旅と共に、一生を通じて決して忘れることはありません。『第一印象』の最も貴ぶ可く、又た最も頼む可からざることは、此の話によつても知られることと思ひます。要するに私は最も善い米國の印象のみを齎して、米國を去ることが出來たのを喜ぶ外はありません。

私は今一人の最も懇切なる米國の友人マクリン氏に向つて『アクイタニヤ』の船中から『私はいま最も愉快なる記憶を持ちながら米國を去る處です』と云ふ感謝の電報を打つたことを幸福とするのであります。而して此の歳晩にアンニー嬢から著いた「クリスマス・カード」を見ながら、終に此の一篇を草することに致しました。(昭和四年一月)

美人畫廊

一

去年の冬の慌しいドイツの旅の中にも、ミュンヘンで見物した二つの忘れ難いものがある。その一はドイツ博物館(Deutsche Museum)と、他の一は故宮にある美人畫廊(Schönheitengalerie)とである。前者は、自然科学と科學工業の造詣をば、一堂に集めた博物館であつて、その規模の宏大と設備の完全とは、眞に私の如き素人をも感服せしめるに餘あるものであつて、これは世界大戦前から着手せられ、廿餘年の後漸く一兩年前公開せられたものであるといふ。

二十世紀におけるドイツ人の科學の方面における努力と、將來における抱負とが、遺憾なくこの大記念物に具體化せられてゐるのは、羨ましい限りであるが、これに反して後者は百年以前バイエル王ルドウイヒ一世が、當時歐洲に澎湃たる「ロマンチック」の風潮に棹して、この南獨の都に建立した、小やかにしかも世に珍しい一種の美人博物館である。兩者の對照の如何に大にして、如何にその性質を相異にしてゐるかは今更云ふまでもないが、私どもはこの極端に違つた二つのものを併

せ有するミュンヘンを愛する。ミュンヘンの誇りは決してその一を持つのではなく、その二つを併有する所にあらねばならぬ。

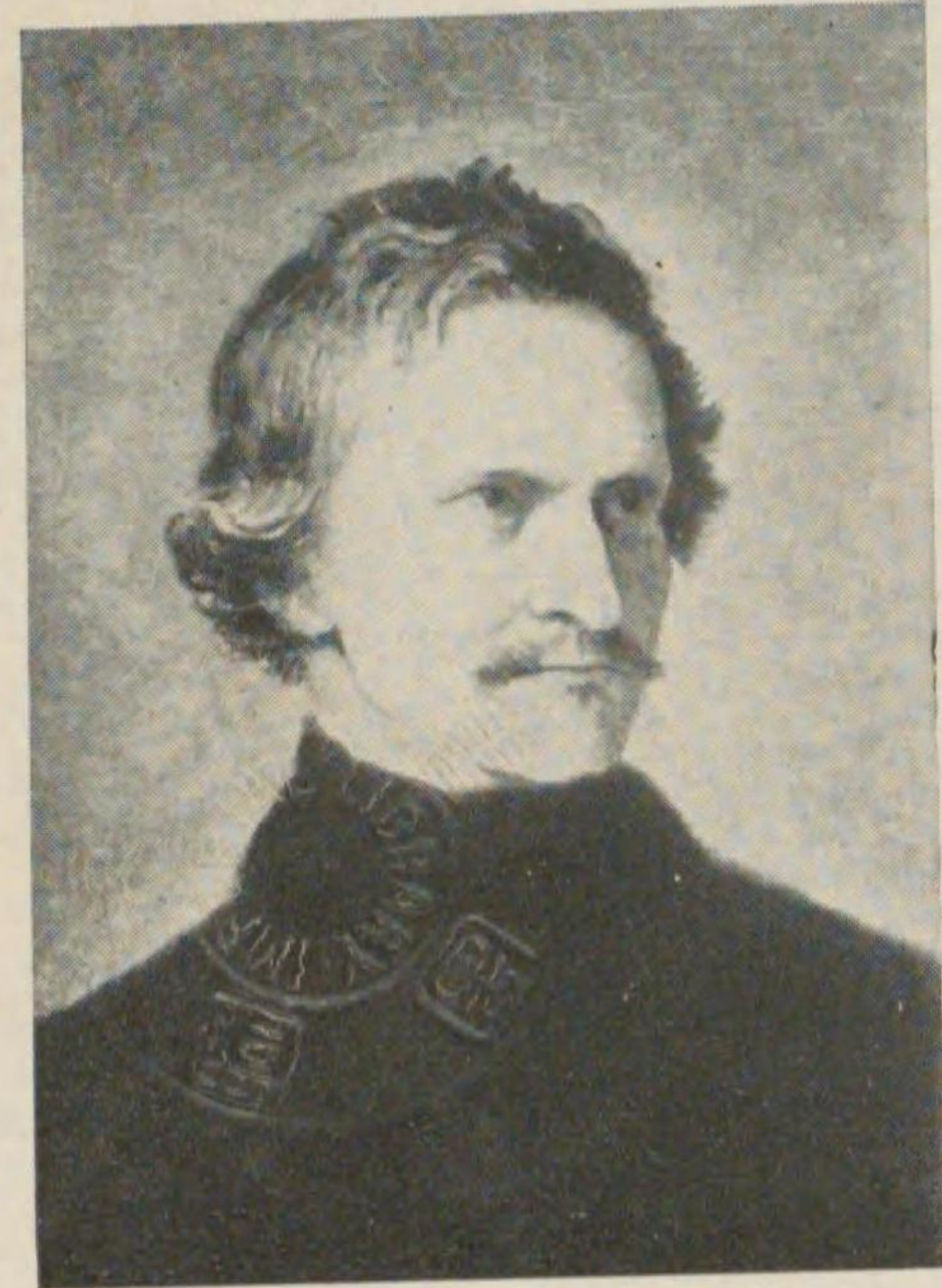
藤懸君と私とは、歐洲各地で見飽きた「バロツコ」乃至「ロココ」式のバイエル王宮の各室を、飛ぶが如くに歩いて、一刻も早くこの寒い迷路の様な王宮の死骸を脱出し度いと思つた。三階のルドウイヒ二世の諸室を見てから、二階の大階段の處に出てヤレ〜と思つた時、番人がやつて来て、なほ先に近頃漸く公衆に開かれた諸室があるから見ないかと、無理に勧めるので、遂に數名のドイツ人の見物客と一緒に、別の切符を買はされてしまつた。先づ第一に見たものは美しい玉座のある大舞踏室。他の人々は大いにこれに感心してゐたが、私共には一向珍しくはなく、これはツマらぬ處へ這入つたと、聊か失望しながら次へ進むと、今度は實に他の王宮には見られない珍しい室であつて、却て他の連中と案内者が、忙しく我々をせき立てるのを残念に思ふ位であつた。

それは別に立派な裝飾のある大きな部屋ではない。たゞこの室と次の室との壁間に掲げてある三十八枚の美人の肖像に由つて名を得たルドウイヒ王の『美人畫廊』であつたからである。私は今日此處へ来るまで勿論この畫廊のあることを知らなかつた。併しこれこそルドウイヒ王の蒐集品として、かのエギナの彫刻を飾つた『グリーブトテーク』よりも、『ピナコテーク』の繪畫館よりも、彼の人格と彼の時代とに應はしい、「ロマンチック」の産物であると、感ずる外はなかつたのである。

二

此の三十八枚の美人畫を、ルドウイヒ王の命に由つて、一八二七年から二十餘年間、毎年二三枚宛を描いたのは、マインツ生れの宮廷畫家スチラー(Joseph Karl Stieler)その人である。たゞし、その内二枚だけは、彼の死後甥に當たるヂュルク(Friedrich Dirck)の手に成つたものである。此等の畫家は固より當時朝廷に仕へた美術家として、穩健老熟のフランス畫風を具へた人には違ひないが、畫家として特別の位置を美術史上に占める人ではない。寧ろ此の美人畫廊の肖像畫家としてののみ、我々に記憶せられるに過ぎない畫家の名であらう。

さて此の畫廊の美人は如何なる方法で選擇したかといふに、一方はスチラーが王命を受け、國內を巡遊して探し出したものもあるが、他方には王が親ら宮中の交際社會に出會してゐる人々の中から選り出したものもある。更にはまた市中で通りが、りに王が見付けたものも二三には止まらない。勿論その大部分は國內のドイツ女であるが、外國人も少しは交つてゐる。又たその女の家柄索性を調べて見ると、王の周圍を廻る后妃王女などが四人、バイエルン貴族高官の出が十三人、英蘇國の貴婦人が四人、ギリシヤ、イタリー婦人が各一人、ユダヤ女が一人、一般市民の女が六人、裁縫師、靴屋、肉屋のごとき商工の女が三人、女優、踊り子の類が五人といふ風に、上は雲の上人か



(上) バイエルン王ルドウイヒ一世
(下) フロレンチ侯爵夫人マリアナ



(上) グムベンベルグ男爵夫人フリードリケ
(下) アースキン夫人ジェーン

ら下はいはゆる賤が伏屋の娘までを網羅してある處が面白い。この『美人畫廊』のため美人畫を描くといふ事によつて、それが國中の女性間に非常な人氣を呼び起こし、苟も女と生れたらんものは、この畫廊中の一たらんとすと、大執心を起こした連中が多かつたと同時に、之を苦々しく思つた人も多少あつたとは、想像に餘りある處である。しかし王自身の熱心は大したもので、自ら屢々スチラーの畫室を訪問して、「モデル」女の姿勢や服裳までを一々指圖したと稱せられる。

私はこの畫廊の壁間に一列に並べてある、等身大の美人の半身肖像を一瞥した時には、實にいづれあやめと引きぞ煩ふといふ感で、そのうち何れが一番美しいか容易に判じ兼ねる外はなかつた。中にはヘレーネ・セドルマイルの如き十四歳や、マリヤ・デイチュの如き十五歳の、あどけない娘もあるが、大抵は十七八歳から二十五六歳の女盛りの美人揃ひである、選りに選つた當代の國色を一堂に集めたのであるから、その何れ劣らぬ美しさを競うてゐるのは、固より無理のないことである。さてルドウイヒ王はこれ等の女性の肖像を畫廊に聚めるに際して、その女性の美しさをたゞ天然の作つた美術品の一として、鑑賞したばかりであつたか。或は何等かそれ以上に、或る場合には戀愛に類したことはなかつたか何うか。それは私の保證する限りでもなく、又有つたとて何の不思議はない。併し一番最初に描かれた女アウギユステ・ストローブルに向つて、王が或る舞踏會の夜『何でも願ひ事があれば叶へてあげるから』と聞いた時に、女は『陛下よ、たゞ一つ。それはヒルベル

と結婚が出来る様に」と答へたので、王は聊か思はく外れであつたといはれてゐる。又マキシミリアーネ・ボルザーガの家に、王が屢々出かけて娘に會ひに行くと、親父は怒つて王の來るのを喜ばない。漸く頼み込んだ『美人畫廊』に入れる肖像を描くことも、辛うじて條件附で許された。即ち畫室へ行くには必ず附添の女を伴ふといふ條件である。この類の話は一々の美人について多少ある様であるが、要するに王の態度は「ロマンチケル」の感情以上には餘り出でゝゐないといふことが出来る。

三

さて畫廊に掛かつてゐる美人の肖像を一々見て行くと、その大部分は固よりドイツの女性の特徴をそなへた顔である。女優シャーロット・ハーンの如き、グムベンベルグ男爵夫人フリーデリケの如き、即ちその代表者の一二である。併しまたフロレンチ侯夫人マリアンナの如きイタリー式の艶妖な美人もある。カサリナ・ボツアリスの如き東洋風を交へたギリシヤ美人もある。或はまたジェーン・アルスキーンの如き北歐型の氣高い英國美人もある。併し此等の例外を除いても、否此の例外を加へても、全體を通じてそこに時代の趣味の通有性が、あらゆる肖像の中に一貫してゐる様に思はれる。勿論それには同じ畫家の筆に成るといふ理由もあるには相違ないが。

それは先づその顔立ちがすべて面長の顔であることである。現代式の丸顔の美人は三十八人のう

ちに只の一つも見出されない。大きな眼は愛らしく閃き、波形の唇、細い顎、そして豊かな少し撫氣味の肩。此等は當代婦人の理想的型式である。「優雅と可憐」(Anmut und Lieblichkeit)之は當時の社會が女性に要求した所の性情である。サフヒール(Saphir)の『優しき美は描ける火の如し、受取る能はざる證書に過ぎず。優雅とは形線をもつて鎖ぢ込まれたる魅力の謂なり。吾人はその本體を説明する能はず、それは一の婦人の房室なれば。されば——たゞ之を感受し、之を禮讚すべきも、之に觸るゝこと能はざるなり』といったその優しさが、女性の最も秀れたる性情とせられて居つた時代である。

しかしてこの優しさと彼の美はしさとを兼備へたものが、即ち當代の文藝に、當代の美術に現れ來つた理想的の肉體と精神との結合であつたのである。ロマンチケルのルドウイヒ王は之を現實の人間に求めて、有聲の繪畫に詠するのみならず、これを無聲の詩歌に傳へて、萬世に残さうとしたのが、即ちこの『美人畫廊』の生れ出でた所以であつたのである。

優雅と可憐とを理想とした十九世紀前半の美人には、固より現代の如き艷容と嬌態とは見られない。少し位は惡の分子があつても凄味のある美人、智力を具へた強い調子のある美人、更には容貌は左程ではなくとも、完全に發達した四肢胸幹を有する健康的肉體美人。これ等はルドウイヒ王の未だ知らなかつた——かつてはギリシヤ時代には幾分識られてをたつたかも知らないが——第二十世

紀の美人である。彼をして今日第二の『美人畫廊』を作らしめるならば、恐くは畫廊にある様な半身像には満足せずして、全身の美を露はに發揮せる『ミス・アメリカ』の寫眞の様なものを、宮廷畫家に描かしために違ひない。

四

私は今こゝに『美人畫廊』の建立者たるルドウイヒ一世王について、多くを語る邊を持たない。實に彼はゲーテがいつた様に『王者の位と共に生れながらに美しき人間性を有する王』である。従つてかくの如き人が世に現れることは實に稀有のことであつた。彼は理想と驚異の世界に不撓の精神を以て突進せんとした、「ロマンチック」時代の人格の最も典型的なる一人であつた。そして彼の位置と境遇とは、その理想とする處を遺憾なき迄に實行し得た幸福な人であつた。彼が古代の藝術、現代の美術、文藝の恩人として如何ばかりの貢獻をなしたか、今一々數へ擧げるにも堪へないのであるが、彼は未だ太子の時已に、エギナのギリシヤ神祠の破風彫刻を蒐集したのであつた。

この珍しい『美人畫廊』は、しかし必しもルドウイヒ王の創意ではない。已に彼の祖先大選舉侯カール・アルベルトは、フランス貴族の美人十六人の畫を作らしめ、ニムフェンブルグ城のバーデンブルグにその畫を掲げたといはれてゐる。私は見ないが今尙その一部が残つて居り、何れも「ロココ」

式美人の典型を現してあるとの事である。又カスセル附近のウイルヘルムスタールにも、チツシユ
 パイムがウイルヘルム八世侯のために作った『美人畫廊』があり、更にその以前に英國ではチャー
 ルス二世の爲に、サー・ピーター・レーリーが描いた『ウインズル美人衆』(Windsor Beauties)なる
 ものが、ロンドンの郊外ハンムトンコート宮に残つてゐるのである。(その畫のうちには銅貨の上に
 現された『ブリタニヤ』女神の「モデル」になつたリツチモンド侯夫人の肖像もある)。かの様に美人
 畫廊なるものは、ルドウイヒの創めて作った畫廊の種類ではないが、従来の畫廊の肖像は皆貴族の
 女、王室に關係のある婦人から選擇して描いた特殊の社會の女性にのみ限られて居つた。然るに此
 のルドウイヒ王の畫廊に至つては、すでに述べた様に、あらゆる階級から貴賤を問はず、身分を論ぜ
 ずして選出した處に、大に異つた意義がある。我々は之に由つて第十九世紀初半における「ロマン
 チーク」時代、女性崇拜時代の女性美に對する理想と、此の理想が現實の世界に如何に個體として
 具體化せられて居つたかといふことを、文學の上に現れた形のない美人以外に、たとへ畫ける美人
 には過ぎないにせよ、なほその片影を知ることが出来る點において限なき興味を感じるのである。

五

私はルドウイヒ王が人間の創造した彫刻繪畫の如き造形美術の作品以外に、自然が作り出した山

水の美と人間の美の二つの中、山水の美よりも一層一時的のものであり、且つ決して再び同じもの
 が作られない人間の美を、造形美術と同様永く人世に傳へなくてはならぬと考へた處に、共鳴せざ
 るを得ないのである。洵に此の美術の作品は、彫刻や繪畫と同じ程度に、或は又それ以上に、貴く
 且つ美しいものであらねばならぬ。併しそれと同時にそれ等のものよりも、一層早く滅び行くはか
 なきものであり、又一層個人の私有的欲望に鎖ぢ込められてしまふ性質のものである。それ故之を
 永遠に傳へて、公衆に残すことの色々困難な事情にあることは、人世の悲しい約束であると諦める
 外はない。たゞ過去の歴史においてのみ、ルドウイヒ王の如き王者のみ、その趣味と權勢とを以て、
 この人間美の、或は人間美の形骸の聚集を、不完全ながらも成し得たものであることは、私がブル
 ツクハルトと共にその眞なるを覺ゆるのである。

畫廊を出でた私達は、王宮の門衛の處にある、此の畫廊に關する繪葉書や冊子を買求めた。そし
 てノイハウゼル街の古めかしい『アウグスチーエル・ビーヤハウス』に名物のビーヤを傾けて、藤懸
 君と共に清長や歌麿の美人畫を論じた。そして再びこの畫廊を訪ふ暇もなく、ドイツ博物館を一見
 した後、遂にスイスへ旅立つたのである。(昭和四年二月)